

歌くとも一定家の歌末句の白

女の姿とどめ得ぬ、心ぞつらき諸共に、レテ誦實にや歎くとも、戀ふとも逢はん道やなき、地誦君葛城の嶺の雲と、詠じけん心まで、思へばかゝる執心の、定家葛と身はなりて、此御跡にいつとなく、離れもやらで葛紅葉の、色焦がれまとはり、荆の髪もむすほほれ、露霜に消えかへる、妄執を助け給へや。

ロンギ地誦舊りにし事を聞くからに、今日も程なく吳織、怪しや御身誰やらん。レテ誦誰とて、亡き身の果は浅茅生の、霜に朽ちにし名ばかりは、残りても猶よしぞなき。地誦よしや草葉の忍ぶとも、色には出でよ其名をも、レテ誦今は包まじ、地誦此上は、我こそ式子内親王、是迄見え来れども、誠の姿はかけろふの、石に残す形だに、それとも見えす葛、苦みを助け給へと、云ふかと見えて失せにけり。云ふかと見えて失せにけり。(中入)
ワヤ上歌誦夕も過ぐる月影に、夕も過ぐる月影に、松風吹きて物凄き、草の蔭なる露の身を、思ひの玉の数々に、弔ふ縁は有難や。弔ふ縁はありがたや。
後レテ誦夢かよ闇の現の宇津の山、月にもたどる葛の細道。昔は松風蘿月に詞を交し、

朝の雲夕の雨！
楚の襄王の神女
を羨みし故事

翠帳紅閨に枕を並べ、地誦さまざまなりし情の末、レテ誦花も紅葉もちりぐに、地誦朝の雲、レテ誦夕の雨と、地誦古事も今の身も、夢も現も幻も、共に無常の、世となりて跡も残らず、何なかくの草の蔭、さらば菫の宿ならで、外はつれなき定家葛、是見給へや御僧。ワヤ誦「あら痛はしの御有様やな、あら痛はしや。佛平等説如一味雨、随衆生性所受不同。

レテ誦「御覽ぜよ身は仇波の立ち居だに、亡き跡までの、苦しみの、定家葛に身を閉ぢられ、かゝる苦しき隙なき所に、有難や只今讀誦し給ふは藥草喻品よなう。ワヤ誦「なかくなれや此妙典に、洩るよ草木のあらざれば、執心の葛を掛りはなれて、佛道ならせ給ふべし。レテ誦「あら有難や實にもく、是ぞ妙なる法の教、ワヤ誦「普き露の恵みを受けて、レテ誦「二つもなく、ワヤ誦「三つもなき、地誦「一味の御法の雨のしたどり、皆濕ひて草木國土、悉皆成佛の機を得ぬれば、定家葛もかゝる涙も、ほろくと解けひろければ、よろよろと足弱車の、火宅を出でたる有難さよ。此報恩にいざさらば、ありし雲居の花の袖

月の顔はせー美しき形容
柱の黛一月の柱の語より月のこ
とにいよ
葛城の神姿一前
の葛城を見よ

昔を今に返すなる、其舞姫の小忌衣、シテ「おもなの舞の、地謡「有様やな。(序ノ舞)シテ、ワカ謡、
おもなの舞の有様やな、地謡「おもなや、面はのの有様やな。シテ「本より此身は、地謡「月の
顔ばせも、シテ「曇りがちに、地謡「柱の黛も、シテ「落ちふるよ涙の、地謡「露と消えて
もつたなや葛の葉の、葛城の神姿、恥しやよしなや、夜の契の夢の内にと、有りつる所
に歸るは葛の葉の、元の如く、はひ纏はるよや定家葛、はひ纏はるよや定家葛の、儂な
くも形は里れて失せにけり。

咸陽宮

梗 燕の太子丹、秦に質たりしが、逃れ歸りて恨を報いんとし、荆
軻、秦舞陽の二人を遣して、始皇を刺さしむ。始皇、花陽夫人
に琴曲を奏せしめて之を妨げ、事遂に成らず。此曲は此史
概 談を脚色せり。(五番目)

シテ 秦始皇 シテ 花陽夫人 ワキ 荆軻
ワキツレ 秦舞陽 ワキツレ 大臣 狂言 宮人

シテ「そもく、此咸陽宮と申すは、都のまはり一萬八千三百餘里、地謡「内裏は地より三里
高く、雲を凌ぎて築きあけて、鐵の築地方四十里、シテ「又は高さも百餘丈、雲路を渡
る雁がねも、雁門なくては過ぎがたし、地謡「内に三十六宮あり、眞珠の砂瑠璃の砂、黄
金の砂を地には敷き、シテ「長生不老の日月まで歳を並べて、夥し、地謡「帝の御殿は阿房
宮、銅の柱三十六丈、シテ「東西九町、地謡「南北五町、シテ「五丈の旗矛、地謡「りうし
やの雲居、シテ「さながら天に、地謡「飄り、上登れば玉の階の、登れば玉の階の、

築土一外圍の塼
塼

長生不老一長生
殿不老門
りうしや一覆道
を空に架したれ
ばそこを通る車
を籠車といふな
らむ

金銀を磨きて輝けり。たゞ日月の影を踏み、蒼天を渡る心地して、おのく肝を消すとかや。おのく肝を消すとかや。

轅門一軍門

山遠雲埋行客
跡松高風破旅
人夢一朗詠集
の詩句

指圖一地圖

一雙「秦舞陽」思ひ立つ、朝の雲の旅衣、落葉重なる嵐かな。ワキ「山遠うしては雲行客の跡をうづみ、秦舞陽」松高うしては風旅人の夢を破る。ワキ「たとひ轅門は高くとも、秦舞陽」思ひの末は、ワキ「石に立つ、ワキ、秦舞陽上歌詠」やたけの心あらはれて、やたけの心あらはれて、遠山の雲に日を重ね、やうく行けば名も高き、咸陽宮に著きにけり。咸陽宮に著きにけり。

ワキ「急ぎ候程に、咸陽宮に著きて候。まづ奏聞申さうするにて候。如何に奏聞申し候。燕の國の傍に、荆軻秦舞陽と申す兩人の者、高札の表にまかせ、燕の指圖の箱、竝に樊於期が首を持ちて、是まで参内申して候。狂言「シカく、大臣「何と申すぞ。燕の國の民に、荆軻秦舞陽と申す兩人の者、燕の指圖の箱、ならびに樊於期が首を持ちて参内したると申すか。大臣「さん候。レテ「急いで参内させ候へ。大臣「畏つて候。只今のよしを奏聞申してあれば、急いで参内させよとの宣旨にて有るぞ。さりながら御大法の如く、太刀刀を汝預かり候へ。狂言「畏つて候。如何に方々へ申し候。急いで御参内あれとの御事にて候さりながら、御大法の事にて候間、面々の太刀刀を預かり申して参内させ申せとの御事にて候ぞ。太刀刀を賜はり候へ。ワキ「いかに秦舞陽、太刀刀を参らせよと承り候が、何と仕り候べき。秦「御大法にて候はど只参らせられ候へ。ワキ「さらば参らせうするにて候。狂言「シカく。ワキ「荆軻は佩劍を解いて威儀をなし、節會の儀式に従ひて、雲上遙に見渡せば、秦「金銀珠玉の御階を踏み、三里が間を登り行けば、ワキ「薄氷を踏む心地して、荆軻は既に登れども、秦「跡に立ちたる秦舞陽、身體わなよき手を押して、登り兼ねてぞ休らひける。ワキ「あ

節會一恒例の朝儀をいよ

御大法一控のこと

候。燕の國の民に、荆軻秦舞陽と申す兩人のもの、燕の指圖の箱、竝に樊於期が首を持ちて只今参内申して候。レテ「何と燕の國の傍に、荆軻秦舞陽と申す兩人のもの、指圖の箱、竝に樊於期が首を持ちて参内したると申すか。大臣「さん候。レテ「急いで参内させ候へ。大臣「畏つて候。只今のよしを奏聞申してあれば、急いで参内させよとの宣旨にて有るぞ。さりながら御大法の如く、太刀刀を汝預かり候へ。狂言「畏つて候。如何に方々へ申し候。急いで御参内あれとの御事にて候さりながら、御大法の事にて候間、面々の太刀刀を預かり申して参内させ申せとの御事にて候ぞ。太刀刀を賜はり候へ。ワキ「いかに秦舞陽、太刀刀を参らせよと承り候が、何と仕り候べき。秦「御大法にて候はど只参らせられ候へ。ワキ「さらば参らせうするにて候。狂言「シカく。ワキ「荆軻は佩劍を解いて威儀をなし、節會の儀式に従ひて、雲上遙に見渡せば、秦「金銀珠玉の御階を踏み、三里が間を登り行けば、ワキ「薄氷を踏む心地して、荆軻は既に登れども、秦「跡に立ちたる秦舞陽、身體わなよき手を押して、登り兼ねてぞ休らひける。ワキ「あ

斯其碩不
覽玉淵者未
也文選左太冲
吳都賦文句
てんごく典獄
か

大床廣間
胡床床几

あ不覺なりとよ秦舞陽、燕のいやしき住居にならつて、玉殿を踏む恐ろしさに、燕臆して上りかねけるか。秦「それをなさのみ諫め給ひそ。其碩礫に習つて玉淵を窺はざるは、燕麗龍の蟠る所を知らず。地「ゆに理とててんごくは、さしも厳しき禁中に、轅門を解いて許しけり、轅門を解いて許しけり。

大臣「帝は之を聞しめし、隨時の節會を執り行ひ、燕使の參内を待ち給ふ。ワ「秦舞陽荆軻は大床の、胡床に參著申しけり。秦「まづ秦舞陽進み出でて、樊於期が首を皇帝の上覽に供へ立ちのけば、大臣「帝は笑める御氣色、御心も釋けて見え給ふ。ワ「其時荆軻進みよつて、燕の指圖の箱の蓋を開き、上覽に供へ立ちのけば、レ「不思議やな箱の底に劍の影、氷の如く見えければ、燕既に立去り給はんとす。地「荆軻は期したる事なれば、御衣の袖にむんと縋つて、劍を御胸にさしあて奉りけり。花陽后「あさましや聖人人にまみえずとは、今此時にて有りけるぞや。あらあさましの御事やな。レ「如何に荆軻、秦舞陽もたしかに聞け。我三千人の后を持つ。其中に花陽夫人とて琴の上手あり。

玉の小琴玉の
緒即ち命の語を
言掛く
琴柱に落つる
雁の列を喩ふ

されば毎日怠る事なし。然れども今日は汝等が參内により、いまだ琴の音を聞かず。こ
とさら今は最期なれば、片時の暇をくれよ。彼琴の音を聞いて、黄泉の道をも免れうす
ると思ふは如何に。ワ「いかに秦舞陽、さて何と有るべきぞ。秦「是程まで手籠申すう
へは、片時の暇ならば參らせられ修へ。ワ「さらば片時の御暇を參らせうするにて候。
レ「如何に花陽夫人、急ぎ秘曲を奏し給へ。花陽「さらば秘曲を奏すべし。本より妙なる
琴の音に、飛ぶ鳥も地に落ち武士も、やはらぐ程の秘曲なれば、ましてや今は玉の小
琴、さこそは御手も盡されけめ。地「花の春の琴曲は、花風樂に柳花苑、柳花苑の鶯は
同じ曲の囀り、月の前の調は、夜寒を告ぐる秋風、雲居に渡れる雁がね、琴柱に落つる
聲々も、涙の露の玉章、たまさかに、たまさかに、人はよも白糸の、調を改めて、君き
けや君きけや、七尺の屏風は、躍らば越えつべし、羅毅の袂をも、引かばなどか切れざ
らん、謀臣は有無に醉へり、群臣は聖人の御助けと、押し返し押し返し、二三返の琴の
音を、君は聞き召さるれども、荆軻聞きは知らで、たど緩々と侵されて、眠れるが如く

霰の白玉云々
大珠小珠落玉
盤と白樂天の
琵琶行にある意

なり。時うつる時うつると、秘曲度々重なれば、ワキ「荆軻が控へたる、地馬御衣の袖を引つ切つて、屏風を躍り越え、電光の激するよそに、ツキ「霰の白玉盤に落ちて、欄干を走る心地して、銅の御柱に、立ち隠れさせ給ひしかば、ツキ「荆軻は怒りをなして、地馬劍を帝に投げ奉れば、番の醫師は、藥の袋を劍に合はせて、投げ止めければ、ツキ「帝又劍を抜いて、地馬帝又劍を抜いて、荆軻をも秦舞陽をも、八つ裂に裂きたまひ、忽に失しなひおはしまし、其後燕丹太子をも、程なく滅し秦の御代、萬歳を保ち給ふ事、只是れ後の琴の秘曲、ありがたかりけるためしかな。

東岸居士

梗概

東岸居士は自然居士の弟子、東山雲居寺の僧なり。參禪を業とす。或は羯鼓を打つて踊り、或は扇を執つて舞ふ。僧衣を著せず、剃髪せず。世の常の沙門に異なり。この曲はその傳記に一邇上人縁起を加味して作りたるものなり。
(四番目)

シテ 東岸居士 ワキ 旅人

ツキ「是は遠國方の者にて候。我此程は都に上り、彼方此方を一見仕りて候。又今日は清水寺へ参らばやと存じ候。

シテ「雙馬松をさへ、皆櫻木に散りなして、花に聲ある嵐かな。ワキ「是は承り及びたる東岸居士にて渡り候か。さて今日は如何様なる聽聞の御座候ぞ。シテ「事新しら問事かな、聽聞と云つば、萬事は皆目前の境界なれば、ツキ「柳は緑花ば紅、あら面白の春の氣色やな。ワキ「あら面白の答へや候。さて此橋は如何なる人の架け給ひたる橋にて候ぞ。

松をさへ云々
松花も落花にて
埋めたるを云ふ
萬事は云々
一日前の事物
聽て悟の種たるを云ふ

東岸西岸の柳
胡蝶の夢一
同南枝北枝之梅
開落已異を引く

狂言綺語一歌な
ど話ふこと
胡蝶の夢一
夢に胡蝶となり
し故事
鈔一佛典の釋文
箇々縁生一圓成
とも宛つ一つ
ふの本心をい

シテ「是は先師自然居士の、法界無縁の功力を以て、渡し給ひし橋なれば、今又かやうに
勸むるなり。ワヤ「さてく東岸西岸居士の、郷里は何處如何なる人の、父母を離れ
し御出家ぞや。シテ「むつかしの事を問ひ給ふや。本来きたる所もなければ、出家といふ
べき謂れもなし。出家にあらねば髪をも剃らず、衣を墨に染めもせず、只おのづから道
に入つて、ワヤ「善を見て、シテ「進まず、ワヤ「智を捨てても、シテ「愚ならず。ワヤ「折
に觸れ、シテ「事に渡りて白川に、ワヤ「架かれる橋は、シテ「西、ワヤ「東の、地「東岸
西岸の柳の、髪は長く亂るとも、南枝北枝の梅の花、開くる法の一筋に、渡らんため
の橋なれば、勸めに入りつと、彼岸に至り給へや。

ワヤ「又いつもの如く歌うて御聞かせ候へ。シテ「實にくは是も狂言綺語を以て、讀佛轉
法輪の誠の道にも入るなれば、人の心の花の曲、誦いざや歌はん是ととも、上歌地「御法の
舟の水馴棹、御法の舟の水馴棹、皆彼岸に至らん。シテ「面白や是も胡蝶の夢の内、地「遊び
戯れ舞ふとかや。シテ「鈔に又申さく、あらゆる所の佛法の趣き、地「箇々縁生の道すぐ

正像一正像末の
三時の事正法像
法の前二期の過
ぎたるをいふ

芝蘭の契一親し
き文
雲霧の表の下
夫婦のこと

に、今に絶えせぬ跡とかや。シテ「但し正像既に暮れて、末法に生を受けたり。地「か
るが故に春過ぎ秋來れども、進み難きは出離の道、シテ「花を惜しみ月を見ても、起り
易きは妄念なり。地「罪障の山にはいつとなく、煩惱の雲あつうして、佛日の光晴れ難
く、シテ「生死の海にはとこしなへに、地「無明の波荒くして、眞如の月宿らず。クセ生を受
くるに任せて、苦にくるしみを受け重ね、死に歸るに随つて、闇きより闇きに赴く、六
道の衢には、迷はぬ所もなく、生死の橋には、宿らぬ住家もなし。生死の轉變をば夢と
やいはん、又現とやせん。是等有りとはいはんとすれば、雲と上り煙と消えて後、其跡を留
むべくもなし。無しといはんとすれば、又恩愛の中、心留まつて腸を断ち、魂を動
かさずといふ事なし。彼の芝蘭の契の袂には、屍をば愁嘆の焔に焦がせども、紅蓮大紅
蓮の氷をば、終に解かす事なし。鴛鴦の衾の下に眼をば、慈悲の涙に濕せども、焦熱大
焦熱の焔をば、終に示す事なし。かよる拙き身を持ちて、シテ「生殺偷盜邪淫は、地「身に
於て作る罪なり。妄語綺語惡口兩舌は、口にて作る罪なり。貪欲嗔恚愚癡は、心に於

て絶えせず、御法の船の水馴棹、皆彼の岸に至らん。

さる／＼一衣摺
八摺一羯鼓のこ
と
百千鳥云々古
今集の歌

ワキ「とてもの事に羯鼓を打つて御見せ候へ。シテ「面白や松吹く風颯々として、波の聲
茫々たり。ワキ「所は名におふ洛陽の、詠めも近き白河の、シテ「波の鼓や風の簾、ワキ「打
ち連れ行くや橋の上、シテ「男女の往来、シテ「貴賤上下の、シテ「袖を連ねて玉衣の、
さるさる沈み浮波の、簾八撥打ち連れて、百千鳥、（羯鼓を打つ）シテ「百千鳥囀る春は物毎
に、地謡「改まれども我ぞふり行く。シテ「行くは白河、地謡「行くは白河の、橋を隔てよ向
ひは、シテ「東岸、地謡「此方は、シテ「西岸、地謡「さど波は、シテ「簾、地謡「うつ波は、シテ「鼓、
地謡「いづれもいづれも極樂の、歌舞の菩薩の御法とは、聞きは知らずや旅人よ旅人よ。あ
ら面白や。シテ「およ南無三寶、地謡「實に太鼓も羯鼓も笛篳篥、絃管ともに極樂の、御菩
薩の遊びと聞くものを、シテ「何と唯、地謡「何と唯、雪や氷と隔つらん。萬法皆一如なる、
實相の門に入らうよ、實相の門に入らうよ。

内十三

龍田

梗 龍田明神は龍田彦龍田姫を齊ひ祀る。風を司る御神なり。
又佐保姫を春の神とし、此神を秋の神として相對せしむ。
概 秋の神なれば、隨て紅葉の神なり。これは龍田社の縁起を
説き、神徳を讃歎せるめでたき曲也。（四番目）

シテ 龍田姫（前は女） ワキ 旅僧

ワキ「秋津國、教の道も秋津國、教の道も秋津國、數ある法を修めん。是は六十餘州に御經
を納むる聖にて候。我此程は南都に候ひて、靈佛靈社残なく拜み廻りて候。又是より龍
田越にかより、河内國へと急ぎ候。道行古き名の、奈良の都を立ち出でて、奈良の都を
立ち出でて、有明残る雲間の、西の太寺をよそに見て、早暮れ過ぎし秋篠や、外山の紅
葉名に残る、龍田の川に著きにけり。龍田の川に著きにけり。急ぎ候程に、是は早龍

御經を納むる聖
國々の寺々に
法華經を納めて
修行する僧をい
ふ
龍田越一奈良よ
り河内へ越す道
西の大寺一西大
寺
秋篠一秋篠寺あ
り
外山一伊駒山の
紅

田川に著きて候。此川を渡り明神に参らばやと思ひ候。

龍田川紅葉亂れて古今集の歌

家隆一新古今集撰者の一人龍田川紅葉を閉づる云々家隆の家集壬二集に出づ

「なう其川な渡り給ひそ申すべき事の候。ッヤ調」不思議やな此川を渡り、龍田の明神に参り候所に、何とて其河な渡りそとは承り候ぞ。レテ調「さればこそ神に参り給ふも、神慮に合はんためならずや。心もなくて渡り給はど、神も人との中や絶えなん。よくよく案じて渡り給へ。ワヤ調」實に今思ひ出だしたり。龍田川紅葉亂れて流るめり、渡らば錦中や絶えなんとの、謡古歌の心を思へとや。レテ調「なかくの事此歌は、紅葉の水に散り浮きて、錦を張れる如くなれば、渡らば錦中や絶えなんとなり。それにつき猶々深き心もあり。紅葉と申すは當社の神體、神の畏れも有るべければと、戒め給ふ心もありワヤ調」實にくそれはさる事なれども、紅葉の頃も時過ぎて、河の面も薄氷にて、立つ波までも見えぬなり。許させ給へ渡りて行かん。レテ調「いやく猶も御科あり。氷にもまた中絶えんとの、其戒めもある物を。ワヤ調」不思議や紅葉の錦ならで、氷にもまた中絶えんとの、謂はいかなる事やらん。レテ調「紅葉の歌は帝の御製、又其後家隆の歌に、謡龍田

龍田川錦織り掛く神無月古今集の歌下句しぐれの雨を經緯にして薄氷を履む一詩經に歌々詠々如臨深淵一如履薄氷を引く

巫一神子のこと

霜降月十一月のこと

和光同塵云々一止觀の文佛の光を和けて塵に交り佛道成就して衆生を濟ふこと

川紅葉を閉づる薄氷、渡らばそれも中や絶えなんとの、謡重ねてかやうによみたれば、必ず紅葉に限るべからず。上歌地謡「氷にも中絶ゆる名の龍田川、中絶ゆる名の龍田川、錦織り掛く神無月の、冬川になるまでも、紅葉をとづる薄氷を、情なや中絶えて、渡らん人は心なや。さなきだに危きは、薄氷を履む理の、たとへも今に知られたり、たとへも今に知られたり。

「さて御身は如何なる人にて渡り候ぞ。レテ調」是は巫にて候。明神へ御参り候はど御道し、申し候べし。ワヤ調「あら嬉しや御供申し、宮廻り申さうするにて候。

「是こそ龍田の明神にて御入り候へ、よくく御拜み候へ。ワヤ調」不思議やな頃は霜降月なれば、木々の梢も冬枯れて、景色淋しき社頭の御垣に、盛なる紅葉一本見えたり、是は御神木にて候か。レテ調「さん候當國三の輪の明神の神木は杉なり、當社は紅色に愛で給ふにより、紅葉を神木と崇め参らせ候。ワヤ調」有難や我國々は廻り、今日は又此御神に参る事の有難さよ。謡和光同塵は結縁の始、八相成道は利物の終、下歌地謡「下紅葉、塵に交

此度は解取りあへぬ一宮家の歌の心

宜禰一巫女
初初一世の始

はる神心 和光の影の色添へて、我等を守り給へや。上歌殊更に此度は、殊更に此度は、幣取りあへぬ折なるに、心して吹け嵐 紅葉を幣の神心、神さび心も澄み渡る、龍田の嶺はほのかにて、河音も猶さえ増さる夕暮、いざ宮廻り始めんとて、名に負ふ龍田山、同かざしの榊葉を、取りふくに少女子が、裳裾をはへて袖をかざし、運ぶ歩みの数々に、度重なると見る程に、不思議やな今までは、たゞ巫と見えつるが、我は眞は此神の、龍田姫は我なりと、名乗りもあへず御身より、光を放ちて、くれなるの袖を打ちかづき、社壇の扉を押し開き、御殿に入らせ給ひけり、御殿に入らせ給ひけり。(申入)
ワキ上歌誦 神の御前に通夜をして、神の御前に通夜をして、有りつる告を待たんとて、袖をかたしき臥しにけり、袖をかたしき臥しにけり。後シテ誦 神は非禮を受け給はず、水上清しや龍田の川、地誦 御殿しきりに鳴動して、宜禰が鼓も聲々に、シテ誦 有明の月燈火の光、地誦 和光同塵おのづから、光も朱の玉垣赫きて、あらたに御神體現れたり。
シテ誦 我劫初よりこのかた、此秋津洲に地を占めて、御代を守りの御矛を守護し、紅葉の

八葉一紅葉を連華に比す
劍の驗僧一行法の効驗あるを劍の利きに譬ふ
龍祭の御神一伊勢にあり、廣瀬龍田の神と同體異名

年毎に古今集貫之の歌末句とまりなるらん

神南備の一拾遺集の歌末句水の濁れる

色も八葉の葉、即ち矛の刃先なるべし。劍の驗僧の法味に引かれて、夜半に神燈 明かなり。

クリ地誦「そもく瀧祭の御神とは、即ち當社の御事なり。シテ誦 昔天祖の詔、地誦 末明かなる御國とかや。シテ、サシ誦 然れば當國寶山に至り。地誦 天地治まる御代のためし、民安全に豊なるも、偏に當社の御故なり。シテ誦 梢の秋の四方の色、地誦 千秋の御影目前たり。クセ年毎に、もみぢ葉流る龍田川、湊や秋のとまりなる。山も動せず、海邊も波靜にて、たのしみのみ秋の色、名こそ龍田の、山風も靜なりけり。然れば世々の歌人も、心を染めてもみぢ葉の、龍田の山の朝霞、春は紅葉にあらねども、たゞ紅色にめで給へば、今朝よりは、龍田の櫻色ぞ濃き、夕日や花の時雨なるらんと、よみしも紅に、心を染めし詠歌なり。シテ誦 神南備の、御室の岸やくづるらん、地誦 龍田の川の水は濁るとも、和光の影はあきらけき、眞如の月は猶照るや、龍田川紅葉亂れし跡なれや。いにしへは錦のみ、今は氷の下紅葉、あらしや色々の、紅葉重の薄氷、わたらば紅葉も氷も、重

歌至りて一時の
歌積りて深更と
なること

ねて中絶ゆべしや、いかで今は渡らん。

シテ謡「さる程に夜神樂の、地謡「さる程に夜神樂の、時移り事去りて、宜禰が鼓も數至りて、月も霜も白和幣、振り上げて聲澄むや、シテ謡「謹上、地謡「再拜。(神懸シテ謡「久方の月も落ち來る瀧祭。地謡「波の龍田の、シテ謡「神の御前に、地謡「神の御前に散るはもみぢ葉、シテ謡「即ち神の幣、地謡「龍田の山風の時雨降る音は、シテ謡「颯々の鈴の聲、地謡「立つや川波は、シテ謡「それぞ白木綿、地謡「神風松風、吹き亂れ吹き亂れ、もみぢ葉散り飛ぶ木綿附鳥の、御祓も幣も飄へる小忌衣、謹上再拜、再拜々々と、山河草木國土治まりて、神は上らせ給ひけり。

夜討曾我

梗概

曾我兄弟父の仇工藤祐経を討たんとて、富士の裾野の陣屋に斬り込む事を作る。前半、兄弟が母への形見を贈る事あり。前の小袖曾我と關聯す。(四番目)

シテ 五郎時致
ツレ 團三郎
後ツレ 敵兵
ツレ 十郎祐成
ツレ 鬼王
後ツレ 御所の五郎丸

シテ、ツレ「其名も高き富士の嶺の、其名も高き富士の嶺の、御狩にいざや出でうよ。四人次第、謡「是は曾我の十郎祐成にて候。さても我君東八個國の諸侍を集め、富士の巻狩をさせられ候間、我等兄弟も人なみにまかり出で、唯今富士の裾野へと急ぎ候。四人サレ、今日出でていつ歸るべき故郷と、思へば猶もいとどしく、上歌名残を残す我が宿の、名残を残す我が宿の、垣根の雪は卯の花の、咲き散る花の名残ごと、我が足柄や遠かりし、富士の裾野に著きにけり、富士の裾野に著きにけり。

幕を御打たせ
打つは張ること
あらまし一期期
せること

ながら候べき
一生き延ぶべき
となり

形見の物一母へ
残す形見なり

十郎「急ぎ候程に、是ははや富士の裾野にて候。いかに時致、然るべき所に幕を御打たせ候へ。シテ「畏」つて候。十郎「いかに時致、今に始ぬ御事なれども、我が君の御威光のめでたさは候。打ち並べたる幕の内、目を驚かしたる有様にて候。かほどに多き人の中に、我等兄弟が幕の内程物さびたるは候まじ。シテ「さん」候今にはじめぬ君の御威光にて候。さて彼のあらましは候。十郎「あらましとは何事にて候ぞ。シテ「あら御情なや、我等は片時も忘るゝ事はなく候。彼の祐経が事候よ。十郎「けに〜某も忘るゝ事はなく候。さていつをいつまでながら候べき、ともかくも然るべきやうに御定め候へ。シテ「御説の如く、いつをいつとか定め候べき、今夜夜討かけに彼者を討たうするにて候。十郎「それが然るべう候。さらばそれに御定め候へ。や、思ひ出だしたる事の候。我等故郷を出でし時、母にかくとも申さず候程に、御歎あるべき事、是のみ心にかより候間、鬼王か團三郎か、兄弟に一人形見の物を持たせ、故郷へ歸さうするにて候。シテ「けに是は尤にて候さりながら、一人歸れと申し候はど、定めてとかく申し候べし。唯二人ともに御

今めかしき御説
一今更めきたる
御説

御意一仰せ

聞るまじい
まじの意を延べて
まじいと云ふ
ふつつと一きつ
と

かへしあれかしと存じ候。十郎「尤にて候。さらば二人ともに此方へ参れと御申し候へ。シテ「畏」つて候。いかに團三郎、鬼王此方へ参り候へ。團三郎「畏」つて候。シテ「團三郎兄弟是へ参りて候。十郎「いかに團三郎、鬼王もたしかに聞け。汝兄弟に申すべき事を承引すべきか、又承引すまじきか眞直に申し候へ。團三郎「是は今めかしき御説にて候。何事にて候へ御意を背く事はあるまじく候。十郎「あら嬉しや、さては承引すべきか。團三郎「畏」つて候。何事も御説をば背き申すまじく候。十郎「此上は委しく語り候べし。さて我等が親の敵の事、彼の祐経を今夜夜討かけに討つべきなり。兄弟空しくなるならば、故郷の母歎き給はん事、あまりにいたはしく候程に、形見の品々を持ちて、二人ながら故郷へ歸り候へ。團三郎「是は思ひもよらぬ御説にて候ものかな。御意も御意にこそより候へ。此年月奉公申し候も、此御大事に眞先かけて討死仕るべき爲にてこそ候へ。何と御説候とも、此義に於ては罷り歸るまじく候。鬼王さやうにてはなきか。鬼王「なか〜の事尤にて候。まかり歸る事はあるまじく候。十郎「何と歸るまじいと申すか。團三郎「ふ

詞をかためて
誓ふこと

つつとまかり歸るまじく候。十郎「是はふしぎなる事を申すものかな。さてこそ以前に詞をかためて候に、さてはふつと歸るまじきか。團三郎「さん候。十郎「汝はふしぎなる者にて候。なう五郎殿あれを御歸し候へ。シテ「畏つて候。やあなにとてまかり歸るまじいと申すぞ。さやうに申さうずると思召してこそ、始より詞をかためて仰せられ候に、何とて歸るまじいと申すぞ。しかと歸るまじきか。鬼王「まづ畏つたると御申し候へ。團三郎「畏つて候。シテ「しかと歸らうずるか。團三郎「まかり歸らうずるにて候。シテ「おとそれにてこそ候へ。まかり歸らうずると申し候。十郎「何と歸らうずると申すか。團三郎「さん候。いかに鬼王に申し候。鬼王「何事にて候ぞ。團三郎「さて何と仕り候べき。まかり歸れば本意に非ず、歸らねば御意に背く、とかく進退ごよに谷つて候。鬼王「仰せの如くまかり歸れば本意に非ず、又歸らねば御意に背く。我等も是非を辨へず候。但しきつと案じ出だしたる事の候。いづくにても命を捨つるこそ肝要にて候へ。恐れながら團三郎殿と是にて刺し違へ候べし。團三郎「けに〜いづくにても命をすつる

本意一己が望

生々世々一未來

笑吟一眞の高祖
の臣

水莖の跡一筆跡

を肝要なれ、いざさらば刺し違へう。鬼王「尤にて候。シテ「あゝ暫く。是は何としたる事を仕り候ぞ。十郎「やあ兄弟の者歸すまじきぞ歸すまじきぞ。まづ〜心を静めて聞き候へ。今夜此所にて祐經を討ち、我等兄弟空しくならば、さて故郷にまします母には誰か斯くと申すべきぞ。誰敬ふものに從ふは、君臣の禮と申すなり。之を聞かずは生々世々、永き世までの勘當と、上歌地誦「かきくどきのたまへば、かきくどきのたまへば、鬼王團三郎、さらば形見を賜はらんと、云ふ聲の下よりも、不覺の涙せきあへず。クリ地誦「夫れ人の形見をおくりし例には、彼の唐の樊噲が、母の衣を著替へしは、永き世までのためしかや。十郎、サレ誦「今當代の弓取の、母衣とは是を名づけたり。地誦「然れば我等が賤しき身を譬ふべきにはあらねども、恩愛の契のあはれさは、我等を隔てぬ習なり。クセさる程に兄弟、文こまなくと書きをさめ、是は祐成が、いまはの時に書く文の、文字消えて薄くとも、形見に御覽候へ。皆人の形見には、手跡に勝る物あらじ。水莖の跡をば、心にかけて弔ひ給へ。老少不定と聞く時は、若き命も頼まれず、老いたるも残

飛花落葉―無常のたとへに云ふ

練なくと―無くとも意涙を文に巻き籠めて―出典不明

こゝを先途―戀所のこと

る世の習、飛花落葉の、ことわりと思召されよ。其時時致も、肌はだの守まもりを取り出だし、是は時致が、形見かたみに御覽候へ。形見は人のなき跡あとの、思おもひの種たねと申せども、せめて慰なぐさむならひなれば、時致は母上ははづへに、添そひ申したると思召せ。今までは其主そのぬしを、守まもり佛ほとけの觀世音くわんせいおん、此世の縁えんなくと、來世らいせをば助け給へや。十郎じゅうじろう、既に此日このひも入相いりあひの、地誦ぢじゆ、鐘かねもはや聲こゑ々に、諸行無常しよぎやうむじやうと告げ渡る、さらばよ急いそげ急いそげ使つかひ、涙なみだを文ふみに巻まき籠こめて、其まよやる、文ふみの干ひぬ間まにと、詠えいぜし人の心まで、今更いまさら思おもひ白雲しらくもの、かよるや富士ふじの裾野すそのより、曾我そがに歸かへれば兄弟きやうだいすこくとあとを見送りて、泣なきて留とどまるあはれさよ。泣なきて留とどまるあはれさよ。

(中入)

後のちツレ地誦ぢじゆ「寄せかけて、打うつ白波しらなみの音高おとたかく、関せきを作つくつて騒さわぎけり。シテ誦じゆ「あら夥おびたしの軍兵ぐんべいやな。我われ等兄弟きやうだい討うたんとて、多くの勢せいは騒さわぎあひて、こゝを先途せんずと見えたるぞや。十郎じゅうじろう殿どの、何なにとて御返事おへんじはなきぞ十郎じゅうじろう殿どの、宵よひに新田にやたの四郎しじろうと戦たたかひ給たまひしが、さては早はや討うたれ給たまひたるよな。口惜くちやしや死しなば骸かはを一所いっしょとこそ思おもひしに、誦じゆ物思ものおもふ春はるの花はなざかり、

打物の云々―刀を抜きかゝるごと物々し―事々しに同じ

鎧を削り―必死の戦をいふ

薄衣―女の如く被衣かひえをきる

槻弓―蕪うきをか

散りふくになつてこゝかしこに、骸かはをさらさん無念むねんやな。

上歌地誦じゆ身方みかたの勢せいは是これを見て、身方みかたの勢せいは是これを見て、打物うちものの鐔本つばもとくつろけ、時致ときぢを目めがけてかよりけり。シテ誦じゆ「あら物々しやおのれ等よ、地誦ぢじゆ「あら物々しやおのれらよ。先に手て並ならは知るらんものをと、太刀たち取り直なし、立つたるけしき、ほめぬ人ひとこそなかりけれ。かとりける處ところに、かよりける處ところに、御内方みうちがたの古屋ふるや五郎ごろう、樊噲はんくわいが怒いかりをなし、張良ちやうりやうが秘術ひじゆつを盡つくしつよ、五郎ごろうが面おもてに斬きつてかよる。時致ときぢも古屋ふるや五郎ごろうが抜ぬいたる太刀たちの、鎧よろいを削くり、しばしが程ほどは戦たたかひしが、何とか斬きりけん古屋ふるや五郎ごろうは、二つになつてぞ見えたりける。かよりける處ところに、かよりける處ところに、御所ごしよの五郎丸ごろうまる、御前ごぜんに入いれたてかなはじものをと、肌はだには鎧よろいの袖そでを解とき、草摺くさずり輕かろけにざつくと投なげかけ、上うへには薄衣うすぎぬひ引きかづき、唐戸からどの脇わきにぞ待ちかけたる。

シテ誦じゆ「今は時致ときぢも運うん槻弓つばゆみの、地誦ぢじゆ「今は時致ときぢも運うん槻弓つばゆみの、力ちからも落おちて、眞まことの女むすめぞと油斷あぶらだんして通とほるを、やり過すこし押おしならべ、むんすと組くめば、シテ誦じゆ「おのれは何者なにものぞ。五郎丸ごろうまる、御所ごしよの五

わだがみー頭の
後方なりうしる
がみのこと
めてたけれー文
意通ぜずうたて
けれとあるべけ
れど憶りて想と
比く言ひしなら
む

郎丸らうまる 地蔵ぢざう あら物々しとわだがみつかんで、えいやえいやと組みころんで、時致上ときぢじやうにな
りける處ところを、下したよりえいやと又押し返かへし、其時大勢おほしぜいおり重なつて、千條ちじやうの繩なはをかけまく
も、かたじけなくも君の御前みまへに、追おつ立て行くこそめでたけれ、

夕顔ゆがは

梗 概

源氏物語を材料とせる曲なり。夕顔上は三位の中將の女也。幼くて父に後れしが、その後頭中將これに通へり。光源氏六條わたりの忍びありきの折たま、夕顔の花咲ける宿にこの女を見、それより淺からず契りしが、六條河原の院に會せし一夜、夕顔上は物の氣に襲はれて空しくなれり。此曲は夕顔の靈が旅僧の回向を受くる事を作る。玉葛と同巧異曲也。(三番目)

シテ 夕顔の上前は里女) ワキ 旅僧

ワキ 是は豊後の國より出でたる僧にて候。さても松浦箱崎の誓も勝れたるとは申せども、猶も名高き男山おとこやまに参らんと思ひ、此程都このほどみやこに上りて候。今日も又立ち出で佛閣ぶつかくに参らばやと思ひ候。ヤレヤレ尋ね見る都みやこに近き名所は、まづ名も高く聞えける。雲くもの林はやしの夕日影ゆふひかげうつろふ方は秋草あきくさの、花紫はなむらさきの野を分けて、上歌賀茂かみかみの御社みやしろ伏し拜かみかみみ、賀茂かみかみの御社みやしろ伏し拜かみかみみ、糺たすの森もりも打ち過ぎて、歸かへる宿やどりは在原ありはらの、月つきやあらぬとかこちける、五條ごじやうあたりのあ

松浦一肥前松浦
郡鍋の宮のこと
箱崎一筑前にあ
り八幡宮
男山一石清水八
幡宮
雲の林一雲林院
花紫の野一京都
北山の麓なる雲
野をいふ
糺の森一下賀茂
月やあらぬ一在
原平の歌を引

屋づま一軒のこ
と家といふ程の
意

山の端の云々一
六條河原の院に
て夕顔の詠める
歌源氏物語夕顔
の巻にあり
巫山の雲一楚の
襄王陽臺に幸し
て夢に神女に逢
へる故事
湘江の雨云々一
舜の後娥皇女英
舜の崩御を哀し
みて後を追ひし
よりその崩前の
竹に斑文を生じ
たりこれその悲
涙のかけりし名
残なりと傳ふ
しのぶかたなく
一源氏と夕顔と
の上を指す

ばら屋の、主も知らぬ所まで、尋ね訪ひてぞ暮らしける。尋ね訪ひてぞ暮らしける。調急
ぎ候程に、是は早五條あたりにて有りけに候。不思議やなあこの屋づまより、女の歌を吟
ずる聲の聞え候。暫く相待ち尋ねばやと思ひ候。

レテ誦「山の端の心も知らで行く月は、うはの空にて影や絶えなん。巫山の雲は忽に、陽臺
のもとに消えやすく、湘江の雨はしばくも、楚畔の竹を染むるとかや。ヤレこよは又も
とより所も名を得たる古き軒端の忍草、しのぶかたなく多き宿を、紫式部が筆の跡に、
たど何某の院とばかり、書き置きし世は隔たれど、見しも聞きしも執心の、色をも香を
も捨てざりし、下歌涙の雨はのちの世の、障となれば今もなほ、上歌つれなくも、通ふ心
の浮雲を、通ふ心の浮雲を、はらふ嵐の風の間、眞如の月も晴れよとぞ、むなしき空
に仰ぐなる。むなしき空に仰ぐなる。

ワキ詞「如何に是なる女性に尋ね申すべき事の候。レテ誦「此方の事にて候か何事にて候ぞ。
ワキ詞「さてこよをば何くと申し候ぞ。レテ誦「是こそ何某の院にて候へ。ワキ詞「不思議や何

鬼の形一夕顔の
枕上に女の形の
願れしをいよ

六條の御息所一
源氏の通ひし方

某の山何某の寺は、名の上の唯かりそめの言の葉やらん、又それを其名に定めしやらん
承りたくこそ候へ。レテ誦「さればこそ初より、むつかしけなる旅人と見えたれ。紫式
部が筆の跡に、唯何某の院と書きて、其名をさだかに顯さず、然れどもこよは舊りにし
融の大臣、住み給ひにし所なるを、其世を隔てよ光君、誦また夕顔の露の世に、上なき
思ひを見給ひし、名も恐ろしき鬼の形、それもさながら苦むせる、河原の院と御覽せよ。
ワキ誦「うれしやさては昔より、名に負ふ所を見る事よ。我等も豊後の國の者、其玉葛の
ゆかりとも、なして今又夕顔の、露きえ給ひし世語を、誦語り給へや御跡を、及びなき
身も弔はん。

レテ誦「そもく光源氏の物語、言葉幽艶を基として、理淺きに似たりといへども、地誦心
菩提心を勤めて義殊に深し。誰かは假にも語り傳へん。サレ誦「中にも此夕顔の巻は、殊に
勝れて哀れなる、地誦「情の道も淺からず、契り給ひし六條の、御息所に通ひ給ふ、よす
がに寄りし中宿に、レテ誦「唯休らひの玉鉾の、地誦「便りに立てし御車なり。物物のあや

情あきける言の葉—新古今集に「白雲の情あきける言の葉やほのく見えし夕顔の花」とあり源氏が夕顔に情をかけしをいふ聞の語—前の班女を見よ思河—筑前物の氣—人に取憑く思靈

めも見ぬあたりの、小家がちなる軒のつまに、咲きかよりたる花の名も、えならず見えし夕顔の、をり過ぎとあだ人の、心の色は白露の、情おきける言の葉の、末をあはれと尋ね見し、閨の扇の色異に、互に秋の契とは、なさどりし東雲の、道の迷の言の葉も、此世はかくばかり、はかなかりける蜉蝣の、命懸けたる程もなく、秋の日やすく暮れはてよ、宵の間過ぐる故郷の、松のひびきも恐ろしく、レテ謡風にまたよく燈火の、地謡消ゆると思ふ心地して、あたりを見ればむば玉の、闇の現の人もなく、如何にせんとか思河、うたかた人は息消えて、歸らぬ水の泡とのみ、散りはてし夕顔の、花は再び咲かめやと、夢に來りて申すとて、有りつる女も、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。(中入)

ワヤ上歌謡「いざさらば夜もすがら、いざさらば夜もすがら、月見がてらに明かしつよ、法華讀誦の聲絶えず、弔ふ法ぞ誠なる。弔ふ法ぞ誠なる。一聲レテサシ謡「さなきだに女は五障の罪深きに、聞くも氣疎き物の氣の、人失ひし有様を、現

人失ひし夕顔の上を取残したること

末葉の露云々—僧正遍昭の「末の露本の野や世の中の後れ先立つ例なるらん」を引く

優婆塞が云々—夕顔の巻なる源氏の歌也、末句「遠途ふな、優婆塞は善男なり佛の弟子をいふ

す今の夢人の、跡よく弔ひ給へとよ。ワヤ謡「不思議やさては宵の間の、山の端出でし月影の、ほの見えそめし夕顔の、末葉の露の消えやすき、本の雫の世語を、かけて現したまへるか。レテ謡「見給へ—こもおのづから、氣疎き秋の野らとなりて、ワヤ謡「池は水草に埋もれて、古りたる松の陰暗く、レテ謡「又鳴き騒ぐ鳥のから聲、身にしみ渡るをりからを、ワヤ謡「さも物凄く思ひ給ひし、レテ謡「心の水は濁江に、引かれてかよる身となれども、優婆塞が行ふ道をしるべにて、地謡「來ん世も深き契絶えずな。來ん世も深き契絶えずな。レテ謡「御僧の今の弔ひを受けて、地謡「御僧の今の弔ひを受けて、かすく—うれしやと。レテ謡「夕顔の笑の眉、地謡「開くる法華の、レテ謡「花房も、地謡「變成男子の願のまよに、解脱の衣の袖ながら、今宵は何を包まんと、言ふかと思へば音羽山、嶺の松風通ひ來て、明け渡る横雲の、迷ひもなしや東雲の、道より法に出づるぞと、明けぐれの空かけて、雲の紛れに失せにけり。

隅田川

梗
梅若丸といふ童子、人商人に誘拐せられ、都より奥州へ下る途中、隅田川の堤にて煩ひて失せぬ。母なる人、その跡を慕ひて物狂となり、遙々こゝに尋ね來り、たゞ／＼その一周忌に當る日、船中にて事の由を聞き、悲しみ歎きて、跡を弔ひしに、梅若丸の亡靈現れ出づる事を作る。世にも哀れなる物語なり。伊勢物語の業平東下りの和歌文句を以て文を飾り。(四番目)

シテ 梅若丸母 子方 梅若丸幽霊
ワキ 渡守 ツレ 旅人(男)

此在所に木母寺の御若殿をさす

ワキ「是は武藏國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ人々を渡さばやと存じ候。又此在所にさる仔細有つて、大念佛を申す事の候間、僧俗を嫌はず人数を集め候。其由皆々心得候へ。」

男次第「末も東の旅衣、末も東の旅衣、日も遙々の心かな。調かやうに候者は、都の者に

あと遠山一朗詠集の山邊雲煙、行客跡の意

て候。われ東に知る人の候程に、彼の者を尋ねて只今まかり下り候。道行雲霞、あと遠山に越えなして、あと遠山に越えなして、幾關々の道すがら、國々過ぎて行く程に、こぞ名に負ふ隅田川、渡りに早く著きにけり。渡りに早く著きにけり。急ぎ候程に、是は早隅田川の渡りにて候。又あれを見れば舟が出で候。急ぎ乗らばやと存じ候。如何に船頭殿舟に乗らうするにて候。ワキ「なか／＼の事召され候へ。先々御出で候あとの、けしからず物騒に候は何事にて候ぞ。ツレ「さん候、都より女物狂下り候が、是非もなく面白う狂ひ候を見候よ。ワキ「さやうに候はど、暫く舟を留めて、彼の物狂を待たうするにて候。」

人の親の後撰集の歌末句迷ひぬるか、思ひ白雪、思ひ知られる、意をかけた、如何に、新古今集の歌末句習ひありとは

ツレ「實にや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行人に言傳てよ、行方を何と尋ねらん。聞くや如何に上の空なる風だにも、地蔵松に音する習あり。シテ「眞葛が原の露の世に、地蔵身を恨みてや明け暮れん。シテ「是は都北白河に、年経て住める女なるが、思はざる外に獨子を、人商人に誘はれて、行方を

契假なる一つ世
親子の縁の一
世だけに止るを
云ふ
四島の別れ一相
山の四島羽成
りて親鳥の許を
別れ行くをいふ
武藏の國と云々
伊勢物語の文
句を引く

日も暮れぬ云々
同上
名にし負はす
伊勢物語にあり
羅平東下りの折
の歌

聞けば逢坂の、關の東の國遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつよ、そなたとばかり思ひ子の、跡を尋ねて迷ふなり。地謡「千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを、上歌地謡」もとよりも、契假なる一つ世の、契假なるひとつ世の、其中をだに添ひもせで、こよやかしこに親と子の、四島の別れ是なれや。尋ぬる心の果やらん、武藏國と、下總の中にある、隅田川にも著きにけり。隅田川にも著きにけり。

シテ調「なうく我をも舟に乗せて給はり候へ。ワヤ調「お事は何くより何方へ下る人ぞ。シテ調」是は都より人を尋ねて下る者にて候。ワヤ調「都の人といひ狂人といひ、面白う狂うて見せ候へ。狂はずは此舟には乗せまじいぞとよ。シテ調」うたてやな隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ舟に乗れとこそ承るべけれ。詠かたの如くも都の者を、舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守とも、覺えぬ事を宣ひそよ。ワヤ調「實にく都の人とて、名にし負ひたる儼しさよ。シテ調」なう其詞はこなたも耳にとまるものを、彼業平も此渡りにて、諸名にし負はど、いざ事問はん都鳥、我が思ふ人は有りやなしやと。調「なう舟人、あれ

舟競ふ一萬葉集
の歌末句都鳥か
も
限なく遠くも云
三以下伊勢物
語の文句を引く

に白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。あれをば何と申し候ぞ。ワヤ調「あれこそ沖の鷗候よ。シテ調」うたてやな浦にては千鳥とも云へ鷗とも云へ、など此隅田川にて白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ。ワヤ調「實にく誤り申したり。名所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、シテ調」沖の鷗と夕波の、ワヤ調「昔にかへる業平も、シテ調」有りや無しやと事問ひしも、ワヤ調「都の人を思ひ妻、シテ調」わらはも東に思ひ子の、ゆくへを問ふは同じ心の、ワヤ調「妻を忍び、シテ調」子を尋ぬるも、ワヤ調「思ひは同じ、シテ調」戀路なれば、地謡「我も又、いざ言問とはん都鳥、いざ言問はん都鳥、我思ひ子は東路に、有りやなしやと問へども問へども、答へぬはうたて都鳥、鄙の鳥とやいひてまし。實にや舟競ふ、堀江の川の水際に、來居つよ鳴くは都鳥、それは難波江これは又、隅田川の東まで思へば限なく、遠くも來ぬる物かな。さりとはは渡守、舟こそりて狭くとも、乗せさせ給へ渡守、さりとはは乗せてたび給へ。ワヤ調「かよるやさしき狂女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。此渡は大事の渡にて候。かまへて靜に召され候へ。」

真一奥州

遠例一病氣

前世の事一前世より定まりたる因縁
たんだ一唯

足手影一手足の影
築き籠めて一死骸を葬りて塚を築くこと

ツレ調「なうあの向ひの柳の本に、人の多く集りて候は何事にて候ぞ。ワキ調「さん候あれは大念佛にて候。それにつきてあはれなる物語の候。此舟の向ひへ著き候はん程に語つて聞かせ申さうするにて候。語さても去年三月十五日、しかも今日に相當りて候、人商人の都より、年の程十二三ばかりなる幼き者を買ひとつて奥へ下り候が、此幼き者、いまだ習はぬ旅の疲れにや、以ての外に違例し、今は一足も引かれずとて、此河岸にひれふし候を、なんほう世には情なき者の候ぞ、此幼き者をば其まよ路次に捨て、商人は奥へ下つて候。さる間此邊の人々、此幼き者の姿を見候に、よし有りけに見え候程に、さまざまに痛はりて候へども、前世の事にてもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、おことはいづく如何なる人ぞと、父の名字をも國をも尋ねて候へば、我は都北白河に、吉田の何某と申しと人の唯ひとり子にて候が、父には後れ母ばかりに添ひ参らせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになり行き候、都の人の足手影もなつかしう候へば、此道の邊に築き籠めて、しるしに柳を植ゑて給はれと、おとなしやかに

申し、念佛四五返唱へ遂に事終つて候。なんほう哀れなる物語にて候ぞ。見申せば船中にも少々都の人も御座ありけに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が著いて候。とうく御上り候へ。ツレ調「如何さま今日は此所に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうするにて候。

ワキ調「如何に是なる狂女、何とて船よりは下りぬぞ急いで上り候へ。あらやさしや、今の物語を聞き候ひて落涙し候よ。なう急いで舟より上り候へ。ツレ調「なう舟人、今の物語はいつの事にて候ぞ。ワキ調「去年三月今日の事にて候。ツレ調「さて其兒の年は。ワキ調「十二歳。ツレ調「主の名は、ワキ調「梅若丸。ツレ調「父の名字は、ワキ調「吉田の何某。ツレ調「さて其後は親とても尋ねず、ツレ調「親類とても尋ねこず、ツレ調「まして母とても尋ねぬよなう。ワキ調「思ひもよらぬ事。ツレ調「なう親類とても親とても、尋ねぬこそ理なれ。其幼き者こそ、此物狂が尋ぬる子にては候へとよ。なう是は夢かやあらあさましや候。ツレ調「言語道断の事にて候物かな。今まではよその事とこそ存じて候へ、さては御身の子にて候ひけるぞ

えしは塚の上の、草茫々として只、しるしばかりの淺茅が原と、なるこそあはれなりけれ。なるこそあはれなりけれ。

雲林院

梗 概

雲林院は昔淳仁帝の離宮にして、常康親王の傳領たり、其後御願寺となる。紫野に在り。此曲は津の國芦屋の里の公光といふ者、平素伊勢物語を好み、靈夢を受けて、都に上り、雲林院に詣てしに、業平靈現れて物語の故實を語る事を作る。此物語の賞讃せられ、崇拜せられし時代の反映ならむ。
(四番目)

シテ 在原業平(前は老翁) ロキ 公光

雲の林一寺の名の文字を出す
花新開日初陽湖
鳥老時薄暮陰
一朗詩集の詩句
蘆屋の里一業平
の領所なれば縁
として書けり
蛭子一沙の干る
と掛けたり

ワキ次第通「藤咲く松も紫の、藤咲く松も紫の、雲の林を尋ねん。詞是は津の國蘆屋の里に、公光と申す者にて候。我幼かりし頃よりも、伊勢物語を手馴れ候處に、ある夜不思議なる靈夢を蒙りて候程に、只今都に上らばやと存じ候。サレ詠花の新に開くる日初陽潤へり、鳥の老いて歸る時、薄暮曇れる春の夜の、月の都に急ぐなり。下歌 蘆屋の里を立ち出でて、我は東に赴けば、名残の月の西の海、沙の蛭子の浦遠し、沙の蛭子の浦遠

難波津に古歌
下句今昔春と
咲くやこの花

遙見入家花便
入白樂天の詩
句

落花狼藉花折
る人の亂暴なる
こと

見のみや云マ
古今集に出づ
春風は云々同
上藤原好風の歌

し。上歌 松陰に、煙をかづく尼が崎、煙をかづく尼が崎、暮れて見えたる漁火の、あたりを問へば難波津に、咲くや木の花冬ごもり、今は現に都路の、遠かりし、ほどは櫻にまぎれある、雲の林に著きにけり。雲の林に著きにけり。

ワキ「遙に人家を見て花あればすなはち入るなればと、木陰に立ち寄り花を折れば、シテ詠「誰そやう花折るは、今日は朝の霞消えしまよに、夕の空は春の夜の、殊に長閑に眺めやる、嵐の山は名にこそ聞け、誠の風は吹かぬに、花を散らす鶯の、羽風に落つるか、松の響か、人が、詠それかあらぬか木の下風か、あら心もとなと散らしつる花や。詠や さればこそ人の候。落花狼藉の人そこのき給へ。ワキ「それ花は乞ふも盗むも心有り、とても散るべき花な惜み給ひそ。シテ詠「とても散るべき花なれども、花に憂は嵐それも花ばかりをこそ散らせ、御事は枝ながら手折れば、風よりも猶憂き人よ。ワキ「何とて素性法師は、見のみや人に語らん櫻花、手毎に折りて家土産にせんとは詠けるぞ。シテ詠「さやうに詠むも有り、又ある歌に、詠春風は花のあたりをよぎて吹け、心づからやうつ

春の夜の一時を
蘇東坡の詩に
春宵一刻值千金
花有清香月有陰
千類萬類の玉
朗詠集の語を引
花物いはぬ朗
詠集に詠調花不
語輕淡激動唇
輕淡は外波唇は
水中の花をいふ

來帶一此下「し
字脱せるか

二條の後一清和
帝の皇后

ろふと見ん。實にや春の夜の一時を千金に替へじとは、花に清香月に陰、千類萬類の玉よりも、實と思ふ此花を、折らせ申す事は候まじ。ワキ「實にくはは御理、花物いはぬ色なれば、人にて花を戀衣、シテ詠「輕淡激して影唇を動かせば、詠我は申さずとも、ワキ「花も惜しきと、シテ詠「いつつべし。上歌地詠「實に枝を惜しむは又春のため、手折るは見ぬ人の爲、惜しむも乞ふも情あり。二つの色の争ひ、柳櫻をこきませで、都ぞ春の錦なる。都ぞ春の錦なる。

シテ詠「いかに旅人、御身は何方より來り給ふぞ。ワキ「是は津の國蘆屋の里に、公光と申す者にて候が、我幼かりし頃よりも、伊勢物語を手馴れ候處に、ある夜の夢に、とある花の陰よりも、紅の袴召されたる女性、東帶たまへる男、伊勢物語の草子を持ち佇み給ふを、あたりによりつる翁に問へば、あれこそ伊勢物語の根本、在中將業平、女性は二條の後、所は都北山陰、紫の雲の林と語ると見て夢覺めぬ。餘りにあらたなる事にて候程に、是まで参りて候。シテ詠「さては御身の心を感じつよ、伊勢物語を授けんとなり。今

昔男一伊勢物語
に幾平の事を昔
男ありけりと書
出せり

月やあらぬ一伊
勢物語にあり業
平述懐の歌

宵はこよに臥し給ひ、別れし夢を待ち給へ、ワヤ謡「嬉しやさらば木の本に、袖を片敷き臥して見ん。シテ調「其花衣を重ねつと、又寢の夢を待ち給はど、などか驗のなかるべき。ワヤ謡「かやうに委しく教へ給ふ、御身は如何なる人やらん。シテ調「其様年の古びやう、昔男となど知らぬ。ワヤ謡「さては業平にてましますか。シテ調「いや、上歌地謡「我が名を何とゆふばえの、我が名を何とゆふばえの、花をし思ふ心故、木隠れの月に現れぬ。誠に昔を戀衣、一枝の花の蔭に寝て、我有様を見給はど、其時不審を晴らさんと、ゆふべの空の一霞、思ほえずこそなりにけれ、思ほえずこそなりにけれ。(中入)

後シテ「月やあらぬ、春や昔の春ならぬ、我身ひとつはもとの身にして。

ワヤ謡「いざさらば、木蔭の月に臥して見ん、木蔭の月に臥して見ん。暮れなばなけの花衣、袖を片敷き臥しにけり、袖を片敷き臥しにけり。

弘徽殿一后の御
殿細殿は願下

彼の暹昭が連ね
し一言葉を連ぬ
ること詠歌をい
ふ即ち「散りぬ
れば後は芥にな
る花を思ひ知ら
ずもまどふ蝶か
な」を指す芥川
は業平の伴ひし
女の絶え入りし
所
木賊色一黄青黒
の三色あり黒木
賊は老色也
山藍一白地に藍
にて模様を摺る

中に伊勢物語の其品々を語り給へ。シテ調「いでくさらば語らんと、花の嵐も聲添へて、ワヤ謡「其品々を、シテ調「語りけり。クリ抑「この物語は、いかなる人の何事によつて、地謡「思ひの露を染めけるごと、云ひけん事も、理なり。シテ、サシ謡「まづは弘徽殿の細殿に、人目を深く忍び、地謡「心の下簾の、徒然と人は佇めば、我も花に心を染みて、共にあくがれ立ち出づる。クセ二月や、まだ宵なれど月は入り、我等は出づる戀路かな。抑「日の本の、中に名所と云ふ事は、我大内にあり。彼の暹昭が連ねし、花の散り積る、芥川を打ち渡り、思ひ知らずも迷ひ行く、かづける衣は紅葉重ね、緋の袴踏みしだき、誘ひ出づるやまめ男、紫の一もとのゆひの藤袴、しをるゝ裾をか取つて、シテ調「信濃路や、地謡「園原茂る木賊色の、狩衣の袂を、冠の巾子にうちかづき、忍び出づるや二月の、黄昏も早入りて、いとと朧夜に、降るは春雨か、落つるは涙かと、袖打拂ひ裾を取り、しをしをすごとくと、たどりくも迷ひ行く。シテ調「思ひ出でたり夜遊の曲、地謡「返す眞袖を月や知る。(序ノ舞)地謡「夜遊の舞樂も時移れば、夜遊の舞樂も時移れば、名残の月も山藍の

羽袖、かへすや夢の黄楊の枕、此物語語るとも盡きじ。松の葉の散り失せず、地蔵松の葉の散り失せず、末の世までも情知る。言の葉草のかりそめに、かく顯はせるいにしへの、伊勢物語かたる夜もすがら、覺むる夢となりけりや、覺むる夢となりけり。

内十四

春日龍神

梗 明惠上人、名は高辨、幼にして高尾に上り、修學し、後榊の尾に居る。寛喜四年示寂。嘗て入唐渡天の望あり、たま〜春日明神の神託によりて之れを止むといふ事、古今著聞集にあり。この趣を作曲せるものなり。後段龍神の化現を示す。惟ふに我國佛法繁昌の時勢の反映か。白樂天の曲と併せて國民的自覺の聲を聴くが如し。(五番目)

シテ 龍神(前は宮守) ワキ 明惠上人

ワキ次第通「月の行方も其方ぞと、月の行方も其方ぞと、日の入る國を尋ねん。是は榊尾の明惠法師にて候。我入唐渡天の志有るにより、御暇乞のために春日の明神に參らばやと思ひ、只今南都に下向仕り候。道誦愛宕山、榊が原をよそに見て、榊が原をよそに見て、月に雙の岡の松、緑の空も長閑なる都の山を跡に見て、是も南の都路や、奈良坂越えて

月の行方も云々
西方の國々を
指していふ
渡天の志一支那
天竺に渡らんと
の志
榊が原一愛宕の
内
雙の岡一仁和寺
の南

動ざる一今どう
ざると誦ふ、動
ざるの意

二柱一鳥居の兩
方の柱をさす
四所一春日の四
座の神
水屋一春日の末
社水屋明神のこ

少しの一今ほの
二字を脱す
解説上人一名は
貞慶建保元年寂
す

三笠山、春日の里に著きにけり。春日の里に著きにけり。

レテ一雙誦「晴れたる空に向へば、和光の光あらたなり。レ夫れ山は動ざる形を現じて、古
今に至る神道を表し、里は平安の衢を見せ、人間長久の聲満てり。誠に御名も久方の
天の兒屋根の世々とかや。下歌 月に立つ、かけも鳥居の二柱、上歌 御社の、誓もさぞ
な四所の、誓もさぞな四所の、神の代よりの末受けて、澄める水屋の御影まで、塵に交
はる神心、三笠の森の松風も、枝を鳴らさぬ氣色かな、枝を鳴らさぬ氣色かな。

ワヤ調「いかに是なる宮奴に申すべき事の候。レテ調「や、是は樺尾の明惠上人にて御座候ぞ
や。只今の御参詣さこそ神慮に嬉しく思召し候らん。ワヤ調「さん 候、只今参詣申す事餘の
儀にあらず。我入唐渡天の志あるにより、御暇乞のために只今参りて候。レテ調「是は仰
にて候へども、さすがに上人の御事は、年始より四季折々の御参詣の、時節の少し遅
速をだに、待ち兼ね給ふ神慮ぞかし。されば上人をば太郎と名付け、笠置の解脱上人を
ば次郎と頼み、雙の眼、兩の手の如くにて、晝夜各参の擁護、懇なるとこそ承りて候

此手を合せて一
奈良坂のこのて
柏といふ語を以
て續けたり

天台一唐土にあ
り青龍寺といふ
五臺山一清涼山
ともいふ文殊菩
薩此に居る

に、日本を去り入唐渡天し給はん事、いかで神慮に適ふべき。只思召しとまり給へ。
ワヤ調「實にく、仰はさる事なれども、入唐渡天の志も、佛跡を拜まんためなれば、何か
神慮に背くべき。レテ調「これ又仰とも覺えぬものかな、佛在世の時ならばこそ、見聞の益
も有るべけれ。今は春日の御山こそ、即ち靈鷲山なるべけれ。其うへ上人初参の御時、
奈良坂の此手を合せて禮拜する、人間は申すに及ばず心なき、上歌地誦「三笠の森の草木
の、三笠の森の草木の、風も吹かぬに枝を垂れ、春日山、野邊に朝立つ鹿までも、皆こ
とごとく出で向ひ、膝を折り角を傾け、上人を禮拜する、かほどの奇特を見ながらも、
眞の淨土は何處ぞと、問ふは武藏野の、果しなの心や。只返す返す我が頼む、神のまに
まに留りて、神慮をあがめおはしませ。神慮をあがめおはしませ。

ワヤ調「猶々當社の御事委しく御物語り候へ。レテ、サレ誦「しかるに入唐渡天といつば佛法流
布の名を留めし、地誦「古跡を尋ねんためぞかし。天台山を拜むべくは、比叡山に参るべ
し、五臺山の望あらば、吉野筑波を拜すべし。レテ誦「昔は靈鷲山、地誦「今は衆生を度せ

我を知れ一體古
今集に春日明神
の御歌とて載す
慈悲萬行一春日
明神の菩薩號
小機一凡夫の小
乘の機をいふ
四調一苦集滅道
をして一切衆生
離せしむる説法
鹿野苑一天竺波
羅奈厘にあり春
日野を之に比す
七大寺一東大、
西大興、元興、
大安、興師、法隆、
の七箇寺
五天竺一天竺を
中西南北中の五
に分ちていふ
摩耶一釋迦の母
伽耶一中天竺の
地名
雙林一跋提河の
邊の雙羅樹の
林
時風秀行一此の
二人春日明神の
鹿島よりこゝに
運られしをりに
供人たり今とき
と流ふ
と流ふ

んとて、大明神と示現し、此山に宮居し給へば、シテ謡即ち驚の御山とも、地謡「春日の御山を拜むべし。我を知れ、釋迦牟尼佛世に出でて、さやけき月の世を照らすとは、御神詠もあらたなり。然れば誓ある、慈悲萬行の神徳の、迷を照らす故なれや、小機の衆生の益なきを、悲み給ふ御姿、瓔珞細軟の衣を脱ぎ、鹿弊の散衣を著しつと、四諦の御法を説き給ひし、鹿野苑もこよなれや。春日野に起き臥すは、鹿の苑ならずや、シテ謡「其外當社の有様の、地謡「山は三笠に陰さすや、春日そなたに現れて、誓を四方に春日野の、宮路も末あるや、曇なき西の大寺月澄みて、光ぞまさる七大寺、御法の花も八重櫻の、都とて春日野の、春こそ長閑かりけれ。ワキ詞「實に有難き御事かな、即ち是を御神託と思ひ定めて、此度の入唐をば思ひ止まるべし。さて、御身は如何なる人ぞ、御名を名のり給ふべし。シテ謡「入唐渡天をとどまり給はど、三笠の山に五天竺を寫し、摩耶の誕生伽耶の成道、驚峰の説法、地謡「雙林の入滅まで、悉く見せ奉るべし。暫くこよに待ち給へと、木綿四手の神の告、我は時風秀

八大龍王一本文には六大龍王を掲げて摩耶所優鉢羅の二龍王を洩せり

恒沙一恒河の沙懸しき歌の形容

行ぞとて、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。(中人)
ワキ上歌謡「神託まさにあたらなる、神託まさにあたらなる、聲の内より光さし、春日の野山金色の、世界となりて草も木も、佛體となるぞ不思議なる、佛體となるぞ不思議なる。地謡「時に大地震動するは、下界の龍神の參會か。後シテ謡「すは八大龍王よ。地謡「難陀龍王、シテ謡「跋難陀龍王、地謡「娑伽羅龍王、シテ謡「和修吉龍王、地謡「德叉迦龍王、シテ謡「阿那婆達多龍王、地謡「百千眷屬引き連れ引き連れ、平地に波瀾を立てよ、佛の會座に出來して、御法を聽聞する。シテ謡「其外妙法緊那羅王、地謡「又持法緊那羅王、シテ謡「樂乾闥婆王、地謡「樂音乾闥婆王、シテ謡「婆稚阿脩羅王、地謡「羅睺阿脩羅王の、恒沙の眷屬引き連れ引き連れ、是も同じく座列せり。地謡「龍女が立ち舞ふ波瀾の袖、龍女が立ち舞ふ波瀾の袖、白妙なれやわだの原の、拂ふは白玉立つは緑の、空色も映る海原や、沖行く計月の御舟の、佐保の川面に浮み出づれば、シテ謡「八大龍王、(舞)「八大龍王は、地謡「八つの冠を傾け、所は春日野の、月の三笠の雲に上り、飛火の野守も出でて見よや、摩耶の誕生驚蜂の説法、雙

林の入滅りんじふつごころ悉しつく終りて、是までなりや明惠上人みやうゑしやうにん。さて入唐にうちやうは、ワヤワヤとまるべし。地通ぢつう波な天てんは如何いかに。ワヤワヤ渡わたるまじ。地通ぢつうさて佛跡ぶつせきは。ワヤワヤ尋たずねまじや。地通ぢつう尋たずねても尋たずねても、此上こゝ嵐あらしの雲くもに乗りて、龍女りゆうにょは南方なんぽうに飛び去り行けば、龍神りゆうじんは猿澤さるさばの、池いけの青波あをなみ蹴け立て、其丈そのたけ千尋ちひろの大蛇おほじやとなつて、天てんに群むらがり地ちに蟠わだかりて、池水いけみづを返かへして失なせにけり。

船ふね 橋はし

梗えい 概がい

萬葉集まんやうしふにかみつけれぬ佐野さのの舟橋ふねはしとりはなし親おやはさくれどわはさかなくにと有あるは舟橋ふねはしにこと寄よせて戀こひを詠よぜし歌うたなるが之これを本もととして、忍しのび妻つまに通とほひし男おとこの溺死おぼれじせる事に取成とれして作つくれり。(五番目)

シテ里男りおとこ(後のちは亡な者もの) ツレ里女りめ
ワキ山伏やまぶし

ワヤワヤ次第ついで通とほ山やま又また山やまの行く末すまや、山やま又また山やまの行く末すまや、雲路くもぢのしるべなるならん。詞ことば是こゝは三熊野さんくまのより出いでたる客僧きやくそうにて候まう。我未わいまだ松島平泉まつしまひらいづみを見みず候程まうぢに、此春このはる思おもひ立ち松島平泉まつしまひらいづみへと急いそぎ候まう。道行みちゆき通とほ幾瀬渡いくせわたりの野洲のすの川がは、幾瀬渡いくせわたりの野洲のすの川がは、彼七かのなな夕ゆふの契待ちりまつ、年としに一夜ひとよはあだ夢ゆめの、醒さめが井いの宿しゆくを過すぎ、膽吹いぶきおろしの音ねにのみ、月つきの霞かすみむや美濃尾張みのおはり、老おいを知しれとの心こゝろかな、老おいを知しれとの心こゝろかな。詞ことば急いそぎ候間まうま、是こゝは早上野はやかうづのの國くに佐野さのと申まうす所ところに著つきて候まう。此所このところにて宿しゆくを借からばやと存ぞんじ候まう。

野洲の河のすのがは—近江おうみ
佐野—高崎たかざきの附のり近ちか

法に依る云々―
船橋を造りて衆
生を渡す者は来
世に福徳を受く
との經文による
夢の浮橋―もと
吉野の夢の渡り
の浮橋のことよ
りしてたゞ夢の
ことといふ
二河の流れ―順
志火にて成れる
大河と貪愛水に
て成れる水河と
を云ふ渡瀬川佐
野川の二流を譬
ふ
十の道―十惡の
こと
橋の勤め―勤め
は勤進寮進

一雙 謠「法に依る、道ぞと作る舟橋は、後の世かくる頼みかな。レテ、サレ謠「往事渺茫とし
て何事も、見残す夢の浮橋に、レテ、ツレ謠「なほ數添へて舟競ふ、堀江の川の水際に、寄るべ定
めぬあだ波の、浮世に歸る六つの道、遁れかねたる心かな。下歌「戀しき物をいにしへの、
跡はるくと思ひやる、上歌「前の世の、報のまよに生れ来て、報のまよに生れ来て、心に
かけばとても身の、生死の海を渡るべき、船橋を造らばや。二河の流れはありながら、科
は十の道多し。誠の橋を渡さばや、まことの橋を渡さばや。
レテ「如何に客僧、橋の勤めに入りて御通り候へ。ワヤ「見申せば俗體の身として、橋興
立の志返すくも優しうこそ候へ。レテ「是は仰とも覺えぬ物かな。必ず出家にあらね
ばとて志のあるまじきにて候はず。まづ勤めに入りて御通り候へ。ワヤ「勤めには參
り候べし。さて此橋はいつの御宇より渡されたる橋にて候ぞ。レテ「萬葉集の歌に、東路
の佐野の船橋取りはなしと、よめる歌の、心をば知し召し候はずや。ツレ謠「いや左様に申せ
ば恥かしや、身のいにしへも淺間山、レテ「こがれ沈みし此河の、レテ、ツレ謠「さのみは申さ

三瀬川―三途の
川
親し離れば―
萬葉集の詞を少
しく變へたり
一言業―一言主
神を言掛く

所は同じ名の―
定家の歌に「駒
とめて袖打拂ふ
陰もなし佐野の
渡りの雪の夕
暮」といへるは
大和の地なるを
いふ

じさなきだに、苦しみ多き三瀬川に、浮む便りの船橋を、渡して賜はせ給へとよ。ワヤ「け
にけに親し離ればの物語。謠「さては古りにし船橋の、主を助けん其ためか。レテ「殊更
是は山伏の、橋をば渡し給ふべし。ワヤ「そも山伏の身なればとて、取り分き橋を渡すべ
きか。レテ「さのみな争ひ給ひそとよ、役の優婆塞葛城や、祈りの久米路の橋は如何に。
ツレ謠「たとふべき身にありねども、我も女の葛城の神、レテ「一言業にて止むまじや、只
幾度も岩橋の、ツレ謠「など御心にかけ給はぬ。レテ、ツレ謠「さりながらよそにて聞くも葛城や、
夜作るなる岩橋ならば、渡らん事も難かるべし。下歌「地謠「是は長き春の日の、長閑けき水
の船橋に、さして柱も入るまじや。徒に朽ち果てんを、作りたまへ山伏。上歌「所は同
じ名の、所は同じ名の、佐野の渡りの夕暮に、袖打ち拂ひて、御通りあるか篠懸の、頃
も春なり河風の、花吹き渡せ船橋の、法に往來の、道作り給へ山伏。峯々廻り給ふとも、
渡りを通らでは、何くへ行かせ給ふべき。
ワヤ「さてく、萬葉集の歌に、東路の佐野の船橋取り放し、又鳥は無しと二流によまれた

紅蓮大紅蓮—地獄の名

中の道—地獄と極樂の間

三寶加持—山伏の行ふ所

るは、何と申したる謂れにて候ぞ。シテ誦「さん候 それに付いて物語の候、語つて聞かせ申し候べし。昔此所に住みける者、忍び妻にあこがれ、所は川を隔てたれば、此船橋を道として夜なく通ひけるに、二親此事を深く厭ひ、橋の板を取り放す。それをば夢にも知らずして、かけて頼みし橋の上より、かつばと落ちて空しくなる。誦妄執と云ひ因果と云ひ、其まよ三途に沈みはてよ、紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられて、地誦「浮む世もなき苦みの、海こそ有らめ河橋や、磐石に押され苦を受くる。クセさらば沈みも果てずして、魂は身を責むる、心の鬼となり變り、猶戀草の言茂く、邪姪の思ひに焦がれ行く、船橋も古き物語。眞は身の上なり、我が跡吊ひてたび給へ。シテ誦「夕日漸く傾きて、地誦「霞の空もかきくらし、雲となり雨となる、中有の道も近づくか。橋と見えしも中絶えぬ。ここはまさしく東路の、佐野の船橋とりはなし、鐘こそ響け夕暮の、空も別れになりけり。空も別れになりけり。(中入)

ワキ上巻誦「ふりにし跡を改めて、ふりにし跡を改めて、三寶加持の行に、五道の罪も消え

泣く涙云々—小野重の妹の死を哭せる歌

是も妹瀨の—古今集に—流れては妹背の山の中に落ちる吉野の川の上しや世の中

ぬべき、法(のり)の力(ちから)ぞ有難(ありがた)き。法(のり)の力(ちから)ぞ有難(ありがた)き。ツレ誦「如何(いかに)に行者(ぎやうじや)有難(ありがた)や。徒(いたづら)に三途(さんづ)に沈(しづ)みし身(み)なれども、法(のり)の力(ちから)か船橋(ふねはし)の、浮(うか)む身(み)となる有難(ありがた)さよ。後(のち)シテ誦「如何(いかに)に行者(ぎやうじや)我(われ)は猶(なほ)し、此(この)妄執(まうしゆ)の故(ゆゑ)により、浮(うか)みかねたる橋柱(はしはしら)の、重(おも)き苦患(くげん)を見(み)せ申(まを)さん。泣(な)く涙(なみだ)、雨(あめ)と降(ふ)らん渡(わた)り川(がは)、水増(みづま)りなば歸(かへ)り來(き)るかに、地誦(ぢじゆ)かへれやかへれあだ波(なみ)の、シテ誦(じゆ)柱(はしら)を戴(いた)く磐石(はんじやく)の苦患(くげん)、地誦(ぢじゆ)これく見給(みたま)へ淺(あ)ましや。シテ誦(じゆ)見我身者(けんがみんしん)發菩提(はつぼだい)の、功(こう)力(りき)を受け(う)けて謂(い)ふならく、奈落(ならく)の底(そこ)の水層(みづくさう)となりしを、知我(ちが)心者(しんしやく)即身成佛(じやくしんじやうぶつ)、有難(ありがた)や。ツレ誦「痛(いた)はしやいまだ邪姪(じやいん)の業深(ごふか)き、其執心(そのしゆしん)を振(は)り捨(す)てよ、猶(なほ)昔(むかし)を懺悔(ざんげ)し給(たま)へ。ツレ誦「何(なに)事(こと)も懺悔(ざんげ)に罪(つみ)の雲消(くもき)えて、眞如(しんによ)の月(つき)も出(で)てつべし。シテ誦(じゆ)五障(ごしやう)の霞(かすみ)の晴(は)れがたき春(はる)の夜(よ)の一時(ひととき)、胡蝶(こてふ)の夢(ゆめ)の戯(たは)しに、いでく姿(すがた)を見(み)え申(まを)さん。ツレ誦(じゆ)よしや吉野(よしの)の山(やま)ならねど、是(こゝ)も妹背(いもせ)の中川(なかがは)の、シテ誦(じゆ)橋(はし)のとだえの有(あ)りけるとは、いさ白波(しらなみ)の夜(よ)ごとに、ツレ誦(じゆ)通(かよ)ひ馴(な)れたる浮船(うきふね)の、シテ誦(じゆ)共(とも)にこがると思(おも)ひ妻(つま)宵々(よひひ)に通(かよ)ひ馴(な)れたる船橋(ふねはし)の、さえ渡(わた)る夜(よ)の、月(つき)も半(なか)に更(か)へ静(しづ)まりて、地誦(ぢじゆ)人(ひと)もねに臥(ふ)し丑三つ(うしみ)寒(さむ)き、川風(かはかぜ)も厭(いと)はじ逢瀬(あふせ)の向(むか)ひの、岸(かた)

より羽の橋―新
勅撰集に「關の
より羽の橋をよ
そながち待ちた
る夜にかりにけ
るか
橋柱に立てられ
て―橋柱に人柱
として立てらる
ること

に見えたる人影はそれか、心うれしや頼もしや。
上歌地謡「互たがひにそれぞと見みえし中の、互たがひにそれぞと見みえし中の、橋はしを隔へたてよ立ち來る波
の、より羽の橋はしか鵲かきせの、行き合あひの間近まぢかくなり行くまよに、放はなせる板間いたまを踏ふみはづし、
かつばと落おちて沈しみけり。下歌地謡「東路あづまぢの佐野さのの船橋ふねはしとりはなし、親おやしさくれば妹いもに逢あはぬ
かも、キリ執心しゅしんの鬼おにとなつて、地謡「執心しゅしんの鬼おにとなつて、共に三途さんづの川橋かははしの、橋柱はしはしらに立た
られて、惡龍あくりゆうの氣色けしきに變り、程ほどなく生死しやうじ娑婆しやばの妄執まうしゅ、邪姪じやいんの惡鬼あくきとなつて、我われと身を責せ
め苦患くげんに沈しむを、行者ぎやうじやの法味ほふみ功力くりきにより、眞如しんによほつしん發心はつしんの玉橋たまはしの、眞如しんによほつしん發心はつしんの玉橋たまはしの、浮うきめ
る身みとぞなりにける。浮うきめる身みとぞなりにける。

源氏供養

梗概

源氏物語表白といふは、安居院法印聖覺の作なりと傳ふ。
源氏物語を作りし紫式部が、現世に狂言綺語の戒を破りし
苦患を救ひ、安養淨土に迎へ給へと祈りし文なり。此曲は
之によりて、法印が石山詣の折、紫式部の靈現れて、回向を受
くる事を作り。末段に紫式部を石山觀音の權化なりと
説けるは、時代思想の一端を伺ふに足る。(靈物)

シテ 紫式部(前は里女) ワキ 安居院法印
ワキツレ 從僧

衣も同じ―出家
の衣を苔の衣と
いふに上りてな
り
鹽焗しほじゆかねども―
湖水うみづなれば也

三人さんじん次第しだい誦じゆ衣ころもも同じおなじ苦くの道みち、衣ころもも同じおなじ苦くの道みち、石山いしやま寺でらに參まゐらん。ワキ「是こゝは安居院あきんの法印ほふいんに
て候まゐ。我われ石山いしやまの觀世音くわんぜおんを信しんじ、常つねに歩あゆみを運はこび候まゐ。今日けふも又また參まゐらばやと思おもひ候まゐ。三人さんじん道行だうぎやう時とき
も名なも、花はなの都みやこを立たち出でて、花はなの都みやこを立たち出でて、嵐あらしにつるよ夕波ゆふなみの、白河しろかは表おもて過すぎ行ぎやう
けば、音羽ねはの瀧たきをよそに見みて、關せきの此方こなたの朝霞あさぐすみ、されども殘のこる有明ありあけの、影かげもあなたに鳩はと
の海うみ、實じつに面白おもしろき氣色けしきかな、けに面白おもしろき氣色けしきかな。下歌げかさよ波なみや、志賀しが唐崎からさきの一つ松、鹽しほ

源氏六十帖—源氏物語五十四帖なるを天台の六十巻にぞらへて六十帖といひならはせり

立つ雲の—紫雲の語を紫式部と續けていへり

焼かねども浦の波、立つこそ水の煙なれ、立つこそ水の煙なれ。

源氏六十帖—源氏物語五十四帖なるを天台の六十巻にぞらへて六十帖といひならはせり
なうく安居院の法印に申すべき事の候。ワヤ調「法印とは此方の事にて候か。何事に候ぞ。シテ調「我石山に籠り、源氏六十帖を書き記し、亡き跡までの筆のすさみ、調名の形見とはなりたれども、調彼の源氏に終に供養をせざりし科により、浮む事なくさむらへば、然るべくは石山にて、源氏の供養をのべ、我が跡弔ひてたび給へと、此事申さんとて、是まで参りて候。ワヤ調「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。さりながら易き間の事供養をばのべ候べし。さて誰と志して廻向申し候べき。シテ調「まづ石山に参りつよ、源氏の供養をのべ給はど、其時我も現れて、調共に源氏を弔ふべし。ワヤ調「嬉しやそれこそ奇特なれ。いで源氏を書きしは、シテ調「恥かしや此身は浮世の土となれども、ワヤ調「名をば埋まぬ昔の下、シテ調「石山寺に立つ雲の、ワヤ調「紫式部にてましますな。シテ調「恥かしや、色に出づるか紫の、地調「色に出づるか紫の、雲も其方か夕日影、さしてそれとも名乗り得ず、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。(中入)

下こがれ—霜渡のこと
本のあらまし—本あちの萩といふ語に據る

ワヤ調「さて石山に参りつよ、念願を勤め事終り、夜も更け方の鐘の聲、心も澄める折節に、ワヤ調「有りつる源氏の物語、眞しからぬ事なれども、ワヤ調「供養をのべて紫式部の、ワヤ調「菩提を深く、ワヤ調「弔ふべきなり。三人上歌調「とは思へどもあだし世の、とは思へどもあだし世の、夢にうつろふ紫の、色ある花も一時の、あだにも消えし古への、光源氏の物語、聞くにつけてもその眞、頼み少なき心かな。頼み少なき心かな。
後シテ調「松風も、散れば形見となるものを、思ひし山の下紅葉、地調「名も紫の色に出でて、シテ調「見えん姿は恥かしや。ワヤ調「かくて夜も深更になり、鳥の聲をこまひり、心すこき折節、調「燈火のかげを見れば、さも美しき女性、紫の薄衣のそばを取り、調「影の如くに見え給ふは、夢か現か覺束な。シテ調「うつろひやすき花色の、調「衣の下こがれ、紫の色こそ見えね枯野の萩、本のあらまし末通らば、名乗らずと知ろし召されずや。ワヤ調「紫の色には出でずとあらましの、言葉の末とは心得ぬ。紫式部にてましますか。シテ調「恥かしながら我姿、ワヤ調「其面影は昨日見し、シテ調「姿に今も變らねば、ワヤ調「互に心を、

おきもせずー心置かずの意より起きと續けたり
布施一僧への贈物

シテ誦「おきもせず。地誦「寝もせで明かす此夜半の、月も心せよ。石山寺の鐘の聲、夢をも誘ふ風の前、消えしはそれか燈火の、光源氏の跡とはん。光源氏の跡とはん。

シテ誦「あら有難の御事や、何をか布施に参らせ候べき。ワヤ誦「いや布施などとは思ひもよらず候。とても此世は夢の内、昔に返す舞の袖、誦「只今舞うて見せ給へ。シテ誦「恥かしな

がらさりとは、仰をばいかで背くべき、いでくさらば舞はんとて、ワヤ誦「本より其名も紫の、シテ誦「色珍らしき薄衣の、ワヤ誦「日も紅の扇を持ち、シテ誦「恥かしながら弱々

と、ワヤ誦「あはれ胡蝶の、シテ誦「一遊び、地誦「夢の内なる舞の袖、夢の内なる舞の袖、現に返すよしもがな。シテ誦「花染衣の色襲、地誦「紫匂ふ袂かな。

シテ誦「夫れ無常といつば、目の前なれども形もなし。地誦「一生夢の如し、誰有つて百年を送る。槿花一日只おなじ。シテ、サシ誦「こよに數ならぬ紫式部、頼みを懸けて石山寺、悲願を頼み籠り居て、此物語を筆に任す。地誦「されども終に供養をせざりし科により、妄

執の雲も晴れ難し。シテ誦「今逢ひ難き縁に向つて、地誦「心中の所願を起し、一つの巻物に

成等正覺ー成佛の意

桐壺云々ー源氏の桐母桐壺の更衣の失せ給ふこと以下巻の名を以て文を續く

壽木云々ー光源氏頭中將などの雨夜物語のこと

空蟬夕顔ー共に女の名

四智ー大圓鏡智平等性智妙觀察智成所作智の四つ

薄雲ー女院藤壺のこと

紫磨一佛の姿を紫磨金といふ

玉葛の前ー玉葛の曲を見よ

かげー今カケと誦よ

夢の浮橋ー物語最終の巻

寫し、無明の眠を覺ます。南無や光源氏の幽靈成等正覺。タセそもく桐壺の、夕の煙すみやかに、法性の空に至り、壽木の夜の言の葉は、終に覺樹の花散りぬ。空蟬の、空しき此世を厭ひては、夕顔の露の命を觀じ、若紫の雲の迎へ、末摘花の臺に座せば、紅葉の賀の、秋の落葉もよしや只、たましく佛意に逢ひながら、榊葉の、さして往生を願ふべし。シテ誦「花散る里に住むととも、地誦「哀別離苦の理、まぬかれ難き道とかや。唯

すべからくは、生死流浪の須磨の浦を出でて、四智圓明の、明石の浦に澄標、いつまでも有りなん唯蓬生の宿ながら、菩提の道を願ふべし。松風の吹くとも、業障の薄雲は、晴るよ事更になし。秋の風消えずして、紫磨忍辱の藤袴、上品蓮臺に、心を懸けて誠ある、七寶莊嚴の、眞木柱の本に行かん。梅が枝の、匂ひに移る我心、藤の裏葉に置く露の、其玉葛かけしばし、朝顔の光頼まれず。シテ誦「朝には栴檀の、陰に宿木名も高き、

地誦「官位を、東屋の内に籠めて、樂しみ榮えを、浮舟に喻ふべしとかや。是も蜻蛉の身なるべし。夢の浮橋を打ち渡り、身の來迎を願ふべし。南無や西方彌陀如來、狂言綺

語を振り捨てよ、紫式部が後の世を、助け給へと諸共に、鐘打ち鳴らして、回向も既に終りぬ。

ロンギ地謡「實に面白や舞人の、名残今はと鳴く鳥の、夢をも返す袂かな。シテ謡光源氏の御跡を、弔ふ法の力にて、我も生れん蓮の、花の宴は頼もしや。地謡「實にや朝は秋の光、シテ謡「夕には影もなし。地謡「朝顔の露稻妻の影、何れかあだならぬ。定めなの浮世や。キリ地謡「よくよく物を案ずるに、よくよく物を案ずるに、紫式部と申すは、彼の石山の觀世音、假に此世に現れて、かよる源氏の物語、是も思へば夢の世と、人に知らせん御方便、實に有難き誓かな。思へば夢の浮橋も、夢の間の言葉なり。夢の間の言葉なり。

花 筐

梗 概 繼體天皇御即位前、越前に在せし頃寵幸ありし照日の前帝の御形見たる花筐を携へて、京に上り、つひに本の如く召し仕はるゝ事を作る。狂女物なり。(四番目)

シ テ 照日の前 シテツレ 侍女
子 方 天皇(謠無し) ワ キ 供奉官人
ワキツレ 御使(男)

ワキツレ「是は越前國味真野と申す所に御座候、男大迹の皇子に仕へ申す者にて候。さても都より御使あつて、武烈天皇の御代を、味真野の皇子に御譲りあり、御迎の人々まかり下り御供申し、今朝とく御上洛にて候。さる間此程御寵愛あつて召しつかはれて候。照日の前と申す御方、此程御暇にて御里に御座候が、彼の御方へ俄の御上洛につき、御玉章と朝毎に御手に馴れし御花筐をまるらせられ候を、某に持ちて参れとの御事にて候程に、只今照日の御里へと急ぎ候。あら嬉しや是へ御出で候よ。是にて申し候べし。いか

男大迹一をわあ
とべと謡ふ日本
書紀に比く記し
古事記に衰本村
と記す

花筐一花を盛る

我應神天皇の
是より御文

雲の上内裏
頼めたまへ御
なり

つれなき春一わ
がために思ひや
りなき春とて怨
む意

に申し候。レテ調「何事にて候ぞ。ワキツレ調」我君は都より御迎下り、御位に即かせ給ひ、今朝
とく御上りにて候。又是なる御文と御花篋とを、たしかにまゐらせよとの御事にて候。こ
れこれ御覽候へ。レテ調「さては我君御位に即かせ給ひ、都への御上り返すべくも御めでた
うこそ候へとよさりながら、此年月の御名残、いつの世にかは忘るべき。あら御名残
惜しや。調されども思召し忘れずして、御玉章を残し置かせ給ふ事のありがたさよ。急ぎ
見まゐらせ候はん。我應神天皇の孫苗を継ぎながら、帝位を履む身にあらざれども、天
照大神の神孫なれば、毎日に伊勢を拜し奉りし、其神感の至りにや、君臣の撰みに出
だされて、いざなはれゆく雲の上、廻りあふべき月影を、秋の頼みに残すなり、頼めた
だ袖ふれ馴れし月影の、しばし雲居に隔てありともと、地調「書き置き給ふ水莖の、跡に
残るぞ悲しき。上君と住む、ほどだにありし山里に、程だにありし山里に、ひとり残
りて有明の、つれなき春も杉間吹く、松の嵐もいつしかに、花の跡とてなつかしき、御
花篋玉章を、いだきて里に歸りけり。いだきて里に歸りけり。(中入)

紅葉の御幸一観
楓の行幸
繼體一今ケイテ
いと誦へり

玉穂の都一盤余
玉穂の宮といふ
富草一稻のこと

もちごと一天つ
空の語より續け
たり虚言なり
蘇武一漢の蘇武
が胡國に囚はれ
し時雁の足に文
を付けて故國に
音信せし故事

次第「君の恵も高照す、君の恵も高照す、紅葉の御幸はやめん。ワキツレ調「泰くも此君
は、應神天皇五世の御末、男大迹の皇子と申ししが、當年御即位をさまりて、繼體天皇
と申すなり。ワキツレ調「されば治まる御代の御影、日本の本の名もあひにあふ、ワキツレ調「大和の
國や玉穂の都に、ワキツレ調「いま宮造り、ワキツレ調「あらたなり、上調「萬代の、恵も久し富草の、
恵も久し富草の、種も榮ゆく秋の空、露も時雨も時めきて、四方に色添ふ初紅葉、松も
千年の縁にて、常磐の秋に廻りあふ、御幸の車早めん。御幸の車早めん。
後レテ調「いかにあれなる旅人、都への道教へて給べ。調「何物狂とや。物狂も思ふ心のあれ
ばこそ問へ。誦「など情なく教へ給はぬぞや。レテ調「よしなう人は教へずとも、都への道し
るべこそ候へ。あれ御覽候へ、雁の渡り候。レテ調「何雁の渡るとや。けに今思ひ出だし
たり、秋にはいつも雁の、南へ渡る天つ空、レテ調「そらごとあらじ君が住む、都とやら
んも其方なれば、レテ調「聲をしるべの便の友と、ツレ調「我も田面の雁こそ、つれて越路
のしるべなれ。レテ調「其上名におふ蘇武が旅雁、ツレ調「玉章を、つけし南の都路に、

君が住む古今集の歌下句ゆきのまにくとあとは尋ねん高間の山の一新古今集に「上モ比のみ見てや止みなん葛城や高間の山の峯の白雲」涙も色か一涙も色に出でたるなり

非形一異形に同

地謡「我をも共に連れて行け。レテ謡「宿かりがねの旅衣。地謡「飛びたつばかりの心かな。レテ謡「君が住む越の白山知らねども、行きてや見まし足引の、レテ謡「大和は何方しら雲の、高間の山のよそにのみ、見てや止みなん及びなき、雲居はいつく御影山、日の本なれや大和なる、玉穂の都に急ぐなり。下歌地謡「こゝは近江の湖なれや、みづからよしなくも、及ばぬ戀に浮舟の、上歌「こがれのく、旅をしのぶの摺衣、旅をしのぶの摺衣、涙も色か黒髪の、あかざりし別路の、跡に心の浮かれ来て、鹿の起臥堪へかねて、猶通ひゆく秋草の、野暮れ山暮れ霞分けて、玉穂の宮に著きにけり。玉穂の宮に著きにけり。ワヤ謡「時しも頃は長月や、まだき時雨の色うすき、紅葉の御幸の道の邊に、非形を戒め面に、御幸の御先を清めけり。レテ謡「さなきだに都に馴れぬ鄙人の、女と云ひ狂人と云ひ、レテ、ツレ謡「さここ心は楳の葉の、風も亂るよ露霜の、御幸の先に進みけり。ワヤ謡「不思議やな其さま人にかはりたる、狂女と見えて見苦しやとて、官人立ちより拂ひけり。詞「そこ退き候へ。レテ謡「あら悲しや君の御花籠を打ち落されて候は如何に。レテ謡「何と君の御

湯仰一暴ふこと大切にすること

かごと一かこちごとの意に籠を合めたり

花籠を打ち落されたるや。あら思はしの事や候。ワヤ謡「いかに狂女、持ちたる花籠を君の御花籠とて湯仰するは、そも君とは誰が事を申すぞ。レテ謡「事あたらしき問事かな。此君ならで日の本に、又異君のましますべきか。レテ謡「我らは女の狂人なれば、知らじと思召さるよか。忝くも此君は、應神天皇五世の御孫、過ぎし頃まで北國の、味眞野と申す山里に、レテ謡「男大迹の皇子と申しよが、レテ謡「今は此國玉穂の都に、レテ謡「體の君と申すとかや。ツレ謡「さればか程にめでたき君の。レテ謡「御花籠を恐れもなさで、ツレ謡「打ち落し給ふ人々こそ、レテ謡「我よりも猶物狂よ。上歌地謡「恐しや、恐しや、世は末世に及ぶといへど、日月は地に落ちず。まだ散りもせぬ花籠を、あらけなや荒金の、土に落し給はど、天の咎も忽に、罰あたり給ひて、我如くなる狂氣して、ともの物狂と言はれさせ給ふな。人に言はれさせ給ふな。レテ謡「かやうに申せば、地謡「かやうに申せば、只現なき花籠のかごととやおほすらん。此君いまだ其頃は、皇子の御身なれど、朝ごとの御勤に、花を手向け禮拜し、南無や天照皇大神宮、天長地久と、稱へさせ給ひつと、御手を

忘れ形見一匳を掛く
陸奥の古今集の歌下句かつみ
る人に懸やわたらん

水の月望む猿一
水中の月を捉へ
んとして瀧るゝ
猿の事佛説に
出づ

漢王一漢武帝

合させ給ひし、御面影は身に添ひて、忘れ形見までもなつかしや戀しや。レテ謡「陸奥の、
浅香の沼の花がつみ、地謡「且見し人を戀草の、忍ぶもぢすり誰故ぞ、亂心は君のため。
こよに來てだに隔てある、月の都は名のみして、袖にも移されず、又手にも取られず、唯
徒に水の月を、望む猿の如くにて、叫び伏して泣き居たり。叫び伏して泣き居たり。
ワヤ謡「如何に狂女、宣旨にて有るぞ御車近う参りて、いかにも面白う狂うて舞ひ遊び候
へ。觀覽あるべきとの御事にてあるぞ、急いで狂ひ候へ。レテ謡「うれしやさては及びなき、
御影を拜み申すべき、誦いざや狂はん諸共に、レテ、ツレ謡「御幸に狂ふ囉こそ、地謡「御先を拂ふ
袂なれ。レテ、サレ謡「忝き御たとへなれども、いかなれば漢王は、地謡「李夫人の御別れを
歎き給ひ、朝政神さびて、夜のおととも徒に、唯思ひの涙御衣の袂をぬらす。レテ謡「ま
た李夫人は紅色の、地謡「花のよそほひ衰へて、萎るゝ露の床の上、塵の鏡の影を恥ぢて、
終に帝に見え給はずして去り給ふ。クセ帝ふかく歎かせ給ひつゝ、其御かたちを、甘泉殿
の壁にうつし、我も畫圖に立ち添ひて、明暮歎き給ひけり。されどもなかく、御思ひ

李少一李少君と
いふ方士の事を
太子としたるな
らむ
くわするこく
未詳

反魂香一魂を招
きかへす靈藥

標榜悠揚一物幽
かなる意

は増されども、物いひ交す事なきを、深く歎き給へば、李少と申す太子のいとけなくま
しますが、父帝に奏し給ふやう、レテ謡「李夫人は本これ、地謡「上界の嬖妾、くわするこく
の仙女なり。一旦人間に、生るとは申せども、終に本の仙宮に歸りぬ。泰山府君に申
さく、李夫人の面影を、しばらくこよに招くべしとて、九華帳の内にして、反魂香を燒
き給ふ。夜ふけ人しづまり、風冷しく月秋なるに、それかと思ふ面影の有るか無きかに
かけろへば、猶いやましの思ひ草、葉末に結ぶ白露の、手にも溜らでほどもなく、唯い
たづらに消えぬれば、標榜悠揚としては又尋ねべき方なし。レテ謡「悲しさのあまりに、
地謡「李夫人の住みなれし、甘泉殿を立ち去らず、空しき床を打ち拂ひ、古き衾古き枕、ひ
とり袂をかたしく。

ワヤ謡「宣旨にてあるぞ、其花筐を参らせ上げ候へ。レテ謡「餘りのことに胸ふさがり、心空
なる花筐を、恥かしながらまるらする。ワヤ謡「帝は之を觀覽あつて、疑ひもなき田舎にて、
御手に馴れし御花筐、同じく留め置き給ひし、謡「御玉章の恨を忘れ、狂氣を止めよ本

花の置の名を留めて云々形見の語の起りを此くいへるは作者の技巧のみ

の如く、召し使はんとの宣旨なり。レテ謡けにありがたや御めぐみ、直なる御代に歸るし
るしも、思へば保ちし筐の徳、ワキ謡「かれこれ共に時に逢ふ、レテ謡花の筐の名を留めて、
ワキ謡」戀しき人の手馴れし物を、レテ謡「かたみと名づけそめし事、ワキ謡」此時よりぞ、
レテ謡「はじまりける。地謡」有難やかくばかり、情の末を白露の、めぐみに洩れぬ花筐の、
御かごとましまさぬ、君の御ころぞありがたき。

ナリ地謡「御遊も既に時過ぎて、御遊も既に時過ぎて、今は還幸なし奉らんと、供奉の人々
御車やりつどけ、もみぢ葉散り飛ぶ御先を拂ひ、抛ふや袂も山風に、誘はれゆくや玉穂
の都、さそはれゆくや玉穂の都に、盡きせぬ契ぞ有難き。

富士太鼓

梗概

内裏にて舞樂行はれし初富士といふ樂人、淺間といふ樂人に嫉まれて討たれしあとに、富士の妻及び女たづね行きて、凶變を知り、その形見の裝束を受取りて悲歎にかきくる事を作る。(四番目)

シテ 富士の妻 子方 子(姫)
ワキ 官人 狂言 従者

萩原の院一花園
天皇の御事

信濃なる一後撰
集の歌三句燃ゆ
なれば

ワキ「是は萩原の院に住へ奉る臣下なり。さても内裏に七日の管絃の御座候により、天
王寺より淺間と申す樂人、是は竝びなき太鼓の上手にて候を召し上せられ、太鼓の役を
つかまつり候所に、又住吉より富士と申す樂人、是も劣らぬ太鼓の上手にて候が、管絃の役
を望み罷り上りて候。此由聞し召され、富士淺間何れも面白き名なり。さりながら古き
歌に、信濃なる淺間の嶽も燃ゆるといへば、富士の煙のかひや無からんと聞く時は、
名こそ上なき富士なりとも、あつばれ淺間は増さうするものをと勅説有りしにより重

雲の上云々富士山の形容

住吉の頼政の歌下句月落ちかかる淡路島山

ねて富士と申す者もなく候。さる程に淺間此由を聞き、にくき富士が振舞かなとて、彼の宿所に押しよせ、あへなく富士を討つて候。まことに不便の次第にて候。定めて富士が縁の無きことは候まじ、もし尋ね來りて候はど、形見を遣はさばやと存じ候。

次第 謡 雲の上なほ遙なる、雲の上なほ遙なる 富士の行力を尋ねん。 謡 謡 これは津の國住吉の樂人、富士と申す人の妻や子にて候。さても内裏に七日の管絃のましますにより、天王寺より樂人召され參る由を聞き、妾が夫も太鼓の役、子方 謡 世に隠れ無ければ、望み申さん其ために、都へのほりし夜の間の夢、心にかよる月の雨、下歌 身を知る袖の涙かと、明かしかねたる夜もすがら、上歌 寝られぬまよに思ひ立つ、寝られぬまよに思ひ立つ、雲居やそなた故郷は、跡なれや住吉の松の隙より眺むれば、月落ちかよる山城も、はや近づけば笠をぬぎ、八幡に祈り掛帯の 結ぶ契の夢ならで 現に逢ふや男山 都にはやく著きにけり。 都にはやくに著けり。

シテ 謡 急ぎ候程に、都に著きて候。 此所にて富士の御行方を尋ねばやと存じ候。いかに案

置ねて問はば云云一中々に淺まし意煙とは成りぬらん一死したることをいふ煙は富士山の縁

鳥甲一變人の頭に著る物

内申し候。 狂言 シカく。 謡 是は富士がゆかりの者にて候。富士に引き合はせられて給はり候へ。 狂言 シカく。 謡 富士がゆかりと申すは何くにあるぞ、 謡 これに候。 謡 さて是は富士がため何にて有るぞ。 謡 恥かしながら妻や子にて候、 謡 なう富士は討たれて候よ。 謡 何と富士は討たれたると候や。 謡 なかくの事富士は淺間に討たれて候。 謡 さればこそ思ひ合はせし夢の占、重ねて問はばなかくに、淺間に討たれ情なく、 地謡 さしも名高き富士はなど、煙とは成りぬらん。今は歎くに其かひもなき跡に残る思ひ子を、見るからにいと猶すよむ涙はせきあへず。

謡 今は歎きてもかひなき事にて有るぞ。 是こそ富士が舞の装束候よ、それ人の嘆には、形見に過ぎたる事あらじ。 是を見て心を慰め候へ。 謡 今までは行方も知らぬ都人の、妾を田舎の者と思召して、偽り給ふと思ひしに、眞にしるき鳥甲、月日もかはらぬ狩衣の、疑ふ所もあらばこそ。痛はしや彼人出で給ひし時、みづから申すやう、天王寺の樂人は召にてのほりたり、御身は勅説なきに、押して參れば下として、上を量るに

地給一任吉神社にて扶持を受くも意

似たるべし。其うへ御身は當社地給の樂人にて、明神に仕へ申すうへは、何の望の有るべきぞと申しよを、知らぬ顔にて出で給ひし、地謡その面影は身に添へど、まことの主は亡きあとの、忘形見ぞよしなき。上歌かねてより、かく有るべきとおもひなば、かく有るべきとおもひなば、秋猿が手を出だし、斑狼が涙にても、留むべきものを今更に、神ならぬ身を恨みかこち、歎くぞあはれなる。歎くぞあはれなりける。

レテ調「あら恨めしや如何に嫌、あれに夫の敵の候ぞやいざ討たう。地謡「あれは太鼓にてこそ候へ。思ひのあまりに御心亂れ、條なき事を仰せ候ぞや、あら淺ましや候。レテ調「うたての人の言ひごとや。あかで別れし我夫の、失せにし事も太鼓故、詠たど恨めしきは太鼓なり。夫の敵よいざ打たう。地謡「けに理なり父御前に、別れし事も太鼓故、さあらば親の敵ぞかし。打ちて恨みを晴らすべし。レテ調「妾がためには夫の敵、いざやねらはん諸共に。地謡「男の姿狩衣に、物の具なれや烏甲。レテ調「恨の敵討ちをさめ、地謡「鼓を告に、レテ調「埋まんとて、地謡「寄するや関の聲立てよ。秋の風より冷ましや。レテ「打てや打

こりの泣く一徳りに孤塵を掛く遺孤を懸なり

上しなの恨みや一之れより幽霊憑きたる態太鼓の烽火一太鼓の上に附きたる火焰をさす眞の富士おろしに之れより舞の形容なつかしや一妻の本心に返りての調

五常樂一樂名

千秋樂一同

太平樂一同

招きかへす舞の手一羅陵王といふ樂あり一名を關陵王没日還午樂といふ日を極返す手ありといふ

てやと攻鼓、地謡「あらさてこりの泣く音やな。

上歌地謡「なほも思へば腹たちや、なほも思へば腹たちや、けしたる姿に引きかへて、心言葉も及ばれぬ、富士が幽霊きたると見えて、よしなの恨や、もどかしと太鼓打ちたるや。地謡「持ちたる撥をば劍と定め、地謡「持ちたる撥をば劍と定め、噴悲の焔は太鼓の烽火の、天にあがれば雲の上人、眞の富士おろしに、絶えず揉まれて裾野の櫻、四方へばつと散るかと見えて、花衣さす手も引く手も、俗人の舞なれば、太鼓の役は本より聞ゆる、名の下空しからず、たぐひなやなつかしや。

上歌地謡「けにや女人の悪心は、煩惱の雲晴れて、五常樂を打ち給へ。レテ調「修羅の太鼓は打ちやみぬ、此君の御命、千秋樂と打たうよ。地謡「さてまた千代や萬代と、民も榮えて安穩に、レテ調「太平樂を打たうよ。地謡「日も既に傾きぬ。日も既に傾きぬ。山の端を眺めやりて、招きかへす舞の手の、うれしや今こそは思ふ敵は打ちたれ。打たれて音をや出だすらん、我には晴るよ胸の煙、富士が恨を晴らせば、涙こそ上なかりけれ。

ヤリ地謡「是までなりや人々よ、これまでなりや人々よ。暇申してさらばと、伶人の姿烏甲、皆ぬぎ捨てよ我心、みだれ笠みだれ髪、斯かる思は忘れじと、また立ちかへり太鼓ここせ、憂き人の形見なりけれと、見置きてぞ歸りける。跡見置きてぞ歸りける。」

内十五

皇帝

梗一 玄宗皇帝の寵幸せる楊貴妃の病惱を鎮めんとて、鍾馗大臣概一の亡靈現れて、悪鬼を退散せしむる事を作る。(五番目)

シテ 鍾馗(前は老翁) シテツレ 楊貴妃

シテツレ 鬼神

ワ キ 玄宗皇帝 大臣

ワキヤン通「春は春遊に入つて夜は夜を専とし、後宮の佳麗三千人、三千の寵愛一身にあり。かく類なき貴妃の紅色、芙蓉の紅、色かへて、未央の柳の力もなし。地謡「たど弱と伏柴の、露の命もいかならん。上歌「心づくしの春の夜の、心づくしの春の夜の、木の間の月も朧にて雲井に歸る雁も、わが如くにや鳴き渡る。霞の内の榊櫻、ひとへに惜しき姿かな。ひとへに惜しき姿かな。」

春は春遊に云々
白氏文集長恨
歌の文意
芙蓉一蓮花
未央一宮の名
榊櫻一かにはざ
くら

如何に奏聞申すべき事の候。ワヤ調「不思議やな宮中静まり物さびて、心を澄ます折節に、御階の下に来るを見れば、さも不思議なる老人なり。そも汝はいかなる者ぞ。レヲ調「是は伯父の御時に、鍾馗と云ひし者なりしが、及弟適はぬ事を歎き、玉階にて頭を打ち碎き、身を徒になしよ者の、亡心是まで参りたり。ワヤ調「實にさる事を聞きしなり。其まよ都の内に斂め、贈官せられし大臣の、其亡心は何のため、只今こよに来れるぞ。シテ調「實によく知ろし召されたり。贈官のみか縁袍を、死骸に蒙る舊恩に、今かく君の寵愛し給ふ、貴妃の病を平らけて、奇特を見せしめ申すべし。然らば件の明王鏡を、彼の御枕に立て置き給はど、誦必ず姿を現さんと、上歌地謡「直奏かたく申し上げ、直奏かたく申し上げ、我通力を起しつと、楊貴妃の花の姿、誘ふ風を静めんと、申しもあへず其姿御階の下に失せにけり。御階の下に失せにけり。

緑袍一官服
 欽め一癖ること
 誘ふ風一花の姿
 といふより病氣
 を風に誘ふ
 衣を取り枕を推す
 一長恨歌の體
 衣推枕起徘徊
 の文意

玉鬘 かよる姿は恥かしや。ワヤ調「代るに代る物ならば、かく苦しみを見るべきかと、力を添へて木綿四手の、貴妃鬘髪をも上げず、ワヤ調「ひれふすや、地謡「翠翹金雀とりぐに、かざしの花もうつろふや、枕破の斜紅の、世に類なき姿かな。實にや春雨の、風に従ふ海棠の、眠れる花の如くなり

翠翹金雀一髪飾
 の具
 枕破の斜紅一枕
 のあとの顔に紅
 を印すること

明皇一玄宗皇帝

然るに明皇、榮花を極め世を保ち、色を重んじ給ふ故、類なき貴妃に斯く、契をこめて年月の、春宵短きを苦しみて、日高く起き出で、朝政も絶えんぐに、移る方なき中なれど、ワヤ調「遁れ難しや世の中は、地謡「思はぬ障り有明の、月の都の舞樂まで、學び残せる方もなく、秘曲傳へし笛竹の、壽なれや此契、天長く地久しくて、盡くる時もあるまじ。

御几帳一臺に柱
 をつけて垂れた
 るとばり

實に今思ひ出だしたり。彼老人の教の如く、明王鏡を取り出だし、彼の御枕に置くべきなり。大臣誦「勅詔尤も然るべしと、月卿雲客一同に、明王鏡を取り出だし、御枕近き御几帳に、立て添へてこそ置きたりけれ。上歌地謡「かくて暮れ行く雲の足、かくて暮れ

行く雲の足、漂ふ風も冷ましく、身の毛もよだつ折節に、不思議や鏡の其内に、鬼神の姿ぞうつりける。

九華の帳―花紋を纏ひたる几帳より竹―流れ寄る竹

武徳―唐高祖の時の年號

地誦「九華の帳を押し除けて、九華の帳を押し除けて、彼御枕により竹の、笛をおつ取りさし上げて、勇み喜ぶ其氣色、鏡にうつり見えければ、帝は是を窺覽あつて、さては病鬼よ遁さじと、劔を抜いて立ち給へば、天に上り地に又下り、飛行自在を現して、帝に向ひ怒をなせば、劔を振り上げ斬り給へば、御殿の柱に立ち隠れて、姿も見えず失せにけり。ワヤ誦「不思議や曇る空晴れて、宮中光りかよやきて、地誦「鳴動するこそ恐しけれ。後レテ誦「そもく是は、武徳年中に贈官せられし、鍾馗大臣の精靈なり。詞さても此君寵愛し給ふ、貴妃の病を平けんと、通力を以て奇瑞を見す。誦「南無天形星王我劔降鬼と、秘文を稱へ駒に乗じ、虚空を翔つて参内せり。上歌地誦「悪鬼は是を見るよりも、悪鬼は是を見るよりも、驚き騒ぎ、彼の眞木柱に隠れけるを、鍾馗の精靈馬より下り立ち、利劔をひつ提け袂をかざし、明王鏡に向ひ給へば、鬼

六宮―後宮のことと大奥なり

神の姿は隠れもなし。(舞)鬼神誦「鬼神は通力自在も失せて、地誦「鬼神は通力自在も失せて、起きつ轉びつ走り出づるを、追つ詰め給へば御殿を飛び下り、六宮の玉階に、走り上るを、遁さじ物をと引き下し、利劔を振り上げづだくに斬り放し、庭上に投げ捨て、忽ちに、貴妃も息災なほ此君の、恵を仰ぎ、守の神となるべしと、玉體を拜し奉り、玉體を拜し奉りて、姿は夢とぞなりにける。

通盛

梗 平通盛は教盛の子なり。一の谷の合戦に討死す。契をこめし小宰相局はその音信を得て、世をはかなみ阿波の海に投す。此曲は二人の幽霊現れて昔語をなし、旅僧の弔ひを受くる事を作る。(二番目)

シテ 平通盛(前は漁翁) ツレ 小宰相局(前は女) ワキ 僧

一夏一安居とて夏季九十日間佛道を修行するこ
鳴門一機音の鳴ると掛く
入相ごさめれ一晩鐘にてこそあさめれの意

ワキ「是は阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候。さて此浦は平家の一門果て給ひたる所なれば痛はしく存じ、毎夜此磯邊に出でて御經を読み奉り候。只今も出でて弔ひ申さばやと思ひ候。シテ上歌謡「磯山に、暫し岩根のまつ程に、暫し岩根のまつ程に、誰が夜舟とは白波に、楫音ばかり鳴門の、浦静なる今宵かな。浦静なる今宵かな。ツレ、サシ謡「すは遠山寺の鐘の聲。この磯ちかく聞え候。シテ謡「入相ごさめれ急ぎ給へ。ツレ謡「程なく暮るよ日の數かな。シテ謡「昨日過ぎ、ツレ謡「今日と暮れ、シテ謡「明日またかく

誰そや云々古歌を引く

蘆火一盞を焚く
弘誓云々法華經普門品の文句

こそ有るべけれ。ツレ謡「されども老に頼まぬは、シテ謡「身の行末の日數なり。シテ、ツレ一謡「いつまで世をばわたづみの、あまりに隙も波小舟、ツレ謡「何を頼みに老の身の、ツレ謡「命のためにつかふべき、上歌謡「憂きながら、心の少し慰むは、心の少し慰むは、月の出汐の海士小舟、さも面白き浦の秋の景色かな。所は夕浪の、鳴門の沖に雲つとく、淡路の島や離れ得ぬ、浮世の業ぞ悲しき。浮世の業ぞ悲しき。シテ、サシ謡「暗濤月を埋んで清光なし。ツレ謡「舟に焚く海士の篝火更け過ぎて、シテ、ツレ謡「苦よりくどる夜の雨の、蘆間に通ふ風ならでは、音する物も波枕に、夢か現か御經の聲の、嵐につれて聞ゆるぞや、楫音を静め唐船を抑へて、聽聞せばやと思ひ候。ワキ謡「誰そや此鳴門の沖に音するは。シテ謡「泊定めぬ海士の釣舟候よ。ワキ謡「さもあらば思ふ仔細有り此磯近く寄せ給へ。シテ謡「仰に随ひさし寄せ見れば、ワキ謡「二人の僧は巖の上、シテ謡「漁の舟は岸の陰、ワキ謡「蘆火の影を假初に、御經を開き讀誦する。シテ謡「有難や漁する、業は蘆火と思ひしに、ワキ謡「善き燈火に、シテ謡「鳴門の海の、シテ、ワキ謡「弘誓深如海、

歴劫不思議の奇縁によりて、五十展轉の隨喜功德品。下歌地謡「實にありがたやこの經の、おもてぞ暗き浦風も、蘆火の影を吹き立てよ、聴聞するぞありがたき。上歌龍女變成と聞く時は、龍女變成と聞く時は、姥も頼もしや、おほぢはいふに及ばず、願ひも三つの車の、蘆火は清く明かすべし。猶々御經遊ばせ。猶々御經遊ばせ。

ワヤ調「あら嬉しや、候、火の光にて心靜かに御經を讀み奉りて候。まづく此浦は平家の一門果て給ひたる所なれば、毎夜此磯邊に出でて御經を讀み奉り候、取り分き如何なる人此浦にて果て給ひて候ぞ、委しく御物語り候へ。ワヤ調「仰の如く或は討たれ、又は海にも沈み給ひて候。中にも小宰相の局こそ、や、諸共に御物語り候へ。ワヤ調「さるほどに平家の一門、馬上を改め、海士の小船に乗り移り、月に棹さす時もあり。ワヤ調「こよだにも都の遠き須磨の浦、ワヤ調「思はぬ敵に落されて、實に名を惜しむ武士の、磯敷盧島や淡路灣、阿波の鳴門に著きにけり。ワヤ調「さる程に小宰相の局乳母を近づけ、ワヤ調「如何に何とか思ふ、われ頼もしき人々は都に留まり、通盛は討たれぬ、誰を頼みてながら

沈まうぞらめ
沈まんとすらん
の意
西一西方極樂淨
土をさす

八軸一法華經八
卷のこと
方便品一法華經
の内

ふべき。此海に沈まんとて、主従泣くく手を取り組み舟端に臨み、ワヤ調「さるにてもある海にこそ沈まうぞらめ。地謡「沈むべき身の心にや、涙のかねて浮むらん。上歌地謡「西はと問へば月の入る、西はと問へば月の入る、其方も見えす大方の、春の夜や霞むらん、涙も共に曇るらん、乳母泣くく取り付きて、此時の物思ひ、君一人に限らず、思召し止り給へと、御衣の袖に取り付くを、振り切り海に入ると見て、老人も同じ満汐の、底の水屑となりけり。底の水屑となりけり。(中入)

ワヤ二人「このはちぢく
上歌「此八軸の誓にて、此八軸の誓にて、一人も洩らさじの、方便品を讀誦する。ワヤ調「如我昔所願。

後シテ調「今者已満足、ワヤ調「化一切衆生、シテ調「皆令入佛道の、地謡「通盛夫婦、御經に引かれて立ち歸る波の、シテ調「あら有難の御法やな。

ワヤ調「不思議やなさもなまめける御姿の、波に浮みて見え給ふは、いかなる人にてましますぞ。ワヤ調「名ばかりはまだ消え果てぬあだ波の、阿波の鳴門に沈み果てし、小宰相の局

武將たつし譽
たりしの音便譽
を得たる意を越
前と續けりたり

追手一城の表
宗徒一置だちた
ること

我ともかくも
若し討死にても
せばの意

數行虞氏が涙
千手に注す
能登の守一教經

の幽靈なり。ワヤ誦今一人は甲冑を帶し、兵具いみじく見え給ふは、いかなる人にてましますぞ。レテ誦「是は生田の森の合戦に於いて、名を天下に掲げ、武將たつし譽を、越前の三位通盛、昔を語らん其爲に、是まで現れ出でたるなり。サレ地誦「そもく此一の谷と申すに、前は海、上は嶮しき鴨越、眞に鳥ならでは翔り難く、獸も、足を立つべき地にあらず。レテ誦「只幾度も大手の陣を心もとなきぞとて、地誦「宗徒の一門さし遣さる、通盛も其随一たりしが、忍んで我陣に歸り、小宰相の局に向ひ、クセ既に軍、明日にきはまりぬ、痛はしや御身は、通盛ならで此うちに、頼むべき人なし、我ともかくもなるならば、都に歸り忘れずは、亡き跡とひてたび給へ、名残惜しみの盃、通盛酌を取り、指す盃の宵の間も、轉寢なりし睦言は、たとへば唐土の、項羽高祖の攻を受け、數行虞氏が涙も、是にはいかでまさるべき。燭暗うして、月の光にさし向ひ、語り慰む處に、レテ誦「舍弟の能登守、地誦「はや甲冑をよろひつと、通盛は何くにぞ、など遅なはり給ふぞと、呼ばはりし其聲の、あら恥かしや能登守、我弟といひながら、他人より猶恥かしや。暇

近江一敵に逢ふ
と言掛く

申してさらばとて、行くも行かれぬ一の谷の、所から須磨の山の、後髪ぞ引かるよ。レテ誦「さる程に合戦も半なりしかば、但馬守經政もはや討たれぬと聞ゆ。ワヤ誦「さて薩摩守忠度の果はいかに。レテ誦「岡部の六彌太、詞忠澄と組んで討たれしかば、あつばれ通盛も名ある侍もがな、討死せんと待つ所に、諸すはあれを見よ好き敵に、地誦「近江國の住人に、近江の國住人に、木村源吾重章が、鞭を上げて驅け來る。通盛少も騒がず、抜き設けたる太刀なれば、兜の眞向ちやうと打ち、返す太刀にてさし違へ、共に修羅道の苦を受くる、憐みを垂れ給ひ、よく弔ひてたび給へ。ワヤ誦「讀誦の聲を聞く時は、讀誦の聲を聞く時は、惡鬼心を和け、忍辱慈悲の姿にて、菩薩もこよに來迎す。成佛得脱の身となり行くぞありがたき。身となり行くぞありがたき。

檜垣

梗概

以前は白拍子なりし檜垣の姥が、曾て白河にて、藤原興範に歌詠みかけしことは後撰集に出で、後又大和物語にも潤飾して載せられたり。此曲は姥が地獄の苦患に堪へかねて、旅僧の弔問を受くといふ筋なり。重き能柄なり。(老女物)

シテ 檜垣姥(前は老女) ワキ 僧

岩戸—雲岩寺あり觀音を本尊と致景—風景のこと

影白河—頭の白くうつることを白河に言掛く

ワキ「是は肥後の國岩戸と申す山に居住の僧にて候。さても此岩戸の觀世音は、靈驗殊勝の御事なれば、暫く參籠し所の致景を見るに、詭南西は海雲漫々として萬古心の内なり。人稀にして慰み多く、致景あつて郷里を去る、眞に住むべき靈地と思ひて、三年が間は居住仕つて候。詞こよに又百にも及ぶらんとおほしき老女、毎日關伽の水を汲みて來り候。今日も來りて候はど、いかなる者ぞと、名を尋ねばやと思ひ候。

シテ次第詠「影白河の水汲めば、影白河の水汲めば、月も袂や濡らすらん。ヤンそれ籠鳥は雲

貧家親知少身賤故人疎矣一本朝文粹橋在列の文句

後撰集—天曆の勅撰歌集みづはくむ—老體の形容なるが語源につきて諸説あり檜垣—檜板にてつくれる垣白拍子—歌舞を事とする遊女興範—仁和の比叡前守たり

を戀ひ、歸雁は友をしのぶ。人間もまた是れ同じ。貧家には親知少く、賤しきには故人疎し、老悴衰へ形もなく、露命窮つて霜葉に似たり。下流るゝ水のははれ世の、その理を汲みて知る。上歌こよは所も白河の、こよは所も白河の、水さへ深き其罪を、浮かみやすると捨人に、値遇を運ぶ足引の、山下庵に著きにけり。山下庵に著きにけり。詞いつもの如く今日もまた御水あけて参りて候。ワキ詠「毎日老女の歩み返すくも痛はしうこそ候へ。シテ詠「せめてはかやうの事にてこそ、少の罪をも通るべけれ。亡からん跡を弔ひ給ひ候へ。詞「明けなば又参り候べし。御暇申し候はん。ワキ詠「暫く。御身の名を名のり給へ。シテ詠「何と名を名乗れと候や。ワキ詠「なかくの事。シテ詠「是は思ひもよらぬ仰かな。彼後撰集の歌に、謠年ふればわが黒髪も白河の、詞みつはくむまで老いにけるかなと、よみしもわらはが歌なり。昔筑前の太宰府に、庵に檜垣しつらひて住みし白拍子、後には衰へて此白河の邊に住みしなり。ワキ詠「實にさる事を聞きしなり。其白河の庵のあたりを、藤原の興範通りし時。シテ詠「水やあると乞はせ給ひし程に、其水汲みて参らするとて、

夕まぐれして
夕暮に紛れ入る
こと

朝有紅顔詩世
路蕃爲白骨
朽郊原一朗詠
集の詩句
有爲一有爲轉變
のこと

ワヤ「みづはくむとは、シテ」よみしなり。地「そもみづはくむと申すは、そもみづはくむと申すは、唯白河の水にはなし。老いて屈める姿をば、みづはくむと申すなり。其しるしをも見給はど、彼の白河の邊にて、我跡吊ひてたび給へと、夕まぐれして失せにけり。夕まぐれして失せにけり。

ワヤ「さては、古の檜垣の女假に現れ、我に言葉をかはしけるぞや。一つは末世の奇特ぞと、思ひながらも尋ね行けば、上歌「不思議や早く日も暮れて、不思議や早く日も暮れて、河霧深く立ちこもる、陰に庵の燈火の、ほのかに見ゆる不思議さよ。ほのかに見ゆる不思議さよ。

を期せざらん。誰かは是れを期せざらん。

熱鐵の桶云々
地獄の苦役をさ
す
釣瓶の水に云々
一月の映るさま
をいふ

ワヤ「不思議やな聲を聞けば有りつる人なり。同じくは姿を現し給ふべし。御跡とひて参らせん。シテ」さらば姿を現して、御僧の御法を受くべきなり。人にな現し給ひそとよ。ワヤ「なか／＼に人に現す事有るまじ早々姿を見え給へ。シテ」涙曇りの顔ばせは、それとも見えぬ衰へを、誰白河のみつはくむ、老の姿ぞ恥かしき。ワヤ「あら痛はしの御有様やな。今も執心の水を汲み、輪廻の姿見え給ふぞや。早々浮み給へ。シテ」我いにしへは舞女の響世に勝れ、其非深き故により、今も苦しみを三瀬河に、熱鐵の桶をになひ、猛火の釣瓶を提けて此水を汲む。其水湯となつて、我身を焼く事隙もなけれど、此程は御僧の知遇に引かれて、釣瓶はあれども猛火はなし。ワヤ「さらば因果の水を汲み、其執心を振り捨てよ、とく／＼浮み給ふべし。シテ」いで／＼さらば御僧のため、此かき水を汲み乾さば、罪もや淺くなるべきと、ワヤ「思も深き小夜衣の、袂の露の王襷、シテ」影白河の月の夜に、ワヤ「底澄む水を、シテ」いざ汲まん。地「釣瓶の水に影落ちて、袂を

月や昇るらん。

水は云々一茄子
に青出子藍而
青於藍水出子
水而寒於水と
あるを引く

波かけし藤の
縁語
希冊の細布一け
みの里より出す
幅狭き布古歌の
詞なり

クリ地謡「それ残星の鼎には北溪の水を汲み、後夜の爐には南嶺の柴を焚く。レテ、サレテ、それ
氷は水より出でて水よりも寒く、地謡「青き事藍より出でて藍より深し。本の憂き身の報
ならば、今の苦しみ去りもせで、レテ、サレテ、いや増さりぬる思の色、地謡「紅の涙に身を焦が
す、クセ、釣瓶の懸繩繰り返し、憂きいにしへも、紅花の春のあした、紅葉の秋の夕暮も、
一日の夢と早なりぬ。紅顔の粧、舞女の響もいとせめて、さも美しき紅顔の、翡翠の
鬘花しをれ、柱も眉も霜降りて、水にうつる面影、老悴影沈んで、縁に見えし黒髪は、土
水の藻屑塵芥、變りける身の有様ぞ悲しき。實にや有りし世を、思ひ出づればなつかし
や。其白河の波かけし、レテ、サレテ、藤原の興範の、地謡「其いにしへの白拍子、今一節と有りし
かば、昔の花の袖、今更色も麻衣、短き袖を返し得ぬ、心ぞつらき陸奥の、希冊の細布
胸合はず、何とか白拍子、其面影の有るべき。よししくそれとても、昔手馴れし舞なれ
ば、舞はでも今は適ふまじと、レテ、サレテ、興範しきりに宣へば、地謡「淺ましながら麻の袖落

ねをこそ一音と
根とを掛く

うち拂ひ舞ひ出だす、レテ、サレテ、檜垣の女の、地謡「身の果を、(舞)レテ、サレテ、水掬ふ、釣瓶の繩の繰
り返し、地謡「昔に歸れ白河の波。白河の波白河の、レテ、サレテ、水のあはれを知る故に、是まで
現れ出でたるなり。地謡「運ぶ蘆鶴の、ねをこそ絶ゆれ浮草の、水は運びて参らす、罪を
浮めてたび給へ。罪を浮めてたび給へ。

櫻川

概 梗
人商人にかどはかされし我が子の行方を慕ふ、狂亂のさまなる女の常陸の櫻川にてつひに尋ねる子に廻り逢ふよしを作る。艶麗なる櫻花を以て景情を美化せしめたる作なり。前の三井寺と同巧異曲。(四番目)

シテ 狂女 子方 櫻子
ワキ 僧 ツレ 人商人 ツレ 里人

人商人一人の子の賣買をする者

ワキツレ詞「かやうに候者は、東國方の人商人にて候。我久しく都に候ひしが、此度は筑紫日向に罷り下りて候。又昨日の暮程に幼き人を買ひ取りて候。彼人申され候は、此文と身の代とを、櫻の馬場の西にて櫻子の母と尋ねて、慥に届けよと仰せ候程に、只今櫻子の母の方へと急ぎ候。此あたりにて有りけに候。まづ〱案内を申さばやと存じ候。いかに案内申し候、櫻子の母の渡り候か。シテ詞「誰にて渡り候ぞ。ツレ詞「さん候、櫻子の御方より御文の候。又此代物をたしかに届け申せと仰せ候程に、是まで持ちて参りて候。か

さて〱〱〱これより文の文言

是を云々又文言を讀み上げ出離―出家遁世のこと

木華開耶姫―大山祇神の御女
住みうかれたる―住み憂くなりたること

まひてたしかに届け申すにて候。シテ詞「あら思ひよらずや。先々文を見うするにて候。誦さても〱〱〱此年月の御有様、見るも餘りの悲しさに、人商人に身を賣りて東の方へ下り候。なう其子は賣るまじき子にて候ものを。や、あら悲しや、早今の人も行方知らずなりて候はいかに。誦 是を出離の縁として、御様をも變へ給ふべし、只返す〱〱も御名残こそ惜しう候へ。地誦「名残をしくはなにしにか、添はで母には別るらん。上歌 ひとり伏屋の草の戸の、ひとり伏屋の草の戸の、明し暮して憂き時も、子を見ればこそ慰むに、さりとは我が頼む、神も木華開耶姫の御、氏子なるものを、櫻子留めてたび給へ。さなきだに、住みうかれたる故郷の、今は何にか明暮を、堪へて住むべき身ならねば、我が子の行くへ尋ねんと、泣く〱〱迷ひ出でて行く。泣く〱〱迷ひ出でて行く。(申入)
ワキ次第誦「頃待ち得たる櫻狩、頃待ち得たる櫻狩、山路の春に急がん。誦 是は常陸國磯邊寺の住僧にて候。又是に渡り候幼き人は、何くとも知らず愚僧を頼む由仰せ候程に、師弟の契約をなし申して候。又此あたりに櫻川とて花の名所の候、今を盛の由申し候程に、

雲の林一花を雲と見立てたるなり

幼き人を伴なひ、只今櫻川へと急ぎ候。上歌謡 筑波山、此面彼面の花盛、此面彼面の花盛、雲の林のかけ茂き、緑の空もうつらふや、松の葉色も春めきて、嵐も浮む花の波、櫻川にも著きにけり。櫻川にも著きにけり。

肉ひ網一魚をすくひて捕る網

フレ調「いかに申し候。何とて遅く御出で候ぞ待ち申して候。ツヤ調「さん候 皆々御供申し候程に、さて遅なはりて候。あら見事や候。花は今を盛と見えて候。ツレ調「なかくの事花は今が盛にて候。又こよに面白き事の候。女物狂の候が、美しき掬ひ網を持ちて、櫻川に流るゝ花をすくひ候が、けしからず面白う狂ひ候。是に暫く御座候ひて、此物狂を幼き人にも見せ参らせられ候へ。ツヤ調「さらば其物狂を此方へ召され候へ。ツレ調「心得申し候。やあく、彼物狂に、いつもの如く掬ひ網を持ちて、此方へ來れと申し候へ。

花散れる云々古今集深養父の歌

レテ一雙調「いかにあれなる道行人、櫻川には花の散り候か。調 何散方になりたるとや。悲しやなさなきだに、行く事やすき春の水の、流るゝ花をや誘ふらん。花散れる水のまにまにとめくれば、山にも春はなくなりけりと聞く時は、少しなりとも休らはど、花

櫻花散りにし云云一同集貫之の歌末句波ぞ立ちける

天さかる一部の枕詞

にや疎く雪の色、櫻花、櫻花散りにし風の名残には、地謡「水なき空に波ぞ立つ。レテ調「思も深き花の雪、地謡「散るは涙の川やらん。レテ、サレ調「是に出でたる物狂の、故郷は筑紫日向の者、さも思子を失ひて、思ひ亂るゝ心筑紫の、海山越えて箱崎の波立ち出でて、須磨の浦、又は駿河の海過ぎて、常陸とかやまで下り來ぬ。實にや親子の道ならずば、遙けき旅を如何にせん。調こよに又名に流れたる櫻川とて、さも面白き名所あり。調別れし子の名も櫻子なれば、形見といひ折柄といひ、名もなつかしき櫻川に、地謡「散り浮く花の雪を汲みて、自ら花衣の、春の形見残さん。上歌花鳥の立ち別れつゝ親と子の、立ち別れつゝ親と子の、行くへも知らで天さかる、鄙の長路に衰へば、たとひ逢ふとも親と子の、面忘れせば如何ならん。うたてや暫こそ、冬ごもりして見えすとも、今は春べなるものを、我子の花はなど咲かぬ。我子の花はなど咲かぬ。ワヤ調「此物狂の事にて有りけに候。立ち寄りて尋ねばやと思ひ候。いかに是なる狂女、御事の國里は何くの人ぞ。レテ調「是は遙かの筑紫の者にて候。ツヤ調「それは何とてかやうに

縁子一幼兒

遠きに付きて一遠國のことを云ふ
常よりも云々一後撰集に出づ
霞うながす一霞を渡す意

狂亂とはなりたるぞ。レテ調「さん候只一人ある忘形見の、縁子に生きて離れて候程に、思ひが亂れて候。ワヤ調「あら痛はしや候。又見申せば美しき掬ひ網を持ち、流るよ花をすくひ、あまつさへ湯仰の氣色見え給ひて候は、何と申したる事にて候ぞ。レテ調「さん候我故郷の御神をば、木華開耶姫と申して、御神體は櫻木にて御入り候。されば別れし我子も其御氏子なれば、櫻子と名づけ育てしかば、神の御名も開耶姫、尋ぬる子の名も櫻子にて、又此川も櫻川の、名もなつかしき花のちりを、あだにもせじと思ふなり。ワヤ調「謂れを聞けば面白や。實に何事も縁は有りけり。さばかり遠き筑紫より、此東路の櫻川まで、下り給ふも縁よなう。レテ調「先此川の名におふ事、遠きに付きての名譽あり。彼貴之が歌はいかに。ワヤ調「實にく昔の貫之も、遙けき花の都より、レテ調「いまだ見もせぬ常陸國に、ワヤ調「名も櫻川、レテ調「有りと聞きて、上歌地調「常よりも、春べになれば櫻川、春べになれば櫻川、波の花こそ、間なく寄すらめとよみたれば、花の雪も貫之も、ふるき名のみ残る世の、櫻川、瀬々の白波しければ、霞うながす信太の浮島の、浮か

花の水層一落花の多きを水に響ふ
花の下に云々一白氏文集に花下忘因美景一忘れ水一野中に見え隠れする流れ
岸花紅照水詞
贈縁合風一杜子美の詩
山花開似錦水
活如藍一碧巖に出づ

め浮かめ水の花。けにおもしろき河瀬かな。けに面白き河瀬かな。
ワヤ調「いかに申し候。此物狂は面白う狂ふと仰せ候が、今日は何とて狂ひ候はぬぞ。
ワヤ調「さん候狂はする様が候。櫻川に花の散ると申し候へば狂ひ候程に、狂はせて御目にかけうするにて候。ワヤ調「急いで、御狂はせ候へ。ワヤ調「心得申し候。あら笑止や、俄に山嵐のして櫻川の花の散り候よ。レテ調「よしなき事を夕山嵐の、奥なる花を誘ふごさめれ。流れぬさきに花すくはん。ワヤ調「實にく見れば山おろしの、木々の梢に吹き落ちて、レテ調「花の水層は白妙の、ワヤ調「波かと思れば上より散る。レテ調「櫻か、ワヤ調「波か、ワヤ調「花かと、レテ調「浮き立つ雲の、ワヤ調「河風に、地調「散ればぞ波も櫻川、散ればぞ波も櫻川、流るよ花をすくはん。レテ調「花の下に歸らん事を忘れ水の、地調「雪を受けたる花の袖。
レテ調「それ水流花落ちて春とこしなへにあり。地調「月冷しく風高うして鶴かへらす。
レテ、ヤシ調「岸花紅に水を照らし、洞樹縁に風を含む。地調「山花開けて錦に似たり、瀧水

年を経て云々
古今集の歌

散りぬれば後は
芥に同集の歌
下句思ひ知らず
も迷ふ織かな
百千鳥花に馴れ
ゆく古今六帖
の歌末句後まれ
ぬる
常陸帯云々新
古今集に「東路
の道の果なる常
陸帯のかごとと
かりもあはんと
ぞ思ふかごと
ばかりは言分け
程の意
あたら櫻の
西行櫻にあり

たよへて藍の如し。面白や思はずこよに浮れ来て、名もなつかしき櫻川の、一
樹の陰一河の流、汲みて知る名も所から、合ひに合ひなば櫻子の、是又他生の縁なるべ
し。實にや年を経て、花の鏡となる水は、散りかよるをや曇るといふらん。まこと散
りぬれば、後は芥になる花と、思ひ知る身もさていかに。我も夢なるを、花のみと見る
ぞはかなき。されば梢より、あだに散りぬる花なれば、落ちて水のおはれとは、いさ
白波の花にのみ、馴れしも今は先立たぬ、悔の八千度百千鳥、花の馴れ行くあだし身は、
はかなき程に羨まれて、霞を憐れみ、露を悲しめる心なり。さるにても、名にのみ聞
きて遙々と。思ひ渡りし櫻川の、波かけて常陸帯の、かごとばかりに散る花を、あだ
になさじと水をせき、雪をたよへて浮波の、花の柵かけまくも、かたじけなしや是と
ても、木華開耶娘の、御神木の花なれば、風もよぎて吹き、水も影を濁すなど、袂を浸
し裳裙を萎らかして、花によるべの水せきとめて、櫻川になさうよ。あたら櫻の、
散ればぞ誘ふ、

國栖魚一吉野川
にてとる小鮎
櫻魚一小鮎

へばぞ散る花かづら、掛けてのみながめしは、なほ青柳の糸櫻、霞の間に
は、樺櫻、雲と見しは、みよし野の、みよし野の、川
淀瀧つ波の、花をすくはど若し、國栖魚やかよらまし、又は櫻魚と、聞くもなつかしや。
いづれも白妙の、花も櫻も、雪も波もみながらに、すくひ集め持たれども、是は木々
の花、誠は我尋ぬる、櫻子ぞ戀しき。我櫻子ぞこひしき。
いかにやいかに狂人の、言の葉聞けば不思議やな。若しも筑紫の人やらん。
今までは、誰ともいさや知らぬ火の、筑紫人かと宣ふは、何の御爲に問ひ給ふ。
何をか今は包むべき、親子の契朽ちもせぬ、花櫻子ぞ御覽ぜよ。櫻子と、櫻子
と、聞けば夢かとも見も分かず、いづれ我子なるらん。三年の日數程ふりて、別れも
遠き親と子の、姿は變れども、さすが見馴れし面だてを、よく見れば、
櫻子の花の顔ばせの、こは子なりけり、鶯の、逢ふ時も鳴く音こそ、嬉し
き涙なりけれ。

機變へて一割髪
すること

キリ地盤かくて作ひ立ち歸り、かくて作ひ立ち歸り、母をも助け様變へて、佛果の縁となりけり。二世安樂の縁深き、親子の道ぞありがたき。親子の道ぞありがたき。

山姥

梗

此曲は旅人の山中に行暮れて、山姥に遭へりといふ俗説にて、山姥の山廻りを輪廻轉生の佛説して觀じたる趣を加味して作る。頗る幽玄の作なり。もと百鬼山姥の曲舞といふものに行はれたるに基けるが如し。(四番目)

シテ 鬼女山姥 ツレ 遊女山姥 ワキ 從者

善き光ぞと善
光寺の名を示す

曲舞一能より前
に行はれし舞の
名

有乳の山一近江
越前の國境
玉江の橋一越前

ワキ次第善き光ぞと影たのむ、善き光ぞと影たのむ、佛の御寺尋ねん。是は都方に住居仕る者にて候。又是に渡り候御事は、百魔山姥とて隠れなき遊女にて御座候。かやうに御名を申す謂れば、山姥の山廻りするといふ事を、曲舞に作つて、御詣ひあるにより、京童部の申しならはして候。又此頃は善光寺へ御参りありたき山承り候程に、某御供申し、只今信濃國善光寺へと急ぎ候。ヤン誦都を出でて小波や、志賀の浦船こがれ行く、末は有乳の山越えて、袖に露散る玉江の橋、かけて末ある越路の旅、思ひやるこ

安宅—加賀

砥並山—加賀越中の國境

そ遙なれ。上歌 梢波立つ汐越の、梢波立つ汐越の、安宅の松の夕煙、消えぬ憂き身の罪を切る、彌陀の劔の砥並山、雲路うながす三越路の、國の末なる里問へば、いとよ都は遠ざかる、境川にも著きにけり。境川にも著きにけり。

あけろの山—境川の奥

ワヤ調「御急ぎ候ほどに、是ははや越後越中の境川に御著きにて候。暫く是に御座候ひて、猶々道の様體をも御尋ねあらうするにて候。狂言「シカ／＼ッレ調」けにや常に承る、西力の淨土は十萬億土とかや。是は又彌陀來迎の直路なれば、あけろの山とやらんに参り候べし。謡とても修行の旅なれば、乗物をば是にとどめ置き、徒歩跣足にて参り候べし。道しるべして給ひ候へ。ワヤ調「あら不思議や 暮れまじき日にて候が俄に暮れて候よ。さて何と仕り候べき。

シラ謡「なう／＼旅人御宿参らせうなう。調 是はあけろの山とて人里遠き所なり。日の暮れて候へば、わらはが宿にて一夜を明させ給ひ候へ。ワヤ調「あら嬉しや 候。俄に日の暮れ前後を忘れて候。やがて参らうするにて候。シラ謡「今宵の御宿参らす事、取り分き思ふ仔

次第—文句の名目

佛事—國經音樂の類 輪廻—苦界を廻ること

細あり。調 山姥の歌の一節うたひて聞かさせ給へ。年月の望なり鄙の思出と思ふべし。謡そのためにこそ日を暮らし、御宿をも参らせて候へ いかさまにも謡はせ給ひ候へ。ワヤ調「是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。さて誰と見申されて、山姥の歌の一節とは御所望候ぞ。シテ調「いや何をか包み給ふらん。あれにまします御事は、百魔山姥とて隠れなき遊女にてはましますや。まづ此歌の次第とやらんに、謡よし足引の山姥が、山廻りするると作られたり。あら面白や 候。調 是は曲舞に依りての異名、さて誠の山姥をば、如何なる物とが知ろしめされて候ぞ。ワヤ調「山姥とは山に住む鬼女とこそ曲舞にも見えて候へ。シラ謡「鬼女とは女の鬼とや。よし鬼なりとも人なりとも、山に住む女ならば、妾が身の上にてはさむらはすや。謡 年頃色には出ださせ給ふ。言の葉草の露ほども、御心には掛け給はぬ、調 恨申しに來りたり。謡 道を極め名を立てよ、世情萬徳の妙花を開く事、此一曲の故ならずや。然らば妾が身をも弔ひ、舞歌音樂の妙音の、聲佛事をもなし給はば、なごか妾も輪廻をのがれ、歸性の善所に至らざらんと、恨を夕山の 鳥獸も鳴きそへ

時の調子一時節
相應の調子
しばさせ給へ
響く待ち給へ

て聲をあけるの山姥が、靈鬼是まで來りたり

ツレ謡「不思議の事を聞くものかよ。さては眞の山姥の、是まで來り給へるか。レテ謡「我國々の山廻り、今日しもこよに來る事は、我名の徳を聞かん爲なり。詠ひ給ひてさりとては、我が妄執を晴らし給へ。ツレ謡「この上はとかく辭しなば恐ろしや。もし身のためや悪かりなんと、憚ながら時の調子を、取るや拍子をすよむれば、レテ謡「しばさせ給へとてもさば、暮るよを待ちて月の夜聲に、詠ひ給はど我も又、眞の姿をあらはすべし。謡すはやかけるふ夕月の、上歌さなきだに、暮るよを急ぐ深山邊の、地謡「暮るよを急ぐ深山邊の、雲に心をかけ添へて、此山姥が一節を、夜すがら詠ひ給はど、其時わが姿をも、あらはし衣の袖つぎて、移舞を舞ふべしと、いふかと思れば、其まよかき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。(中入)

ツレ謡「あまりの事の不しぎさに、さらに眞と思ほえぬ、鬼女が詞を違へじと、ワヤ上歌謡「松風ともに吹く笛の、松風ともに吹く笛の、聲すみわたる谷川に、手まづさへぎる曲水

の、月に聲すむ深山かな。月に聲すむ深山かな。

後レテ謡「あら物凄の深谷やな、あら物凄の深谷やな。寒林に骨を打つ、靈鬼泣くく前生の業を恨む、深野に花を供する天人、かへすくも歸性の善を悦ぶ。いや、善惡不二、何をか恨み何をか悦ばんや。萬箇目前の境界、懸河渺々として、巖峨々たり。山復山、いづれの工が青巖の形を削りなせる、水また水、誰が家にか碧潭の色を染め出だせる。

ツレ謡「恐ろしや月も木深き山陰より、其さま化したる顔ばせは、其山姥にてましますか、レテ謡「とてもはや穂に出でそめし言の葉の、氣色にも知らしめさるべし。我にな恐れ給ひそとよ。ツレ謡「此上は恐ろしながらむば玉の、闇まぎれより現れ出づる、姿詞は人なれども、レテ謡「髪にはおどろの雪を戴き、ツレ謡「眼の光は星の如し。レテ謡「さて面の色は、ツレ謡「沙丹塗の、レテ謡「軒の瓦の鬼の形を、ツレ謡「今宵始て見ることを、レテ謡「何にたとはん、ツレ謡「古への、上歌地謡「鬼一口の雨の夜に、鬼一口の雨の夜に、神鳴さわぎ恐ろしき、其夜を思ひ白玉か、何ぞと問ひし人までも、我身の上になりぬべき、浮世語も恥かしや、

寒林云々一梵語にては口多邊那といひ死人を葬る所、こゝは前世の罪業ある死人自ら屍に轉りて又前生惡業をりし死人自ら屍を供養すと云ふ佛説の意
山復山何工削成青巖之形水復水誰家塗出巖之色一朗詠集の文句

鬼一口一伊勢物語の芥川にて女の鬼にとられし故事
何はのこと一羅漢と受けて何かの事か

浮世語も恥かしや。

シテ「春の夜の一時を千金に換へじとは、花に清香月に陰、是は願のたまさかに、行き逢ふ人の一曲の、其ほどもあたら夜に、はやく、謠ひ給ふべし。ツレ謠」けに此上はともかくも、いふに及ばぬ山中に、シテ「一聲の山鳥羽をたよく、ツレ謠」鼓は瀧波、シテ「袖は白妙、ツレ謠」雪を廻らす木の花の、シテ「何はのことが、ツレ謠」法ならぬ。上歌地謠」よし足引の山姥が、よし足引の山姥が、山廻りするぞ苦しき。

シテ、クリ謠「夫れ山と謂つば、塵土より起つて、天雲かよる千丈の峯、地謠」海は昔の露より滴りて、波濤を疊む萬水たり。シテ、サシ謠「一洞空しき谷の聲、梢に響く山彦の、地謠」無聲音を聞きたよりとなり、聲に響かぬ谷もがなと、望みしもけに此くやらん。シテ「ことに我が住む山家の景色、山高うして海近く、谷深うして水遠し。地謠」前には海水浪々として、月真如の光をかよけ、後には嶺松巍々として、風常樂の夢を破る。シテ「刑鞭蒲朽ちて、螢むなしく去る、地謠」諫鼓苦深うして、鳥驚かずとも云ひつべし。クセ遠近のたづきも

源水満々云々
長門本平家物語
の文を引く
刑鞭云々一朗詠
集を引く

金輪際一地の底

一念化生一
念の向方にて鬼
女、も衆生とも
佛ともなる
色即是空一有即
ち無の意
煩惱一迷ひ
菩提一悟り

しでうつ一繁く
掃つ

知らぬ山中に、おほつかなくも呼子鳥の、聲凄き折々に、伐木丁々として、山更に幽なり、法性峯聳えては、上求菩提を現し、無明谷深き粧ひは、下化衆生を表して、金輪際に及べり。そもく山姥は、生所も知らず宿もなし。たゞ雲水を便にて、いたらぬ山の奥もなし、シテ「然れば人間にあらずとて、地謠」隔つる雲の身をかへ、假に自性を變化して、一念化生の鬼女となつて、目前に來れども、邪正一如と見る時は、色即是空其まに、佛法あれば世法あり、煩惱あれば菩提あり、佛あれば衆生あり、衆生あれば、山姥もあり、柳は緑、花は紅の色々。さて人間に遊ぶ事、ある時は山賤の、樵路に通ふ花の陰、やすむ重荷に肩を貸し、月もろともに山を出で、里まで送るをりもあり、又ある時は織姫の、五百機立つる窓に入つて、枝の鶯糸くり、紡績の宿に身を置き、人を助くるわざをのみ、賤の目に見えぬ、鬼とや人のいふらん。シテ「世を空蟬の唐衣、地謠」拂はぬ袖に置く霜は、夜寒の月に埋もれ、打ちすさむ人の絶間にも、千聲萬聲の、砧に聲のしでうつは、たゞ山姥がわざなれや。都に歸りて、世語にせさせ給へと、思ふは猶も

讀佛乘一經又を
稱讚すること

妄執か。唯うち捨てよ何事も、よしあし引の山姥が、山廻りするぞ苦しき。
レテ謡「あしびきの、地謡「山めぐり、レテ謡「一樹の陰一河の流、みなこれ他生の縁ぞかし。
ましてや我名を夕月の、浮世をめぐる一節も、狂言綺語の道すぐに、讀佛乘の因ぞかし。
あら御名残惜しや、暇申して歸る山の、地謡「春は梢に咲くかと待ちし、レテ謡「花を尋ねて
山めぐり、地謡「秋はさやけき影を尋ねて、レテ謡「月見る方にと山めぐり、地謡「冬はさえ行
く時雨の雲の、レテ謡「雪を誘ひて山廻り、地謡「廻り廻りて、輪廻を離れぬ、妄執の雲の、塵
つもつて山姥となれる、鬼女が有様見るや見るやと、峯に翔り谷に響きて、今迄ことに
あるよと見えしが、山又山に山廻り、山又山に山廻りして、行方も知らずなりにけり。

内十六

氷室

梗 氷室の故事を述べ、氷の物の御調を供ふることを語り、御代
を壽ぐを主とす。氷室の神及び天女の出現する事を作る。
(脇能)

シテ 氷室の神(前は翁) ツレ 天女(前は男)
ワキ 臣下

九世の戸一智音
寺文殊菩薩を記
津田の入江一青
羽後瀬皆近江國
縁にかへる一夫
木抄の歌に「今
朝よりは雪の
雲のあとをば
縁にかへる春の
初空

三人次第「八洲も同じ大君の、八洲も同じ大君の、御影の春ぞ長閑けき、ワキ「そもく、是
は龜山の院に仕へ奉る臣下なり。我此度丹後國九世の戸にまゐり、既に下向道なれば、
是より若狭路にかより、津田の入江青羽後瀬の、山々をも一見し、それより都に歸らば
やと存じ候。三人ワキ「道行遙、花の名の、白玉椿八千代經て、白玉椿八千代經て、縁にかへる空
なれや、春の後瀬の山續く、青葉の木陰分け過ぎて、雲路の末の程もなく、都に近き丹

氷室—氷をかこひ置く所

波路や、氷室山にも著きにけり、氷室山にも著きにけり。ワキ詞「急ぎ候程に、丹波國氷室山に著きて候。此所の人を待ち、氷室の謂れをも委く尋ねばやと存じ候。

一花開天下春—大集經の文句

レテ、ツ謠「氷室守、春も末なる山陰や、花の雪をも集むらん。ツレ謠「深谷に立てる松陰や、レテツレ謠「冬の氣色を残すらん。シテ、サン謠「夫れ一花開けぬれば天下は皆春なれども、松は常磐の色添へて、レテ、ツレ謠「緑に續く氷室山の、谷風はまだ音さえて、氷に残る水音の、雨も靜に雪落ちて、實に豊年を見する御代の、御調の道も直なるべし。下歌「國土豊に榮ゆくや、千年

霜の翁—白髪を霜に喩ふ

の山も近かりき。上歌變らぬや、氷室の山の深緑、氷室の山の深緑、春の氣色は有りながら、此谷陰は去年のまよ、深冬の雪を集め置き、霜の翁の年々に、氷室の御調守るなり。氷室の御調守なり。

氷の物の供御—雪の御調に同じ四月より九月迄國々の氷室より歌す

ワキ詞「如何に是なる老人に尋ねべき事の候。レテ詞「此方の事にて候か何事を御尋ね候ぞ。ワキ詞「御事はこの氷室守にて有るか。レテ詞「さん候氷室守にて候。ワキ詞「さても年々に捧ぐる氷の物の供御、拜みは奉れども在所を見る事は、今始めなり。さてく、如何なる構

松が崎—山城これ氷室の一つ

により、春夏まで氷の消えざる謂れ委く申し候へ。レテ詞「昔御狩の荒野に、一むらの森の下庵ありしに、頃は水無月半なるに、寒風御衣の袂に移りて、さながら冬野の御幸の如し。怪みたまひ御覽すれば、一人の老翁雪氷を屋の内にたよへたり。彼翁申すやう、夫れ仙家には紫雪紅雪とて藥の雪あり、翁もかくの如しとて、氷を供御に供へしより、氷の物の供御始まりて候。ワキ謠「謂れを聞けば面白や。さてく、氷室の在所々々、上代よりも國々に、あまた替はりて有りしよなう。レテ詞「先は仁徳天皇の御宇に、大和の國鬮鷄の氷室より、供へ初めにし氷の物なり。ツレ謠「又其後は山陰の、雪も霰もさえ續く、便の風を松が崎、レテ詞「北山陰も氷室なりしを、ツレ謠「又此國に所を移して、深谷もさえけく谷風寒氣も、レテ謠「便ありとて今までも、シテ、ツレ謠「末代長久の氷の供御のため、丹波國桑田郡に、氷室を定め申すなり。ワキ謠「實にく、翁の申す如く、山も所も木深き蔭の、日影もさよぬ深谷なれば、春夏までも雪氷の、消えぬも又は、理なり。レテ詞「いや所によりて氷の消えぬと承るは、君の威光も無きに似たり。ワキ謠「只世の常の雪氷は、レテ詞「一夜の間にも

袖ひぢて云々
古今集

年越ゆれば、ワキ春立つ風には消ゆるものを、シテ誦されば歌にも、ワキ貫之が
上歌地誦「袖ひぢて、むすびし水の凍れるを、むすびし水の凍れるを、春立つ今日の、風や
解くらんと詠みたれば、夜の間に来る春にだに、氷は消ゆる習ひなり。ましてや春過ぎ
夏たけて、早水無月になるまでも、消えぬ雪の薄氷、供御の力にあらでは、如何でか残
る雪ならん。いかでか残る雪ならん。

皇圖—皇國のこ
夏の日に云々—
後拾遺集の歌

クリ地誦「夫れ天地人の三才にも、君を以て主とし、山海萬物の出生、即ち王地の恩徳なり。
シテ、サシ皇圖長く堅く、帝道遙に盛なり。地誦「佛日光ますくにして、法輪常に轉ぜり
シテ誦「陽徳折を違へずして、地誦「雨露霜雪の時を得たり。夏の日、なるまで消えぬ冬
氷、春立つ風やよぎて吹くらん。實に妙なれや、萬物時に有りながら、君の惠の色添へ
て、都の外の北山に、つぐや葉山の枝茂み、此面彼面の下水に、集むる雪の氷室山、土
も木も大君の、御陰にいかで洩るべき。實に我ながら身の業の、浮世の數に有りながら、
御調にも取り別きて、猶天照らす氷の物や、他にも異なる捧げ物、叡感以て甚しき、玉

初春の—萬葉集
の歌末句ゆらぐ
玉の緒
雪のしづり—木
よりなだれ落つ
る雪

體を拜するも、深雪を運ぶ故とかや。シテ誦「然れば年立つ初春の、地誦「初子の今日の玉
箒、手に取るからにゆらぐ玉の、翁さびたる山陰の、去年のまよにて降り續く、雪のし
づりをかき集めて、木の下水にかき入れて、氷を重ね雪を積み、待ち居れば春過ぎて、
はや夏山になりぬれば、いとど氷室の構して、立ち去る事も夏陰の、水にも住める氷室
守、夏衣なれども、袖さゆる氣色なりけり。

ロンキ地誦「實に妙なりや氷の物の、實に妙なりや氷の物の、御調の道も直にある都にいざ
や歸らん。シテ誦「暫く待たせ給ふべし。とても山路の御序に、今宵の氷の御調、供ふる
祭御覽ぜよ。地誦「そもや氷調の祭とは、如何なる事にあるやらん。シテ誦「人こそ知らね此
山の、山神木神の、氷室を守護し奉り、毎夜に神事有るなりと、地誦「言ひもあへねば山
くれて、寒風松聲に聲立て、時ならぬ雪は降り落ち、山河草木おしなめて、氷を敷きて
瑠璃壇に、なると思へば氷室守の、薄氷を踏むと見えて、室の内に入りけり、氷室の
内に入りけり。(中人)

古鳥蘇一樂名

地謡「樂に引かれて古鳥蘇の、舞の袖こそゆるぐなれ。(天舞女)天女謡「變らぬや、氷室の山の深緑、地謡「雪を廻らす舞の袖かな。

後シテ謡「曇無き、御世の光も天照らす、氷室の御調供ふなり。地謡「供へよや供へよや、さも潔き水底の砂、シテ謡「長じては又巖の陰より、地謡「山河も震動し天地も動きて、寒風頻に肝をつとめて、紅蓮大紅蓮の、氷を戴く氷室の神體、さえ燿きてぞ現れたる。

シテ謡「谷風水邊冴え凍りて、地謡「谷風水邊冴え凍りて、シテ謡「月も燿く氷の面、地謡「萬境を映す鏡の如く、シテ謡「晴嵐梢を吹き拂つて、地謡「陰も木深き谷の戸に、シテ謡「雪はしづき、地謡「霰は横ぎりて、岩もる水もさざれ石の、深井の氷に閉ぢ付けらるゝを、引き放し引き放し、浮み出でたる氷室の神風。あら寒や冷やかや。シテ謡「畏き君の御調なれや、

地謡「畏き君の御調なれや。波を收むるも氷、水を靜むるも氷の、日に添へ月に行き、年を待ちたる氷の物の供へ、供へ給へや、供へ給へと采女の舞の、雪を廻らす小忌衣の、袂に添へて薄氷を、碎くな碎くな、解かすな解かすなと氷室の神は、氷を守護し日影を

采女の舞一采女は主上の御陪膳に仕ふれば云ふ

隔て、寒水をそよぎ清風を吹かして、花の都へ雪を分け、雲を凌ぎて北山の、すはや都も見えたり、すはや都も見えたり。急げや急げ氷の物を、供ふる所も愛宕の郡、捧ぐる供御も日の本の君に、御調物こそめでたけれ。

善界

梗 唐土の天狗の首領善界坊我が國に渡りて佛法の妨害を試みんとせしに、佛力神力の偉大なるに辟易して立去る事を作る。今昔物語の話に基くものなるべし。然らば僧は餘慶法師なり。(五番目)

シテ 善界坊 ツレ 太郎坊 ワキ 比叡山の僧

善界坊—今昔物語には智願永壽とあり
育王山—東渡府青龍寺—天台山
般若臺—蘆山
粟散遍地—小國の意

シテ次第通「雲路を凌ぐ旅の空、雲路を凌ぐ旅の空、出づる日の本を尋ねん。詞是は大唐の天狗の首領善界坊にて候。扱も我國に於て、育王山青龍寺、般若臺に至るまで、少しも慢心の輩をば、皆我道に誘引せずと云ふ事なし。眞や日本は粟散遍地の小國なれども神國として、佛法今に盛んなる由承り及び候間、急ぎ日本に渡り、佛法をも妨げばやと存じ候。道行話 名にし負ふ、豐蘆原の國津神、豐蘆原の國津神、青海原にさし下ろす、天の瓊矛の露なれや 秋津洲根の朝ほらけ、其方もしるく浮む日の、神の御國は是かと

よ、神の御國は是かとよ、詞 急ぎ候程に、是ははや日本の地に著きて候。先承り及びたる愛宕山に立ち越え、太郎坊に案内を申さばやと存じ候。是は早愛宕山にて有りけに候。山の姿、木の木立、是こそ我等が住むべき所にて候へ。如何に案内申し候。ツレ誰にて渡り候ぞ。シテ詞「是は大唐の天狗の首領善界坊にて候が、御目に懸り申し談すべき仔細の候ひて、是まで遙々参りて候。ツレ詞「さては承り及びたる善界坊にて渡り候か。先某が庵室へ御入り候へ。さて只今は何のために御出でにて候ぞ。シテ詞「さん候 只今参る事餘の儀にあらす。我國に於て、育王山青龍寺、般若臺に至るまで、少しも慢心の輩をば、皆我道に誘引せずと云ふ事なし。眞や日本は、小國なれども神國として、佛法今に盛なる由承り候間、少し心に懸り、遙々是まで参りて候。同じくは御心を一つにして、自他の本意を達し給へ。ツレ詞「さてはやさしくも思召し立ち候ものかな。夫れ我國は天地開闢より此方、先以て神國たり。されば佛法今に盛なり。先々間近き比叡山、あれこそ日本の天台山候よ。諸心のまよに窺ひ給へ。シテ通「さてはいよく便あり。夫れ天

顯密一顯教は天台宗密宗は眞言宗
蟪蛄が斧一弱者が強者に手向ひて身を滅す譬
猿猴が月一水中の月を捉へんとて溺る愚痴の譬
大聖一不動明王火生三昧一火中に身を入れて世を照し又惡魔を燒盡すこと
但住衆生云々一不動經の文
魔境一天物界

台の佛法は、權實二教に分ち、ツレ誦又密宗の奧義を傳へ、レテ誦顯密兼學の所なるを、
ツレ誦「我等如きの類として、レテ誦たやすく窺ひ、ツレ誦給はん事、地誦蟪蛄が斧とかや、
猿猴が月に相同じ。かくは知れどもさすが猶、我慢増上慢心の、便を得んと思ふにも、
大聖の威力を、いよく案じ連ねたり。

クリ地誦「夫れ明王の誓約、まぢくなりと云へども、其利益餘尊に越え、正しく火生三昧
に入り給ひて、一切の魔軍を焚燒せり。レテ、サレ誦外には忿怒の相を現すといへども、
地誦「内心慈悲の御惠、凝念不動の理を顯し、但住衆生心想之中、實に有難き悲願かな
クセ然りとはいへども、輪廻の道を去りやらで、魔境に沈む其歎き、思ひ知らずや我な
ら、過去遠々の間に、さすが見佛聞法の、其結縁の功により、三惡道を出でながら、猶
も鬼畜の身を借りて、いとど佛敵、法敵となれる悲しさよ。今此事を歎かすは、未來永
永を経るとても、いつか般若の智水を得て、火生三昧の、焔を遁れ果つべき。レテ誦「世の
中は夢か現か現とも、地誦「夢ともいさや白雲の、かよる迷ひを翻し、歸服せんとは思

高雄山一神護寺

勅を受け一内裏の御修法のため
に下山すること
我立つ袖一比叡
山のこと

はずして、いよく我慢の幢の、靡きもやらで徒に、行者の床を窺ひて、降魔の利
劍を、待つこそはかなかりけれ。
ツレ誦「かくては時刻移りなん。いざ諸共に立ち出でて、比叡の山邊の案内せん。レテ誦「法
の爲、今ぞ愛宕の山の名に、頼みを懸けて思ひ立つ、雲の棧うち渡り、地誦「我名やよ
そに高雄山、東を見れば大比叡や、レテ誦「横川の杉の梢より、地誦「南に續く如意が嶽鷲
の御山の雲や霞も、嵐と共に失せにけり。嵐と共に失せにけり。(中入)
ワキ一雙誦「勅を受け、我立つ袖を出でながら、急ぐも同じ名に高き、大内山の道ならん。か
くてやうく大比叡を、下りつと行けば不思議やな、あれに見えたる下り松の、上叡地誦「梢
の嵐吹きしをり、梢の嵐吹きしをり、雲となり雨となる、山河草木震動し、天に輝く電
光、大地に響く雷は、肝魂を暗まかす、こはそも何の故やらん、こはそも何の故や
らん。

後レテ誦「そもく是は、大唐の天狗の首領、善界坊とは我事なり。調あら物々しや如何に御

聽我説者云々、不動に惡魔降伏を祈る文句

山王權現一日吉神社

男山一八幡宮 北野一八幡宮

坊 今更何の觀念をかなせる。それ若作障礙、即有一佛魔境と説けり。あら痛はしや、欲界の内に生るゝ輩は、地誦「悟の道や其まよに、魔道の巷となりぬらん。

上歌地誦「不思議や雲の内よりも、不思議や雲の内よりも、邪法を唱ふる聲すなり。本より魔佛一如にして、凡聖不二なり。自性清淨天然動きなき、是を不動と名づけたり。

ワヤ詞「聽我説者得大智恵、咩多羅吒干滿。

地誦「その時御聲の下よりも、その時御聲の下よりも、明王現れ出で給へば、矜迦羅制多迦十二天、各降魔の力を合はせて、御先を拂つておはします。レテ誦「明王諸天はさて置

きぬ、地誦「明王諸天はさて置きぬ、東風吹く風に東を見れば、レテ誦「山王權現、地誦「南に男山、西に松の尾、北野や賀茂の、山風神風吹き拂へば、さしもに飛行の翅も地に落ち、

力も楯弓の八洲の波の、立ち去ると見えしが又飛び來り、さるにても、かほどに妙なる佛力神力、今より後は來るまじと、云ふ聲ばかりは虚空に残り、言ふ聲ばかり 虚空に残つて、姿は雲路に入りにつけり。

芭蕉

梗 これは支那の事として作る。芭蕉の精、女人として現れ、僧の巾を受く。これ法華經の功德なりと説けり。(三番目)

シテ 芭蕉の精(前は女) ワキ 僧

法華持經一法華經を持ちて信心すること

風射被窓燈易、月穿疎屋露、離成一百聯抄解の詩

ワヤ詞「是は唐土楚國の傍、小水と申す所に山居する僧にて候。さても我法華持經の身なれば、日夜朝暮彼御經を讀み奉り候。殊更今は秋も半、月の夜すがら怠る事なし。こよに不思議なる事の候。此山中に我ならで、又住む者もなく候ふに、夜なく讀經の折節、菴室のあたりに人のおとなひ聞え候。今夜も來りて候はど、如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。サレ誦「既に夕陽西に遷り、山峽の陰冷ましくして、鳥の聲幽に物凄き、上歌夕べの空もほのくくと、夕べの空もほのくくと、月になり行く山陰の、寂寞とある柴の戸に、此御經を讀誦する。此御經を讀誦する。

レテ次第誦「芭蕉に落ちて松の聲、芭蕉に落ちて松の聲、あだにや風の破るらん。サレ風破窓を

衣の珠—法華經
にある佛説寶珠
を衣の裡にかけ
ても酔臥しては
愛らず不信者は
如何ともし難し
との意

射て燈消え易く、月疎屋を穿ちて夢なり難き、秋の夜すがら所から、物冷ましき山陰
に、住むとも誰か白露の、古り行く末ぞ哀なる。下歌あはれ馴るよも山賤の、友こそ岩木
なりけれ。上歌見ぬ色の、ふかきや法の花ごころ、ふかきや法の花ごころ、染めずはいか
が徒に、其唐衣の錦にも、衣の珠はよも掛けじ。草の袂も露涙、移るも過ぐる年月は、
廻り廻れどうたかたの、哀れ昔の秋もなし。哀れ昔の秋もなし。

ワヤ調「さて我讀誦の聲息らず、夢現とも分かざるに、女人の月に見え給ふは、如何なる
人にてましますぞ。シテ調「是は此あたりに住む者なるが、さも逢ひ難き御法を得、花を捧
け禮をなし、結縁をなすばかりなり。誦とても姿を見え参らすれば、何をか今は憚りの、
言の葉草の菴の内を、露の間なりと法の爲に、結縁に貸させ給へとよ。ワヤ調「實にく法
の結縁は、誠に妙なる御事なれどもさりながら、なべてならざる女人の御身に、誦いか
で御宿を参らすべき。シテ調「其御心得はさる事なれども、よそ人ならず我もまた、誦住家
はことぞ小水の、ワヤ調「同じ流を汲むとだに、知らぬ他生の縁による、シテ誦「一樹の陰の、

神傷山行深愁
破産寺古一杜
子美の詩句
關省花時錦帳下
廬山兩夜草庵中
—白氏文集

藥草喻品—法華
經の卷の名

思ひの家—思ひ
に火を言掛く

ワヤ調「菴の内は、上歌地誦「惜しまじな、月も假寢の露の宿、月も假寢の露の宿、軒も垣ほも
古寺の、愁ひは崖寺の經るに破れ、魂は山行の深きに傷ましむ。月の影も冷ましや。誰
かいひし關省の花の時、錦帳の下とは。廬山の雨の夜、草菴の内ぞ思はるよ。
ワヤ調「餘りに御志深ければ、御經讀誦の程内へ御入り候へ。シテ調「さらば内へ参り候べ
し。あら有難や此御經を聽聞申せば、我等如きの女人、非情草木の類迄も頼もしうこそ
候へ。ワヤ調「實によく御聽聞候ものかな。只一念隨喜の信心なれば、一切の非情草木の類
までも、何の疑ひの候へべき。シテ調「さては殊更有難や。さてく草木成佛の、誦謂を猶も
示し給へ。ワヤ調「藥草喻品顯れて、草木國土有情非情も、皆是諸法實相の、シテ誦「峯の嵐
や、ワヤ調「谷の水音、ワヤ調「佛事をなすや寺井の底の、心も澄める折からに、上歌地誦「燈火
を、背けて向ふ月の下、背けて向ふ月の下、共に憐む深き夜の、心を知るも法の人の、教
へのまよなる心こそ、思ひの家ながら、火宅を出づる道なれや。されば柳は緑、花は紅
と知る事も、唯其まよの色香の、草木も成佛の國土ぞ、成佛の國土なるべし。

雪の中の芭蕉
王摩詰雪中の芭蕉を畫けりといふ故事雪中に芭蕉はあまじけれは鶴の序詞とせり

優曇華一佛説に三千年に一度花咲くといふ事の稀なる譬にいふ

ロンギ地謡「不思議やさても愚かなる、女人と見るにかくばかり、法の理白糸の、解くばかりなる心かな。シテ謡「なかくに、何疑ひか有明の、末の闇路をはるけずは、今逢ひ難き法を得る。身とはいかど思はん。地謡「實に遇ひ難き法に遇ひ、受け難き身の人界を、シテ謡「受くる身ごとやおほすらん。地謡「恥かしや歸るさの、道さやかに照る月の、影はさながら庭の面の、雪の中の芭蕉の、偽れる姿の、眞を見えば如何ならんと、思へば鐘の聲、諸行無常となりけり。諸行無常となりけり。
ワキ調「さては雪の中の芭蕉の、偽れる姿と聞えしは、疑もなき芭蕉の女と、現れけるこそ不思議なれ。上歌謡「只是法の奇特ごと、只是法の奇特ごと、思へばいと夜もすがら、月も妙なる法の場、風の芭蕉や傳ふらん。風の芭蕉や傳ふらん。
後シテ「あら物すこの庭の面やな。あら物すこの庭の面やな。有難や妙なる法の教へには、逢ふ事稀なる優曇華の、花待ち得たる芭蕉葉の、御法の雨も豊なる、露の恵を受くる身の、人衣の姿御覽せよ。かばかりは、うつり來ぬれど花もなき、地謡「芭蕉の露のふり

庭のもせ一庭野もせなるべし

一塵法界一塵一ナぢにも佛法界ありといふ

近水樓臺先得月向陽花木易爲春一宋の歐陽修の時

まさる、シテ謡「庭のもせ、山蔭のみぞ、ワキ調「寢られねば枕ともなき松が根の、現れ出づる姿を見れば、有りつる女人の顔ばせなり。さもあれ御身は如何なる人ぞ。シテ調「いや人とは恥しや。眞は我は非情の精、芭蕉の女と現れたり。ワキ調「そもや芭蕉の女ごととは、何の縁にかかゝる女體の、身をば受けさせ給ふらん。シテ謡「其御不審は御あやまり。何か定めは荒金の、ワキ調「土も草木も天より降る、シテ謡「雨露の恵を受けながら、ワキ調「我とは知らぬ有情非情も、シテ謡「おのづからなる姿となりて、ワキ調「さも愚なる、シテ謡「女として、上歌地謡「さなきだに、あだなるに芭蕉の、女の衣は薄色の、花染ならぬに、袖のほころびも恥かしや。
クセ地謡「夫れ非情草木といつば、眞は無相眞如の體、一塵法界の心地の上に、雨露霜雪の形を見す、シテ、サシ謡「然るに一枝の花を捧げ、地謡「御法の色をあらはすや、一花開けて四方の春、長閑けき空の日影を得て、楊梅桃李数々の、シテ謡「色香に染める心まで、地謡「諸法實相隔てもなし。クセ水に近き樓臺は、まづ月を得るなり、陽に向へる花木は又、春に逢

世は芭蕉葉の云
云一列子に見ゆ
る故事鄙人腐を
獲て之を隠し蕉
葉を以て覆ふ其
所在を失ひて夢
となす却て他人
之を得たりとい
ふ

ふ事易きなる、其理も様々の、實に目の前に面白やな。春過ぎ夏たけ、秋來る風の音
信は、庭の萩原先そよぎ、そよかよる秋と知らすなり。身は古寺の軒の草、忍ぶとすれ
どいにしへも、花は嵐の音にのみ、芭蕉葉の、脆くも落つる露の身は、置き所なき蟲の
音の、蓬がもとの心の、秋とてもなにか變らん。シテ謡「よしや思へば定めなき、地謡「世は
芭蕉葉の夢の内に、牡鹿の鳴く音は聞きながら、驚きあへぬ人心、思ひいるさの山はあ
れど、唯月ひとり伴なひ、馴れぬる秋の風の音、起き臥し茂き小笹原、しのに物思ひ立
ち舞ふ袖、暫しいざやかへさん。シテ謡「今宵は月も白妙の、地謡「氷の衣、霜の袴、(序
ノ舞)シテ謡「霜の經、露の緯、こそ弱からし。地謡「草の袂も、シテ謡「久方の、地謡「久方の、天つ少女
の羽衣なれや。シテ謡「是も芭蕉の羽袖をかへし、地謡「かへす袂も芭蕉の扇の、風茫茫と物
凄き古寺の庭の浅茅生、女郎花刈萱、面影うつろふ露の間に、山嵐松の風吹き拂ひ吹き
拂ひ、花も千草もちりぐに、花も千草もちりぐになれば、芭蕉は破れて残りけり。

百萬

梗 百萬といふ女、失ひたる我子を慕ひて、狂亂の姿となりなが
ら、嵯峨の大念佛の場に詣でて、つひに廻り逢ひたる事を作
る。末段清涼寺の縁起を説き、佛徳を讃歎す。(四番目)

シテ 百萬 子方百万の子 ワキ 僧

嵯峨の大念佛
清涼寺にて毎年
三月六日より十
五日迄行はる
彌陀頼む云々
玉葉集の歌末句
西へこそ行け
懸草の一萬葉集
に「懸草を力車
に七車つみてこ
ふらくわが心か
ら

ワキ次第謡「竹馬にいざやのりの道、竹馬にいざやのりの道、眞の友を尋ねん。詞「是は和州三
芳野の者にて候。又是に渡り候幼き人は、南都西大寺のあたりにてひろひ申して候。此
頃は嵯峨の大念佛にて候程に、此幼き人をつれ申し、念佛に參らばやと存じ候。狂言「シ
カシカ、シテ謡「あら惡の念佛の拍子や候。わらは音頭を取り候べし。謡「南無阿彌陀佛、地謡「南
無阿彌陀佛、シテ謡「南無阿彌陀佛、地謡「南無阿彌陀佛、シテ謡「彌陀頼む、地謡「人は雨夜の
月なれや、雲晴れねども西へゆく、シテ謡「阿彌陀佛やなまうだと、地謡「誰かは頼まざる、
誰か頼まざるべき。シテ謡「是かや春の物狂、地謡「みだれ心か戀草の、シテ謡「力車に七く

牛の車一経律異
相に提草といふ
女人身を焼て天
に生ぜんとせし
を辨才法師がか
くしてもいかで
罪滅びん牛が車
を推くとも新に
車をかけるべ
しといへり

るま、地謡「積むとも盡きじ、シテ謡「重くとも、シテ謡「一度に頼む彌陀の力、頼めやたのめ南無阿彌陀佛。

上歌地謡「けにや世々毎の、親子の道にまとはりて、親子の道にまとはりて、猶此闇を晴れ

やらぬ。シテ謡「臘月の薄曇り、地謡「わづかにすめる世に、尚三界の首枷かや、牛の車のと

ことはに、何くをさして引かるらん。えいさらえいさ。シテ謡「輓けや輓けや此車、地謡「物

見なり物見なり。シテ謡「けに百萬が姿は、地謡「本よりながき黒髪を、シテ謡「荆棘の如く亂

して、地謡「古りたる烏帽子引きかづき、シテ謡「又眉根黒き亂れ墨、地謡「うつし心か村鳥、

シテ謡「憂かれと人は添ひもせて、地謡「思はぬ人を尋ねれば、シテ謡「親子の契麻衣、地謡「肩

を結んで裾にさけ、シテ謡「裾を結びて肩に懸け、地謡「筵片、シテ謡「菅藁の、地謡「亂れ心な

がら南無釋迦彌陀佛と、信心をいたすも、我子に逢はんためなり。シテ謡「南無や大聖釋迦

如來、我子に逢はせ狂氣をもとどめ、安穩に守らせ給ひ候へ。
子詞「如何に申すべき事の候。ワヤ詞「何事にて候ぞ。子詞「是なる物狂をよくく見候へば、

法樂一佛への手
向
羅睺爲長子一釋
迦在俗の時の子
鸚鵡一逢ふを掛

故郷の母にて御入り候。謡「恐れながらよその様にて、問うて給はり候へ。ワヤ詞「是は思ひも

よらぬ事を承り候ものかな。やがて問うて參らせうするにて候。いかに是なる狂女、お

ことの國里は何くの者ぞ。シテ謡「是は奈良の都に百萬と申す者にて候。ワヤ詞「それは何故

かやうに狂人とはなりたるぞ。シテ謡「夫には死して別れ、只一人ある忘形見のみどり子に

生きて離れて候程に、思が亂れて候。ワヤ詞「扱今も子と云ふ者のあらば嬉しかるべきか。

シテ謡「仰せまでもなしそれ故にこそ亂れ髪、遠近人に面を晒すも、若しも我子に廻りや

逢ふと、謡「車に法の聲立てよ、念佛申し身を碎き、我子に逢はんと祈るなり。ワヤ謡「けに

痛はしき御事かな。眞信心わたくしなくば、かほど群集の其中に、などかは廻り逢はざ

らん。シテ謡「嬉しき人の言葉かな。それに付きても身を碎き、法樂の舞を舞ふべきなり。

囃してたべや人々よ。謡「忝くも此御佛も、羅睺爲長子と説き給へば、地謡「我子に鸚鵡

の袖なれや、親子鸚鵡の袖なれや。百萬が舞を見給へ。シテ謡「百や萬の舞の袖、地謡「我子

の行方祈るなり。

牛羊脚徑險島
雀架枝深一杜
子美の詩

奈良坂の云々
千手に注す

羊の歩み一層所
の羊を人間の無
常に喩ふ

シテ、クセ通「けにや惟れば、何くとも住めば宿、地通「住まぬときには故郷もなし、この世はそも何くの程ぞや。シテ、ウシ通「牛羊徑街に歸り、鳥雀枝の深きに集る。地通「けに世の中はあだ浪の、よるべはいづく雲水の、身の果いかに楢の葉の、梢の露の故郷に、シテ、ウシ憂き年月を送りしに、地通「さしも二世とかけし中の、契の末は花鬘、結びもとめぬあだ夢の、長き別れとなり果てよ、シテ、ウシ「比目の枕敷波の、地通「あはれはかなき契かな。
クセ地通「奈良坂の、兒の手柏の二面、兎にも角にも佞人の、なき跡の涙越す、袖の欄隙なきに、思ひ重なる年波の、流るよ月の影惜しき、西の大寺の柳陰、みどり子のゆくへ白露の、置き別れて、いづちとも知らず失せにけり。一方ならぬ思草、葉末の露も青によし、奈良の都を立ち出でて、かへり三笠山、佐保の川を打ち渡りて、山城に井手の里、玉水は名のみして、影うつす面影、淺ましき姿なりけり。かくて月日を送る身の、羊の歩み隙の駒、足にまかせて行く程に、都の西と聞えつる、嵯峨野の寺に参りつよ、四方の景色を眺むれば、シテ、ウシ「花の浮木の龜山や、地通「雲に流るよ大井河、眞に浮世の嵯峨なれ

二佛一釋迦と彌勒
毘首羯磨一天竺
の佛師
震旦一支那
安居一四月十六
日より五月十六
日迄
孝養一今は供養
と書きてヤヨオ
ヨオと添ふ

や、盛過ぎ行く、山櫻嵐の風、松の尾小倉の里の夕霞、立ちこそ續け小忌の袖、かざしぞ多き花衣、貴賤群集する、此寺の法ぞ尊き、彼よりも是よりも、只此寺ぞ有難き、忝くもかよる身に、申すは恐れなれども、二佛の中間、我等如きの迷ひある、道明らめん主として、毘首羯磨が作りし、赤梅檀の尊容、やがて神力を現じて、天竺震旦我朝、三國に渡り、有難くも此寺に現じたまへり。シテ、ウシ「安居の御法と申すも、地通「御母摩耶夫人の、孝養の御爲なれば、佛も御母を、かなしみ給ふ道ぞかし。況んや人間の身として、などかは母を悲しまぬと、子を恨み身をかこち、感歎してぞ祈りける、親子鸚鵡の袖なれや。百萬が舞を見給へ。地通「あら我子戀しや。シテ、ウシ「是程多き人の中に、などや我子の無きやらん、あら我子戀しや。我子給べなう、南無釋迦牟尼佛と、地通「狂人ながらも子にもや逢ふと、信心はなきを南無阿彌陀佛、南無釋迦牟尼佛南無阿彌陀佛と、心ならずも逆縁ながら、誓に逢はせてたび給へ。
ワキ通「餘りに見るも痛はしや、是こそお事の尋ぬる子よ、よくく寄りて見給へとよ。

シテ「心強や、疾くにも名のり給ふならば、かやうに恥をば晒さじものを、あら恨めしとは思へども、地誦たま〜逢ふは優曇華の、花待ち得たり。夢か現か、幼か、キリ地誦よくよく物を案するに、よく〜物を案するに、彼御本尊はもとよりも、衆生のための父なれば、母諸共に廻り逢ふ、法の力ぞ有難き。願も三つの車路を、都に歸る嬉しさよ。都に歸る嬉しさよ。

船辨慶

梗

概

義經、兄頼朝と申違ひて、一先西國へ赴かんとて、大物の浦より船を出す。折しも静と別を惜しみ、静舞をかなづ。これ前段なり。このしめやかなる景情一轉して後段となれば、解纜の後、大風起りて怒濤澎湃と見れば波頭に浮べる知盛の幽霊、怨を晴らさんと義經に迫り、長刀もて働を演ず。辨慶祈りて調伏す。壯絶凄絶。(五番目)

前シテ 静 後シテ 知盛 子方 義經
 ワ キ 辨慶 ワキツレ 從者 狂言 船頭

西塔—比叡山の
 判官殿—義經の
 こと檢非違使尉
 を判官といふ
 いひかひなき者
 !ユイカイと誦
 ふことは梶原景
 時をさす
 御開き—落つる
 こと言葉を思ひ
 ていふ

ワキ、ツレ「今日思ひ立つ旅衣、今日思ひ立つ旅衣、歸洛をいつと定めん。ワキ「かやうに候者は、西塔の傍にすまひする武藏坊辨慶にて候。さても我君判官殿は、頼朝の御代官として平家を亡し給ひ、御兄弟の御中日月の如く御座候べきを、いひかひなき者の讒言により、御中たがはれ候事、かへすくも口惜き次第にて候。然れども我君親兄の禮を重んじ給ひ、一まづ都を御開きあつて、西國の方へ御下向あり、御身にあやまりなき通

不食一申候

世の中の云々
八幡の御神歌な
りと云ふ

りを御歎き有るべき爲に、今日夜をこめ淀より御船に召され、津の國尼が崎大物の浦へと急ぎ候。サレ、頃頃は文治の初めつかた、頼朝義經不食の由、すでに落居し力なく、判官「判官、都を遠近の、道狭くならぬ其さきに、西國の方へと志し、ワキ立衆、まだ夜深くも雲居の月、出づるも惜き都の名残、ひとよせ平家追討の、都出には引きかへて、たゞ十餘人すごくと、さも疎からぬ友舟の、下歌上り下るや雲水の、身は定めなきならひかな。上歌世の中の、人は何とも石清水、人は何とも石清水、澄み濁るをば神ぞ知るらんと、高き御影を伏し拜み、行けば程なく旅心、潮も波も共に引く、大物の浦に著きにけり。大物の浦に著きにけり。

ワキ「御急ぎ候程に、是ははや大物の浦に御著きにて候。某存じの者の候間、御宿の事を申し付けうするにて候。如何に此屋の主の渡り候か。狂言「誰にて御入り候ぞ。ワキ「いや武藏にて候。狂言「さて只今は何の爲の御出候ぞ。ワキ「さん、候我君を是まで御供申して候、御宿を申し候へ。狂言「さらば奥の間へ御通り候へ。御用心の事は御心安く思召され

神妙一感心

何共なや一何共
しやうの無き意

候へ。ワキ「如何に申し上げ候。恐れ多き申し事にて候へども、正しく静は御供と見え申して候。今の折節何とやらん似合はぬ様に御座候へば、あつばれ是より御かへしあれかしと存じ候。判官「ともかくも辨慶はからひ候へ。ワキ「畏つて候。さらば靜の御宿へ参りて申し候べし。

ワキ「いかに此屋の内に靜の渡り候か。君よりの御使に武藏が参じて候。レテ「武藏殿とはあら思ひよらずや。何のための御使にて候ぞ。ワキ「さん、候、只今参る事餘の儀にあらす。我君の御説には、是までの御参り、かへすくも神妙に思召し候さりながら、只今は何とやらん似合はぬやうに御座候へば、是より都へ御歸りあれとの御事にて候。レテ「是は思ひもよらぬ仰せかな。いづくまでも御供とこそ思ひしに、誰頼みなきは人の心なり。あら何共なや、候。ワキ「扱御返事をば何と申し候べき。レテ「自ら御供申し、君の御大事になり候はど留まり候べし。ワキ「あら事々しや、候。たゞ御とまり有るが肝要にて候。レテ「よくく物を案するに、是は武藏殿の御計らひと思ひ候程に、わらは参り直に御返

人口一世間の風
評を氣遣ふ意

別れより云々
千載集の歌末句
あはんと思へば

事を申し候べし。ワヤ詞「それはともかくもにて候。さらば御参り候へ。如何に申し上げ候、
静の御参りにて候。判官詞「いかに静、此度思はずも落人となり落ち下る所に、是まではる
ばる来るころさし、かへすくも神妙なりさりながら、はるくくの波濤を凌ぎ下らん
事然るべからず。先此度は都に上り、時節を待ち候へ。ワヤ詞「さては誠に我君の御説にて
候ぞや。よしなき武藏殿を恨み申しつる事のはづかしさよ。諸返すくも面目なうこそ
候へ。ワヤ詞「いやくは是は苦しからず候。只人口を思召すなり。諸御心變はるとな思召し
そと、涙を流し申しけり。ワヤ詞「いやとにかくに数ならぬ、身には恨みもなければども、是
は舟路の門出なるに、上敷地謡「浪風も、静を留め給ふかと、静を留め給ふかと、涙を流し
木綿四手の、神かけて變らじと、契りし事も定めなや。けにや別れより、まさりて惜き
命かな。君に二たび逢はんとぞ思ふ行末。
判官詞「如何に辨慶、静に酒をすよめ候へ。ワヤ詞「畏つて候。けにくは是は御門出の、行末
千代ぞと菊の盃、諸静にこそはすよめけれ。ワヤ詞「妾は君の御別れ、やる方なさにかき

渡口郵船風靜出
波頭謡所日晴者
朗詠集の時

立ち舞ふべくも
源氏物語紅葉
賀巻の歌を引く

枝を連ぬる一連
枝なり兄弟のこ
と只たのめ一田村
を見よ

くれて、涙にむせぶばかりなり。ワヤ詞「いやくはこれは苦しからぬ、旅の舟路の門出の和
歌、諸只一さしと勸むれば、ワヤ詞「其時静は立ち上り、時の調子を取りあへず、渡口の郵
船は、風静まつて出づ。地謡「波頭の謫所は、日晴れて見ゆ。ワヤ詞「是に烏帽子の候召され
候へ。ワヤ詞「立ち舞ふべくもあらぬ身の、地謡「袖打ち振るも恥かしや。ワヤ詞「傳へ聞く
陶朱公は勾踐を伴ひ、地謡「會稽山に籠り居て、種々の智略をめぐらし、終に吳王を亡
して、勾踐の本意を達すとかや。然るに勾踐は、二度世を取り、會稽の恥を雪ぎしも、
陶朱功を成すとかや。されば越の臣下にて、政を身に任せ、功名富み貴く心の如くなる
べきを、功成り名遂けて身退くは、天の道と心得て、小船に棹さして、五湖の遠島を樂
しむ。ワヤ詞「かよる例も有明の、地謡「月の都をふりまてよ、西海の波濤に赴き、御身の料
のなきよしを、歎き給はど頼朝も、終にはなびく青柳の、枝を連ぬる御契、などは朽
ちし果つべき。地謡「只たのめ、(中ノ緯)ワヤ詞「只頼め標茅が原のさしも草、地謡「我世の中
あらん限りは、ワヤ詞「かく尊詠の偽なくは、地謡「かく尊詠の偽なくは、やがて御代に

とく〜一縷を
解くといふより
疾くとかけて纏
けたり

出舟の、船子どもはや纜をとく〜と、はや纜をとく〜と、すよめ申せば判官も、
旅の宿りを出で給へば、レテ謡「静は泣く〜」、地謡「烏帽子直垂ぬぎ捨てよ、涙に咽ぶ御別
れ、見る目もあはれなりけり、見る目もあはれなりけり。(申入)

ワキ謡「静の心中察し申して候。やがて御舟を出ださうするにて候。ワキツレ謡「いかに申し
候。ワキ謡「何事にて候ぞ。ワキツレ謡「君よりの御説には、今日は浪風あらく候程に、御逗留
と仰せ出だされて候。ワキ謡「何と御逗留と候や。ワキツレ謡「さん候。ワキ謡「是は推量申す
に、静に名残を御惜みあつて、御逗留と存じ候。先御思案有つて御覽候へ。今此御身に
てかやうの事は、御運も盡きたると存じ候。其上とせ渡邊福鳥を出でし時は、以ての
外の大風なりしに、君御舟を出だし、平家を亡し給ひし事、今以て同じ事ぞかし。急
ぎ御舟を出だすべし。ワキツレ謡「けに〜是は理なり。いづくも敵と夕浪の、ワキ謡「立ち
騒ぎつよ舟子ども、地謡「えいや〜と夕汐に、つれて舟をぞ出だしける。
ワキ謡「あら笑止や風が變はつて候。あの武庫山おろし弓絃羽が獄より吹きおろす嵐に、此

あやかし〜妖怪

月卿云々〜月卿
雲客といふを直
に雲霞と纏けた
り

知盛〜清盛の三
男
巴浪〜長刀をよ
りまはす形

打物〜刀

御舟の陸地に著くべき様もなし。皆々心中に御祈念候へ。ワキツレ謡「いかに武藏殿、此御
舟にはあやかしが付いて候。ワキ謡「あよ暫く。さやうの事をば船中にては申さぬ事にて
候、謡「あら不思議や海上を見れば、西國にて亡びし平家の一門、おの〜浮み出でたる
ぞや。かよる謡「時節を窺ひて、恨をなすも理なり。判官謡「いかに辨慶、ワキ謡「御前に候。
判官謡「今更驚くべからず。たとひ悪靈恨みをなすとも、そも何事の有るべきぞ。謡「悪逆無
道の其積り、神明佛陀の冥感に背き、天命に沈みし平氏の一類、地謡「主上を始め奉り、
一門の月卿雲霞の如く、波に浮みて見えたるぞや。
後レテ謡「抑是は、桓武天皇九代の後胤、平の知盛幽霊なり。詞あらめづらしやいかに義

經、謡「思ひもよらぬ浦波の、地謡「聲をしるべに出舟の、謡「聲をしるべに出舟の、レテ謡「知盛
が沈みし其有様に、地謡「又義經をも海に沈めんと、夕浪に浮める長刀とり直し、巴浪の
紋あたりを拂ひ、潮を蹴立て悪風を吹きかけ、眼もくらみ心もみだれて、前後を忘する
ばかりなり。判官謡「その時義經少しも騒がず、地謡「その時義經少しも騒がず、打物抜き持

東方云々不動
明王に祈る文句

跡白波一跡知ら
ずの意を掛く

ち、現の人に向ふが如く、言葉を交し戦ひ給へば、辨慶おし隔て、打物業にて叶ふまじと、珠數さら／＼と押しもんで、東方降三世、南方軍荼利夜叉、西方大威徳、北方金剛夜叉明王、中央大聖不動明王の案にかけて、祈り祈られ、悪靈次第に遠ざかれれば、辨慶舟子に力を合はせ、御船を漕ぎのけ汀によすれば、猶怨靈は慕ひ来るを、追つ拂ひ祈りのけ、又引く汐にゆられ流れ、また引く汐にゆられ流れて、跡白波とぞなりにける。

内十七

右近

梗概

伊勢物語に右近の馬場のひなりの日向ひに立てたる車に女の顔の見えたるに、業平の見すもあらずの歌を誦み、女の「知るしらぬの返歌せし事見えたるを材料とし、花爛漫の春の日北野の神の現れて神徳を述ぶる事を作る。」(脇能)

シテ 北野の神(前は女) ツレ 女

ワキ 神主

右近の馬場一右
近衛府の馬場
櫻狩云々拾遺
集の歌末句陰に
隠れん

ワキ三人 四方の山風長閑なる、四方の山風長閑なる、雲居の春ぞ久しき。ツキ對、そもく是は鹿島の神職何某とは我事なり。われ此度都に上り、洛陽の名花残りなく、一見仕りて候。また北野右近の馬場の花、今を盛りなるよし承り候間、今日は右近の馬場の花を眺めばやと存じ候。道行三人「雲の行く、そなたやしるべ櫻がり、そなたやしるべ櫻がり、雨

花車—花やかなる車

ひをり—諸説區區たる語なり引折の日にて折目正しき懸束を著る晴れの日なりとも云ふ
朝日寺—北野天満てる神—天満宮
遙見—人家花便入—白樂天の詩

は降りきぬ同じくは、ぬるとも花の陰ならば、いざや宿らん松かけの、ゆくへも見ゆる梢より、北野の森もちかづくや、右近の馬場に著きにけり、右近の馬場に著きにけり、ワヤ言「急ぎ候程に、是は早右近の馬場に著きて候。あれを見れば花見の人々と見えて、車をならべ輿をつどけ、まことに面白う候。暫くやすらひ花を眺めばやと存じ候。

をならべ輿をつどけ、まことに面白う候。暫くやすらひ花を眺めばやと存じ候。サレテ、一雙「春風桃李花の開くる時、人の心も花やかに、あくがれいつる都の空、けに長閑なる時とかや、一雙「見渡せば、柳櫻をこきまぜて、錦をかざる花車、ワヤ言「來る春ごとに誘はるよ、サレテ、ツレ言「心もながき氣色かな下歌花見車の八重一重見えて櫻の色々に、上歌ひをりせし、右近の馬場の木の間より、右近の馬場の木の間より、影も匂ふや朝日寺の、春の光も天満てる、神の御幸の跡古りて、松も木高き梅が枝の、立枝も見えて、紅の、初花車めぐる日の、轅や北につどくらん、轅や北につどくらん。

ワヤ言「長閑なる頃は彌生の花見とて、右近の馬場の竝木の櫻の、陰踏む道に休らへば、サレテ言「けにや遙に人家を見て、花あれば即入るなれば、木陰に車を立てよせけり。ワヤ言「む

何かあやなく—伊勢物語の歌初句知るしちぬ末句しるべなりけれ

花下形—因美景—白樂天の詩
百千鳥—古今六帖の歌末句浸まれぬ

かひを見れば女車の、所からなる昔語、思ひぞいつる右近の馬場の、ひをりの日にはあらねども、言見すもあらず、見もせぬ人の戀しくは、詞あやなく今日や詠め暮さん。是業平の此所にて、女車を詠みし歌、今更思ひいでられたり。ワヤ言「あら面白の口ずさみや、右近の馬場のひをりの日、詞むかひに立てる女車の、所からなる昔語、はづかしながら今はまた、我身の上に業平の、何かあやなく分きていはん、言思ひのみこそしるべなりしを。ワヤ言「さやうに詠めし言の葉の、其舊跡もこよなれば、今又かやうに言問ふ人も、いつ馴れもせぬ人なれども、サレテ言「たど花ゆゑに北野の森にて、ワヤ言「言葉をはせば、サレテ言「見すもあらず、上歌地言「見もせぬ人や花の友、見もせぬ人や花の友、知るも知らぬも花の陰に、相宿りして諸人の、いつしか馴れて花車の、榻立てよ木のもとに、下りるていざや眺めん。けにや花の下に、歸らん事を忘るよは、美景によりて花心、馴れ馴れそめて眺めん。いざ／＼馴れて眺めん。百千鳥、花になれゆくあだし身は、はかなき程に羨まれて、うはの空の心なれや。うはの空の心なれ。

西キナ袖ふる
萬葉集の歌
古き御幸一醒聞
天皇の時

御本地一解説に
て神の本體を併
なりとし各の神
に對して本地併
あり

ロンギ地謡「けに名にしおふ神垣や、北野の春も時めける、神の名所數々に、シテ謡「眺むれば、都の空のはるくと、霞み渡るや北の宮居、御覽ぜよ時をえて、花櫻葉の宮所、地謡花の濃染の色分けて、紅梅殿や老松の、シテ謡「縁より明けそめて、一夜松も見えたり。地謡日影の空も茜さす、シテ謡「紫野行き標野ゆき、地謡「野守は見すや君が袖、古き御幸の物見とて、車も立つや御輿岡、是ぞ此神の御旅居の、右近の馬場わたり、神幸ぞたつとかりける。

ワキ詞「あらありがたの御事や、かくしも委しく語り給ふ、社々の御本地を、なほく教へおはしませ。シテ謡「まことは我は此神の、末社と現れ君が代を、守りの神と思ふべし。ワキ謡「よくく聞けば有難や、守りの神とはさてくいつれの靈神にて、かやうに現れ給ふらん。シテ謡「あらはづかしや神ごとは、謡あさまには何と岩代の、地謡「待つこと有りや有明の、待つこと有りや有明の、月も曇らぬ久方の、天照神にては、櫻の宮と顯はれ、ここに北野の櫻葉の、神と夕の空晴れて、月の夜神樂を待ち給へと、花に隠れ失せにけり

や。花に隠れ失せにけり。

ワキ上歌謡「けに今とても神の代の、けに今とても神の代の、誓は盡きぬ驗とて、神と君との御恵み、眞なりけり有難や。眞なりけり有難や。

花明上苑一輕軒
軒馳九陌之塵
一朗詠集の句

櫻の宮一伊勢内
宮の内

後シテ謡「天皇の賢き御代を守るなる、右近の馬場の春を得て、花上苑に明にして、輕軒九陌の塵に、交る神心、和光の影も曇なき、君の威光も影高く、花も揺がす治まる風も、のどかなる代のためでたさよ。地謡「曇なき天照神の恵みを受けては、櫻の宮居と現れ給ひ、シテ謡「ここに北野の神の宮居に、地謡「花櫻葉の神と現れ、曇らぬ威光を顯し衣の、袖もかざしの花盛、(中ノ舞)地謡「月も照り添ふ花の袖、月も照り添ふ花の袖、雪を廻らす神かぐらの、手の舞足踏拍子を揃へ、聲すみわたる雲の棧、花に戯れ枝に結ほよれ、かざしも花の糸櫻、(發ノ舞)シテ謡「治まる都の花盛、地謡「治まる都の花盛、東南西北も音せぬ浪の、花も色添ふ北野の春の、御池の水に御影をうつし、うつしうつろふ櫻衣の、裏吹きかへす梢にあがり、枝に木傳ふ花鳥の、とぶさにかけり雲につたひ、遙に上るや雲の羽風に、

櫻衣一表白裏紫
雲の羽風一雲の
端と云ふを羽風
とつたけたり

神はあがらせ給ひけり。

女な郎ら花めし

梗 概

平城天皇の御宇、小野頼風と云ふ者、男山に住めり。契をこめし京の女、頼風の無情を恨みて、八幡の放生川に身を投ぐ。其衣朽ちて女郎花生ひ出でたりといふ物語あり。之れに據りて二人の霊を出し、昔語をなさしめ、邪淫の科を受けて地獄の苦患に惱めるさまを見せ、僧の用ひを受けしむる事を作る。女郎花に關する古歌などもて文飾せり。(五番目)

シテ 小野頼風(前は老翁) ツレ妻
ワキ 僧

不知火の一筑紫の枕詞

ワキ詞「是は九州松浦瀧より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候程に、此秋思ひ立ち都に上り候。道行誦住み馴れし、松浦の里を立ち出でて、松浦の里を立ち出でて、末不知火の筑紫瀧、いつしか跡に遠ざから、旅の道こそ遙かなれ。旅の道こそ遙かなれ。詞急ぎ候程に、是ははや津の國山崎とかや申し候。向ひに拜まれさせ給ふは、石清水八幡宮にて御座候。我國の宇佐の宮と御一體なれば、詣らばやと思ひ候。又是なる野邊に女郎花の

今を盛と咲き亂れて候。立ち寄り詠めばやと存じ候。

ワキ「さても男山麓の野邊に来て見れば、千種の花盛んにして、色を飾り露を含みて、蟲の音までも心あり顔なり。野草花を帯びて蜀錦を連ね、桂林雨を拂つて松風を調む。

此男山の女郎花は、古歌にも詠まれたる名草なり。是も一つは家苞なれば、花一本を手折らんと、此女郎花の邊に立ち寄れば、シテ「なう其花な折り給ひそ。花の色は蒸せる粟の如し、俗呼ばつて女郎とす、戯れに名を聞いてだに借老を契るといへり。誦まして

やはは男山の、名を得て咲ける女郎花の、多かる花に取り分きて、など情なく手折り給ふ、あら心なの旅人やな。ワキ「さて御身は如何なる人にてましますば、是程咲き亂れたる女郎花をば惜み給ふぞ。シテ「惜み申すこそ理なれ。此野邊の花守にて候。ワキ「たとひ花守にてましますば、御覽候へ出家の身なれば、佛に手向と思召し、一本御ゆるし候へかし。シテ「實にくゝ出家の御身なれば、佛に手向と思ふべけれど、彼菅原の神木にも折らで手向けよと、其外古き歌にも、誦折り取らば手ぶさに穢る立てながら、三世の

花の色は一本朝文粹に花色如蒸栗俗呼爲女郎聞名戲欲契借老云々

菅原の神木一安樂寺の梅をいふ新古今集に「情なく折る人つちし我宿の主忘れぬ梅の立枝を」折り取らば云々後撰集に出づ

名にめてて云々古今集に出づ女郎花憂しと云云古今集の歌なまめきたる野になまめきたる女郎花あなかしかまし花もひと時」

佛に花奉るなどと候へば、ことさら出家の御身にこそ、猶しも惜み給ふべけれ。ワキ「左様に古き歌を引かば、何とて僧正遍昭は、名にめてて折れるばかりぞ女郎花とはよみ給ひけるぞ。シテ「いやさればこそ我落ちにきと人に語るなど、深く思ふの摺衣の、女郎と契る草の枕を、竝べしまでは疑ひなければ、其御たとへを引き給はど。出家の身にては御誤り。ワキ「かやうに聞けば戯れながら色香にめづる花心。詞とかく申すによしぞなき、暇申して歸るとて、誦もと來し道に行き過ぐる。シテ「おう優しくも所の古歌をば知ろし召したり。誦女郎花憂しと見つよぞ行き過ぐる。男山にし立てりと思へば、拙馬優しの旅人や、花は主ある女郎花、よし知る人の名にめてて、許し申すなり、一本折らせたまへや。上歌なまめき立てる女郎花、なまめき立てる女郎花、うしろめたくや思ふらん。女郎と書ける花の名に、誰借老を契りけん。彼那那の假枕、夢は五十のあはれ世の、ためしもまことなるべしや、ためしもまことなるべしや。ワキ「此野邊の女郎花に眺め入りて、未だ八幡宮に参らす候。シテ「この尉こそ山上する

生けるを放つ
男山の放生會、
八月十五日に行
はる

三つの袂―三衣
のこと僧の衣を
いよ
神宮寺―八幡宮
に附屬す
鳩の嶺―男山の
異名

者にて候へ。八幡への御道しるべ申し候べし。此方へ御入り候へ。ワヤ謡「聞きしに越えて尊く有難かりける靈地かな。ワヤ謡「山下の人家軒をならべ、ワヤ謡「和光の塵も濁江の、河水に浮む鱗は、實にも生けるを放つかと、深き誓もあらたにて、恵ぞ繁き男山、榮行く道の有難さよ。地謡「頃は八月半の日、神の御幸なる御旅所を伏し拜み、上歌久方の、月の桂の男山、月の桂の男山、さやけき影はところから、紅葉も照り添ひて、日もかけろふの石清水、苔の衣も妙なりや。三つの袂に影うつる、しるしの箱を納むなる、法の神宮寺、有難かりし靈地かな。巖松峙つて、山聳え谷廻りて、諸木枝を連ねたり。鳩の嶺越し来て見れば、三千世界もよそならず、千里も同じ月の夜の、朱の玉垣御戸代の、錦かけまくも、忝しと伏し拜む。

申すこそ、男山に付きたる謂にて候へ。また此山の麓に、男塚女塚とて候を見せ申し候べし。此方へ御入り候へ。是なるは男塚、又此方なるは女塚、此男塚女塚に付いて、女郎花の謂も候。是は夫婦の人の土中にて候。ワヤ謡「さて其夫婦の人の國は何處、名字は如何なる人やらん。ワヤ謡「女は都の人、男は此八幡山に、諸小野の頼風と申しよ人。上歌地謡「恥かしやいにしへを、語るもさすがなり。申さねば又亡き跡を、誰か稀にも弔ひの、便を思ひ頼風の、更け行く月に木隠れて、夢の如くに失せにけり。夢の如くに失せにけり。(中入)

ワヤ上歌謡「一夜伏す、男鹿の角の塚の草、男鹿の角の塚の草、陰より見えし亡魂を、弔ふ法の聲立てよ、南無幽靈出離生死頓生菩提。後ワヤ謡「おう曠野人稀なり。我古墳ならで又何物ぞ。ワヤ謡「骸を争ふ猛獸は、禁するに能はず。ワヤ謡「なつかしや聞けば昔の秋の風。ワヤ謡「うら紫か葛の葉の、ワヤ謡「歸らば連れよ妹背の波。地謡「消えにし魂の女郎花、花の夫婦は現れたり。あら有難の御法やな

塚の草―東の間
の語を塚にかく

便を思ひ頼風―
稲に寄りを掛く

うち茶―末程遅
き茶

男山の昔を思つて古今集序の文意くねるひがみすねること

ワキ 影の如くに亡魂の、現れ給ふ不思議さよ、ッレ謡「妾は都に住みし者、彼頼風に契を籠めしに、レテ謡「少し契のさほりある、人間を眞と思ひけるか、ッレ謡「女心のはかなさは、都を獨あくがれ出でて、猶も恨みの思ひ深き、放生川に身を投ぐる。レテ謡「頼風是を聞き付けて、驚きさわぎ行き見れば、誰あへなき死骸ばかりなり。ッレ謡「泣くく死骸を取りあけて、此山本の土中に籠めしに、レテ謡「其塚より女郎花一本生ひ出でたり。頼風心に思ふやう、謡さては我妻の女郎花になりけるよと、猶花色もなつかしく、草の袂も我袖も、露觸れそめて立ち寄れば、此花恨みたる氣色にて、夫の寄れば靡き退き、又立ち退けばもとの如し。地謡「こよによつて貫之も、男山の昔を思つて、女郎花の一時を、くねると書きし水莖の、跡の世までもなつかしや。

クセ地謡「頼風其時に、彼哀れさを思ひ取り、無慙やな我故に、よしなき水の泡と消えて、徒なる身となるもひとへに、我科ぞかし、若かじ浮世に住まぬまでと、同じ道にならんとて、レテ謡「續いて此川に身を投けて、地謡「共に土中に籠めしより、女塚に對して、又男

山と申すなり。其塚はこれ、主は我幻ながら來りたり、跡弔ひてたび給へ、跡弔ひてたび給へ。あら闇浮戀しや。キリ淫の悪鬼は身を責めて、邪淫の悪鬼は身を責めて、其念力の道も峻しき劔の山の、上に戀しき人は見えたり嬉しやとて、行きのほれば、劔は身を通し、磐石は骨を砕く。こはそも如何に恐ろしや、劔の枝の撓むまで、いかなる罪のなれる果ぞや。よしなかりける花の一時を、くねるも夢ぞ女郎花、露の臺や花の縁に、浮めてたび給へ。罪を浮めてたび給へ。

關寺小町

梗 小野小町老衰して後尼になりて近江の國關寺のあたり
在りし頃歌道の譽れによりて七夕祭に寺の招を受くとい
ふことを作る著しく古今集序を加味す。(老女物)

シテ 小野小町 子 方寺の兒
ワキ 關寺住僧 ワキツレ 同 僧

星の祭一七夕

調々たる一白氏
文集の調々涼風
與一秋を引

ワキツレ次第話「待ち得て今ぞ秋に逢ふ、待ち得て今ぞ秋に逢ふ、星の祭を急がん。ワキツレ」是は江
州關寺の住僧にて候。今日は七月七日にて候程に、七夕の祭を取り行ひ候。又此山陰に
老女の菴を結びて候が、歌道を極めたる由申し候程に、幼き人を伴ひ申し、彼老女の物
語をも承らばやと存じ候。立衆サシ話「調々たる涼風と衰髪と、一時に來る初秋の、七日の夕
に早なりぬ。ワキツレ」今日七夕の手向とて、糸竹呂律の色々に、ワキツレ話「事を盡して、ワキツレ」數
島の、ワキツレ話「道を願の糸はへて、道を願の糸はへて、織るや錦のはた薄花をも添へて

願の糸一五色の
糸を懸けて男女
の願を叶へ給へ
と七夕に供ふる
こと

花因雨過紅將
老柳被風吹綠
漸低一百聯抄解
の詩句
埋木の云々一以
下古今集序の文
意

難波津の歌一
難波津にさく
やこの花冬ごも
り今を春へとさ
くやこの花

秋草の、露の玉琴かき鳴らす、松風までも折からの、手向に適ふ夕かな。手向に適ふ夕
かな。

レテ、サシ話「朝に一鉢を得ざれども求むるに能はず、草衣夕の肌を隠さざれども、おぎぬふ
に便あり。花は雨の過ぐるによつて紅正に老いたり、柳は風に欺かれて縁漸く垂れ
り。人更に若き事なし、終には老の鶯の、百轉の春は來れども、昔に歸る秋はなし。あ
ら來し方戀しや、あら來し方戀しや。ワキツレ」如何に老女に申すべき事の候。是は關寺に住
む者にて候。此寺の兒達歌を御稽古にて候が、老女の御事を聞き給ひ、歌を詠むべき様
をも問ひ申し、又御物語をも承らん爲に、兒達も是まで御出でにて候。レテ話「是は思ひ
も寄らぬ事を承り候物かな。埋木の人知れぬ事となり、花薄穂に出だすべきにしもあら
ず。心を種として言葉の花色香に染まば、などか其風を得ざらん。優しくも幼き人々の
御心に好き給ふものかな。ワキツレ」先々昔く人の翫び候は、難波津の歌を以て、手習ふ人
の始めにもすべき由聞え候よなう。レテ話「それ歌は神代より始まれども、文字の數定ま

淺香山の歌
へみゆる山の井
の浅き心をわが
思はなく比し
王一葛城王のと

我等も其流を
小町は衣通姫の
流なりといふ

らずして、事の心分き 謠難かりけらし。 今人の代となりて、めでたかりし世繼を詠み治めし詠歌なればとて、難波津の歌を詠び候。 又淺香山の歌は、王の御心を和らけし故に、是又めでたき詠歌よなう。 實によく心得給ひたり。 此二歌を 謠父母 調として、ワヤ調「手習ふ人の始めとなりて、 レテ調「高き賤しき人 謠をも分かず、 ワヤ調「都鄙遠國の鄙人や、 レテ調「我等如きの庶人までも、 ワヤ調「好ける心に、 レテ調「近江の海の、 上歌地調「さよ波や 溜の真砂は盡くるとも、 濱の真砂は盡くるとも、 よむ言の葉はよも盡きじ。 青柳の糸絶えず、 松の葉の散失せぬ、 種は心と思召せ。 假令時移り事去るとも、 此歌の文字あらば、 鳥の跡も盡きせじや。 鳥の跡も盡きせじや。 ワヤ調「有難う候。 古き歌人の言葉多しといへども、 女の歌は稀なるに、 老女の御事 例少なうこそ候へ。 我背子が來べき宵なりさよがにの、 蜘蛛の振舞かねてしるしも。 是は女の歌 候か。 レテ調「是は古へ衣通姫の御歌なり。 衣通姫とは允恭天皇の后にてまします。 形の如く我等も其流をこそ學び候へ。 ワヤ調「さては衣通姫の流を學び給ふかや。 近年聞えたる小野の小町こそ、 衣通姫の流とは承れ。 わび

色見えて古今
集に「色見えて
終る上物は世の
中の人の心の花
にぞありける
包めども古今
集の歌末句涙な
りけり
思ひつゝ小町
の歌下句涙と知
りせはさめざら
ましを古今集に
出づ

ぬれば身を浮草の根を絶えて、誘ふ水あらばいなんとて思ふ。 是は小町の歌候な。 レテ調「是は大江の帷章が心變りせし程に、世の中物うかりしに、 文屋の康秀が三河守になりて下りし時、 田舎にて心をも慰めよかすと、 我を誘ひし程に詠し歌なり。 謠忘れて年を経し物を、 聞けば涙の古事の、 又思はるよ悲しさよ。 ワヤ調「不思議やなわびぬればの歌は、 我がよみたりしと承る。 又衣通姫の流と聞えつるも小町なり。 實に年月を考ふるに、 老女は百に及ぶといへば、 たとひ小町の存ふるとも、 未だ此世に在るべきなれば、 今は疑ふ所もなく、 御身は小町の果ぞとよ。 謠さのみな包み給ひそとよ。 レテ調「いや小町とは恥かしや。 色見えてとこそよみし物を、 上歌地調「移ろふ物は世の中の、 人の心の花や見ゆる。 恥かしやわびぬれば、 身を浮草の根を絶えて、 誘ふ水あらば今も、 いなんとぞ思ふ恥かしや。 實にや包めども、 袖に溜らぬ白玉は、 人を見ぬ目の涙の雨、 古事のみを思草の、 花萎れたる身の果まで、 何白露の名残ならん。 レテ調「おもひつゝ寝ればや人の見えつらんと、 地調「よみしも今は身の上に、 存へ來ぬる年月を、 送り迎へて春秋の、 露行

あるはなく云々
新古今集に出
グいつまで草の云
云いつまで草の云
といふを草の名
にかけたり壁生
草をいふ花散じ
葉落つとは盛の
過ぐるごと
初の老一初老は
四十歳
玳瑁云々一玉造
小町社書書の序
文の意
枕づく一枕奴ぶ
ること書屋にか
けていふ
植生のこや一小
屋を此やに掛く
哀なる様にて一
小町の歌風をい
ふ

き霜來つて草葉變じ、蟲の音も枯れたり。レテ謡「生命既に限りとなつて、唯槿花一日の
榮に同じ。クセあるは無く、無きは數添ふ世の中に、あはれ何れの日まで歎かんと、詠せ
し事も我ながら、いつまで草の花散じ、葉落ちても残りけるは、露の命なりけるぞ。戀
しの昔や、忍ばしの古への身やと、思ひし時だにも、又古事になり行く身の、せめて今
は又、初の老ぞ戀しき。あはれ實に古へは、一夜泊りし宿までも、玳瑁を飾り、垣に金
花を懸け、戸には水精を連ねつと、鸞輿屬車の玉衣の色を飾りて敷妙の、枕づく、妻屋
の内にしては、花の錦の茵の起き臥しなりし身なれども、今は植生のこや玉を敷きし床
ならん。レテ謡「關寺の鐘の聲、地謡「諸行無常と聞くなれども、老耳こは益もなし、逢坂の
山風の、是生滅法の理をも得ばこそ、飛花落葉のをりくは、好ける道とて草の戸に、硯
をならしつと、筆を染めて藻鹽草、書くや言の葉の枯れくは、哀なる様にて強からぬ
は女の歌なれば、いとどしく老の身の、弱り行く果ぞ悲しき。子詞「如何に申し候。七夕
の祭遅なはり候。老女をも伴なひ御申し候へ。ワキ詞「如何に老女、七夕の祭を御出で有つ

星合一壺牛織女
二星の歌會

豊の明一宮中の
御宴十一月中の
辰の日
狂人走れば云々
一淮南子の語
胡蝶の舞一高麗
樂の名

て御覽候へ。レテ謡「いやく老女の事は憚りにて候程に、思ひも寄らず候。ワキ詞「何の苦し
う候べき、只々御出で候へとよ。上歌地謡「七夕の、織る糸竹の手向草、幾年経てかかけろ
ふの、小野の小町の百年に、及ぶや天つ星合の雲の、上人に馴れくは、袖も今は麻衣
の、淺ましや痛はしや、目もあてられぬ有様、逆も今宵は七夕の、とても今宵は七夕の、
手向の數も色々の、或は糸竹に、懸けて廻す盃の、雪を受けたる、童舞の袖ぞ面白き。
星祭るなり吳竹の、レテ謡「世々を経て住む、行末の、地謡「幾久しさを萬歳樂、レテ謡「あら
面白の只今の舞の袖やな。むかし豊の明の五節の舞姫の袖をこそ五度返しよが、是は又
七夕の手向の袖ならば、謡七返しにてや有るべき。狂人走れば不狂人も走るとかや、今
の童舞の袖に引かれて、謡狂人こそ走り候へ。百年は、(舞)ワカ 百年は、花に宿りし胡蝶
の舞、地謡「哀なり哀なり、老木の花の枝。レテ謡「さす袖も手忘れ、地謡「裳裾も足弱く、
レテ謡「たどよふ波の、地謡「立舞ふ袂は翻せども、昔に返す袖はあらばこそ。レテ謡「あら
戀しの古やな。地謡「さる程に初秋の短夜、はや明方の、關寺の鐘、レテ謡「鳥も頻に、地謡「告

羽東師の森山

け渡る東雲の、あさまにもならば、シテ通羽東師の森の、地通羽東師の森の、木隠れもよ
もあらし、暇申して歸るとて、杖にすがりてよろくと、本の薬屋に歸りけり。百年の
姥と聞えしは、小町が果の名なりけり。小町が果の名なりけり。

自然居士

梗概

雲居寺のあたりに住める自然居士、説法の砌に、諷誦を上げ、
布施を供養しに来れる女兒、人買に連れ行かれたるを、居士
助けんとて、追跡して近江に到り、人買に種々談するに、容易
に肯はず。遂に居士の舞をかなでて、態をすり羯鼓をうつ
事によりて、人買どもの心を慰め、やがて居士女子打連れ歸
洛する事を作る。(四番目)

シテ 自然居士 子 方女兒(謠無し)
キ ヲ人商人 ヲキツレ同
狂 言里 人

狂言詞「かやうに候者は、東山雲居寺のあたりに住まひ仕る者にて候。こよに自然居士と申
す喝食の御座候が、一七日説法を御述べ候。今日結願にて御座候。皆々参りて聴聞申し
候へ。

シテ詞「雲居寺造營の札召され候へ。夕の空の雲居寺、月待つ程の慰めに、説法一座述べ

喝食一僧には非
ずもと寒山拾得
の如く寺院にて
齊非時に食物等
をよびつく役を
つとむるもの
結願一満願
造營の札一造營
の寄附を募る札
を買へよとなり

導師一説法する
高座一羅牀禮盤
等の事
發願の証一説法
の初に鳴らす鐘
總神分一大小の
神紙
諷誦一願文
西天の貧女一賢
愚經に見ゆ

んとて、導師高座に上り、發願の鉦打ち鳴らし、謹み敬つて白す。一代教主釋迦牟尼寶號、三世の諸佛十方の薩埵に申して白さく、總神分に般若心經。や、是は諷誦を御上け候か。狂言詞「實に是は美しき小袖にて候。急いで此諷誦文を御覽候へ。レテ詞敬つて申し受くる諷誦の事。三寶衆僧の御布施一裏、右志す所は、二親聖靈頓證佛果の爲、身の代衣一重。三寶に供養し奉る。彼の西天の貧女が、一衣を僧に供ぜしは、身の後の世の逆縁、今の貧女は親の爲、上歌地誦身の代衣恨めしき、身の代衣恨めしき、浮世の中をとく出でて、先考先妣諸共に、同じ臺に生れんと、讀み上げ給ふ自然居士、墨染の袖を濡らせば、數の聽衆も色々の、袖を濡らさぬ人はなし。袖を濡らさぬ人はなしワキ詞「かやうに候者は、東國方の人商人にて候。我此度都に上り、數多人を買ひ取りて候。又十四五ばかりなる女を買ひ取りて候が、昨日少しの間暇を乞ひて候程に遣りて候が、未だ歸らず候。なう渡り候か、昨日の幼き者は、親の追善とやらん申して候ひつる程に、説法の座敷にあらうすると存じ候。自然居士の雲居寺に御座候程に、立越え見

曲もなや一つま
らなきこと

松本一膳所附近

うするにて候。ワキツレ詞「然るべう候。ワキ詞「や、さればこそこれに候。なう急いで連れて御入り候へ。狂言詞「やるまいぞ。ワキ詞「用がある。狂言詞「用が有らば連れて行け。如何に居士へ申し候。レテ詞「何事にて候ぞ。狂言詞「只今諷誦を上げて候女を、荒けなき男の來り候ひて追つ立てゝ行き候程に、遣るまじきと申し候へば、用があると申し候程に遣りて候。レテ詞「あら曲もなや候。始めより彼女は様有りけに見えて候。其上諷誦を上げ候にも、唯小袖とも書かず、身の代衣と書いて候よりちと不審に候ひしが、居士が推量申すは、彼者は親の追善の爲に、我身を此小袖に替へて諷誦を上げたると思ひ候。さあらば只今の者は人商人にて候べし。彼は道理此方は僻事にて候程に、御身の留めたる分にてはなり候まじ。狂言詞「人商人ならば東國へくだり候べし。大津松本へ某走り行き留めうするにて候。レテ詞「暫く、御出で候分にてはなり候まじ。居士此小袖を持ちて行き、彼女に代へて連れて歸らするにて候。狂言詞「いやそれは今日までの御説法が無になり候べし。レテ詞「いや説法は百日千日聞し召されても、善惡の二つを辨へん爲ぞかし。今の女は善人商

願以此功德一法華經の文句

人は悪人。善惡の二道に極つて候は如何に。諸今日の説法は是迄なり。願以此功德普及於一切。我等與衆生皆共成。佛道修行の爲なれば、地蔵身を捨て人を助くべし。

音高し一制する

さまされ一脚をさまさるること妨害なり

地蔵道に心を留めよかし。レテ調「なうく其御船へ物申さう。ワヤ調「是は山田矢橋の渡舟にてもなきものを、何しに招かせ給ふらん。レテ調「我も旅人にあらざれば、渡りの舟とも申さばこそ。其御舟へ物申さう。ワヤ調「さて此舟をば何舟と御覽じて候ぞ。レテ調「其人買舟の事さうよ。ワヤ調「あよ音高し何とく。レテ調「道理々々、よそにも人や白波の、音高しとは道理なり。ひとかひと申しつるは、其舟漕ぐ權の事さうよ。ワヤ調「船には唐船といふ物あり、商人買と云ふ權はなきに。レテ調「水の煙の霞をば、一霞二霞、一汐二汐なんどといへば、諸今漕ぎ初むる舟なれば、一權舟とは僻事か。ワヤ調「實に面白くも述べられたり。さてく何の用やらん。レテ調「是は自然居士と申す説經者にて候が、説法の場さまされ申す、恨申しに來りたり。ワヤ調「説法には道理を述べ給ふ。我等に僻事なきも

笑止一困りある

のを。レテ調「御僻事とも申さばこそとにかくに、本の小袖は參らす。舟に離れて叶はじと、裳裾を波に浸しつよ、船に取り付き引きとどむ。ワヤ調「あら腹立やさりながら、衣に恐れて得は打たず、是も汝が科ぞとて、櫓權を持つて散々に打つ。レテ調「打たれて聲の出でざるは、若し空しくやなりつらん。ワヤ調「何しに空しくなるべきと、レテ調「引き立て見れば、ワヤ調「身には繩、地蔵口には綿の轡をはめ、泣けども聲が出でばこそ。レテ調「あら不便の者や、やがて連れて歸らうするぞ心安く思ひ候へ。ワヤ調「なう自然居士舟より御下り候へ。レテ調「此者を賜はり候へ。小袖を召され候上は御損も候まじ。ワヤ調「參らせたくは候へどもことに笑止が候。レテ調「何事にて候ぞ。ワヤ調「さん候我等が中に大法の條、それを如何にと申すに、人を買ひ取つて再び返さぬ法にて候程に、え參らせ候まじ。レテ調「委細承り候。又我等が中にも堅き大法の候、かやうに身を徒になす者に行き逢ひ、若し助け得ねば、再び庵室へ歸らぬ法にて候程に、其方の法をも破るまじ、又此方の法をも破られ申すまじ、所詮此者と連れて奥陸奥の國へは下るとも、舟よりは下

ふつつと一決して
持て扱ふ持て
餘す

まじく候。ワヤ調「舟より御下りなくは拷訴を致さう。シテ調「拷訴といつば捨身の行。ワヤ調「命
を取らう。シテ調「命を取るともふつつと下りまじい。ワヤ調「何と命を取るともふつつと下
りまじいと候や。シテ調「なかくの事。ワヤ調「いや此自然居士に持て扱うて候よ。なう
渡り候か。ワヤ調「何事にて候ぞ。ワヤ調「さて是は何と仕り候べき。ワヤ調「是は御歸しな
うては叶ひ候まじ。よくく物を案じ候に、奥より人商人の都に上り、人に買ひかねて、
自然居士と申す説經者を買ひ取り下りたるなんと申し候はど、一大事にて候程に、御
歸しなうては叶ひ候まじ。ワヤ調「我等も左様に存し候さりながら、唯歸せば無念に候程に、
色々になぶつて歸さうするにて候。ワヤ調「尤も然るべう候。ワヤ調「なうく自然居士急い
で舟より御上り候へ。シテ調「いやく聊爾には下りまじく候。ワヤ調「何の聊爾の候べき只
御上り候へ。シテ調「あよ船頭殿の御顔の色こそ直つて候へ。ワヤ調「いやちつとも直り候ま
じ。又是なる人の申され候は、今度始めて都へ上りて候が、自然居士の舞の事を承り
及びて候。一さし舞うて御見せあれと申され候。シテ調「總じて居士は舞まうたる事はなく

聊爾一絶忽

無念一今は損と
謠ふ

抑一これより舞
になる
黃帝一五帝第の

候。ワヤ調「それは御僞にて候。一年今のごとく説法御述へ候ひし時、いで聽衆の眠覺ま
さんと、高座の上にて一さし御舞ひ有りし事、奥までも其聞え候程に、一さし御舞ひ候
へ。シテ調「おうそれは狂言綺語にて候程に、さやうの事も候べし。舞をまひ候はど此者を
賜り候べきか。ワヤ調「先御舞を見て、其時の仕義によつて參らせ候べし。是に烏帽子の候、
是を召して御舞ひ候へ。シテ調「よくく物を案するに、終には此者を賜はらんすれども、
唯返せば無念なり、居士を色々になぶつて恥を與へうと候な。餘りにそれはつれなう
候。ワヤ調「何のつれなう候べき。シテ調「志賀辛崎の一つ松、地謡「つれなき人の心かな、
シテ、グリ調「抑舟の起りを尋ぬるに、水上黃帝の御宇より事起つて、地謡「流れ貨狄が謀
より出でたり。シテ、サシ調「こよに又蚩尤といへる逆臣あり。地謡「彼を亡さんとし給ふに、烏
江といふ海を隔てよ、攻むべき様もなかりしに、クセ黃帝の臣下に、貨狄と云へる士卒あ
り。ある時貨狄庭上の、池の面を見渡せば、折節秋の末なるに、寒き嵐に散る柳の、一
葉水に浮みしに、又蜘蛛といふ蟲、是も虚空に落ちけるが、其一葉の上に乗れつと、次第

せんの子一前
(すゝむ)の古字
將の事なると
いふ
龍頭一龍頭なり
んとの説あり
龍頭一龍頭の
頭と云ふ水鳥
の首を船の首に
作り置く

次第にさよがにの、いとほかなくも柳の葉を、吹きくる風に誘はれ、汀に寄りし秋露の、立ちくる蜘蛛の振舞、實にもと思ひそめしより、たくみて舟を造れり。黄帝是に召され、烏江を漕ぎ渡りて、蚩尤を安く亡し、御代を治め給ふ事、一萬八千歳とかや。レテ然れば船のせんの子を、地誦「公にすゝむと書きたり。さて又天子の御顔を、龍頭と名づけ奉り、舟を一葉と云ふ事、此御字より始まれり、又君の御座舟を、龍頭龍首と申すも、此御代より起れり。

こつかい谷下と
書き谷下石こつ
めの修行の事と
いふ
影のこゝは影
を摩る一方の竹

如何に申し候、我等が舟を龍頭龍首と御祝ひ候事過分に存じ候。とてもものに影を摺つて御見せ候へ。レテ「さらば竹を賜はり候へ。ワヤ調「折節船中に竹が候はぬよ。レテ「苦しからず候。彼佛の難行苦行し給ひしも、一切の衆生を助けん爲ぞかし。居士も亦其如く、身をこつかに砕きても、彼者を助けん爲なり。夫れ影の起りを尋ぬるに、東山に在る御僧の、扇の上に木の葉のかよりしを、持ちたる数珠にてさらりくと拂ひしより、さよらといふ事始りたり。居士も亦其如く、さよらのこには百八の数珠、さよらの竹には扇

手を摺る一拂み
を乞ふこと

池の水の一朗詠
集の池水東頭風
度解を引く

の骨、おつ取り合はせ是を摺る、詠所は志賀の浦なれば、地誦「さよ波や、さよ波や、志賀辛崎の松の上葉を、さらりくとさよらのまねを、珠数にてすれば、さよらより猶手をも摺る物、今は助けてたび給へ。

「手を摺るなどと、承り候程に参らせ候ふべし。とてもものに羯鼓を打つて御見せ候へ。地誦「本より鼓は波の音、(羯鼓)本より鼓は波の音、寄せては岸をどうとは打ち、雨雲迷ふ鳴神の、とどろくと鳴る時は、降來る雨ははらりと、小笹の竹の影をすり、池の水のとうくと、鼓を又打ち影を猶摺り、狂言ながらも法の道、今は菩提の岸に寄せくる、船の内より、ていとうと打連れて、共に都に上りけり。共に都に上りけり。

大會

梗概 山僧に命を救はれたる天狗、その恩返しに、釋迦牟尼佛説法の靈場のさまを、まのあたりに現出して見する事を作る。此の物語の出所十訓抄なり。(五番目)

シテ 天狗(前は客僧) ツレ 帝釋天
ワキ 山僧

教内教外一教内とは釋迦の説法を圖きて得道す教外とは自ら悟るなり
遮那教主一六日如来
一佛乘の嶺一比叡山

ワキ、サレテ「それ一代の教法は、五時八教をけづり、教内教外を分たれたり。五時と云つば、華嚴阿含方等般若法華、四教とは是れ藏通別圓たり。遮那教主の秘藏を受け、五想成身の峰を開きしより此方、たれか佛法を崇敬せざらん。けに有難き御法とかや。上歌地謡「鷲の御山をうつすなる、鷲の御山をうつすなる。一佛乘の嶺には、眞如の惠日まとかなり。鳥三寶を念じて、風常樂と音づるよ、けにたぐひなき深山かな。けにたぐひなき深山かな。」

客僧一山伏

東北院一一條の南京橋の東

シテ、サレテ「月は古殿の燈を挑け、風は空廊の簾となつて、石上に塵なく滑らかなる。苦路を歩みよるべの水。あらずこの山洞やな。いかに此庵室の内へ案内申し候。ワキ、我禪閑の窓に向ひ心を澄ます處に、案内申さんとは如何なるものぞ。シテ、是は此あたりに住居する客僧にて候。我既に身まかるべきを、御憐みにより命助かり申すこと、かへすがへすも有難う候。此事申さん爲に是まで参りて候。ワキ、是は思ひもよらぬ事を承り候ものかな。命を助け申すとは更に思ひもよらず候。シテ、都東北院のあたりにての御事なり、定めて思召し合はすべし。かばかりの御志などは申し上げざらん。此報恩に何事にもあれ、御望みの事候はど、利那に通へ申すべし。ワキ、けにさる事のありしなり。又望みを適へ給はん事、此世の望更になし。たどし釋尊靈鷲山にての御説法のありさま、まのあたりに拜み申したくこそ候へ。シテ、それこそ易き御望みなれ。まことさやうに思召さば、即ち拜ませ申すべし。さりながら、貴しと思召すならば、必ず我爲悪かるべし。かまへて疑ひ給ふなと、上歌地謡返すくも約諾し、かへすくも約諾し、

それ山は三ヶ
管子に山不静
土石故能成其
高また葉の李
斯の文に嶺山
不讓土壙故能
成其大河海不
讓細流故能就
其深の意
迦葉阿難一
尊者とも釋迦の高
弟

さあらばあれに見えたる、杉一村に立ちよりて、目をふさぎ待ち給ひ、佛の御聲のきこえなば、其時兩眼を開きて、よくく御覽候へと、云ふかとみれば雲霧、降りくる雨の足音、ほろくと歩み行く道の、木の葉をさつと吹きあけて、梢に上り谷に下り、かき消すやうに失せにけり。かき消すやうに失せにけり。(中入)
後レテ誦「それ山はちひさき土くれを生ず、かるがゆるに高き事をなし、海は細き流を厭はず、故に深き事をなす。上歌地誦「ふしぎや虚空に音樂ひどき、ふしぎや虚空に音樂ひどき、佛の御聲あらたに聞ゆ。兩眼を開きあたりを見れば、シテ誦「山は即ち靈山となり、地誦「大地は金瑠璃、シテ誦「木は又七重寶樹となつて、地誦「釋迦如來獅子の座に、現れ給へば、普賢文殊左右に居給へり。菩薩聖衆雲霞の如し。砂の上には龍神八部、おのく拜し圍繞せり。シテ誦「迦葉阿難の大聲聞、地誦「迦葉阿難の大聲聞は、一面に坐せり。空より四種の花ふりくだり、天人雲に連り、微妙の音樂を奏す。如來肝心の法文を説き給ふ。實に有難き景色かな。ヲテ誦「僧正其時たちまちに、地誦「僧正其時たちまちに、信心を發し隨喜の

喜見城一帝釋天
の居城
大會一大法會

涙眼に浮み、一心に合掌し、歸命頂禮大恩教主、釋迦如來と、恭敬禮拜するほどに、俄に台嶺響き震動し、帝釋天よりくだり給ふを、見るより天狗おのく騒ぎ、恐れをなしける不思議さよ。
上歌地誦「利那が間に喜見城の、利那が間に喜見城の、帝釋あらはれ數千の魔術を、あさまになせば、有りつる大會ちりくになつてぞ見えたりける。(舞)帝釋「帝釋此時怒り給ひ、地誦「帝釋此時怒り給ひ、かばかりの信者をなど驚かすと、忽ちさんぐに苦を見せ給へば、羽風をたてと翔らんとすれども、もちり羽になつて飛行も叶はねば、恐れ奉り、拜し申せば、帝釋「即ち雲路をさして、上らせ給ふ。其時天狗は岩根を傳ひ、下るとぞ見えし、岩根を傳ひ下ると見えて、深谷の岩洞に入りにけり。

内十八

三輪

梗 三輪明神、里の女として玄賓僧都の庵を訪ひ、後神と示現して、神樂を奏することを作る。神事能の一つなり。蓋し三輪の大物主神の神話は、古事記舊事記に見え、歌道の方よりは八雲御抄にも見ゆ。(四番目)

シテ 三輪明神(前は女) ワキ 玄賓僧都

ワキ「是は、和州三輪の山陰に住まひする玄賓と申す沙門にて候。さても此程何くともなく女性一人毎日櫛鬘伽の水を汲みて來り候。今日も來りて候はど、如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。

シテ次第「三輪の山本道もなし、三輪の山本道もなし、檜原の奥を尋ねん。ヤレ實にや老少不定とて、世のなかくに身は残り、幾春秋をか送りけん。あさましやなす事なくて徒

玄賓一河内に生る相武御宇の人

山頭夜戴、孤輪
月、洞、口、朝、吐、一
片、雲、一、百、聊、抄
解、の、時
山、田、も、る、一、種、古
今、集、に、出、づ、玄、賢
の、歌、を、は、つ、は
案、山、子、な、り、僧、都
に、掛、く
山、影、入、門、推、不、
出、月、光、節、地、拂、
還、生、一、百、聊、抄、解、
の、詩

我庵は三輪の山
本戀しくはとむ
ちひ來ませ杉立
てる門一古今集

に、憂き年月を三輪の里に、住まひする女にて候。又此山陰に立賓僧都とて、貴き人の御入り候程に、いつも機關伽の水を汲みて参らせ候。今日もまた参らばやと思ひ候。ワヤ謡「山頭には夜孤輪の月を戴き、洞口には朝一片の雲を吐く。山田もるそほづの身こそ悲しけれ、秋はてぬれば訪ふ人もなし。シテ謡「如何に此庵室の内へ案内申し候はん。ワヤ謡「案内申しさんとはいつとも來れる人か。シテ謡「山影門に入つて推せども出でず、ワヤ謡「月光地に鋪いて掃へども又生ず。シテ、ワヤ謡「鳥聲とこしなへにして、老生としづかなる山居地誦「柴の編戸を押し開き、かくしも尋ね切機、罪を助けてたび給へ。上歌地誦「秋寒き窓の内、秋寒き窓の内、軒の松風うちしぐれ、木の葉かきしく庭の面、門は葎や閉ちつらん。下樋の水音も、昔に聞えて静なる、此山住ぞ寂しき。シテ謡「如何に上人に申すべき事の候。秋も夜寒になり候へば、御衣を一重賜はり候へ。ワヤ謡「易き間の事此衣を参らせ候べし。シテ謡「あら有難や、さらば御暇申し候はん。ワヤ謡「暫く、さてく、御身は何くに住む人ぞ。シテ謡「妾が柄は三輪の里、山本近き處なり。其上我庵は、三輪の山本戀しくはとはよみた

の歌之れを三輪
の神歌と云ひ傳
ふ

松はしるしも
今昔物語の「我
宿の松はしるし
もなかりけり杉
村なちば尋ね來
てましを引く
三つ輪一身口意
の三衆

れども、何しに我をば訪ひ給ふべき。なほも不審に思召さば、誰とむらひ來ませ、地誦「杉立てる門をしるしにて、尋ね給へと云ひ捨て、かき消すごとくに失せにけり。(中入)ワヤ上歌誦「此草庵を立ち出でて、此草庵を立ち出でて、行けば程なく三輪の里、近きあたりか山陰の、松はしるしもなかりけり。杉村ばかり立つなる、神垣は何くなるらん。神垣は何くなるらん。不思議やな是なる杉の二本を見れば、有りつる女人に與へつる衣の懸かりたるぞや。詞「寄りて見れば衣の褙に金色の文字すわれり。讀みて見れば歌なり。謡三、つの輪は清く淨きぞ唐衣、くると思ふな取ると思はじ。後シテ謡「千早振、神も願の有る故に、人の値遇に逢ふぞうれしき。ワヤ謡「不思議やな是なる杉の木陰より、妙なる御聲の聞えさせ給ふぞや。願はくは末世の衆生の願をかなへ、御姿をまみえおはしませと、念願深き感涙に、墨の衣を濡らすぞや。シテ謡「恥かしながら我姿、上人にまみえ申すべし。罪を助けてたび給へ。ワヤ謡「いや罪科は人間にあり。是は妙なる神道の、シテ謡「衆生濟度の方便なるを、ワヤ謡「暫し迷ひの、シテ謡「人心や。上歌地誦「女

禊—小月衣の類
古くは禊の類を
云へり

五濁—即、劫、煩
惱、見、有情の五
つ

結ぶや早玉の—
結早玉共に熊野
の神

姿と三輪の神、女姿と三輪の神、禊掛帯引きかへて、只祝子が著すなる、烏帽子狩衣
裳裾の上に掛け、御影あらたに見え給ふ。かたじけなの御事や。

夫れ神代の昔物語は、末代の衆生の爲め、濟度方便の事業、品々もつて世の爲
なり。シテ、サシ誦「中にも此敷島は、人敬つて神力増す。地誦「五濁の塵に交り、しばし心は
足引の、大和の國に年久しき、夫婦の者あり。八千代をこめし玉椿、變らぬ色を頼み
けるに、アセされども此人、夜は來れども晝見えず。ある夜の睦言に、御身如何なる故
によりかく年月を送る身の、晝をば何と烏羽玉の、夜ならで通ひ給はぬは、いと不審多
き事なり、唯同じくはとこしなへに、契をこむべしと有りしかば、彼人答へ云ふやう、實
にも姿は羽束師の、もりてよそにや知られなん。今より後は通ふまじ。契も今背ばかり
なりと、懇に語れば、さすが別れの悲しさに、歸る所を知らんとて、苧環に針をつけ、
裳裾に之を閉ちつけて、跡をひかへて慕ひ行く。レテ誦「まだ青柳の糸長く、地誦「結ぶや早
玉の、おのが力にさよがにの、糸くり返し行く程に、此山本の神垣や、杉の下枝に留り

相好—姿

面白や—岩戸明
けて世明るくな
れる時諸神の稱
へし語
一體分身—異身
同體

たり。こはそもあさましや、契りし人の姿か、其糸の三わけ残りしより、三輪のしるし
の過ぎし世を、語るに付けて恥かしや。

ロンギ地誦「實に有難き御相好、聞くにつけても法の道、猶しも頼む心かな。レテ誦「とても
神代の物語、委しくいざや現し、彼上人を慰めん。地誦「先は岩戸の其初め、隠れし神を
出ださんとて、八百萬の神遊び、是ぞ神樂の始なる。レテ誦「ちはやぶる、(神樂)ワカ天の岩戸
を引き立てよ、地誦「神は跡なく入り給へば、常闇の世と早なりぬ。レテ誦「八百萬の神たち
岩戸の前にて之を歎き、神樂を奏して舞ひ給へば、地誦「天照大神其時に、岩戸を少し開
き給へば、又常闇の雲晴れて、日月光り輝けば人の面白々と見ゆる。レテ誦「面白やと神の
御聲の、地誦「妙なる始の物語、ヤリ思へば伊勢と三輪の神、思へば伊勢と三輪の神、一
體分身の御事、今更何と岩倉や、其關の戸の夜も明け、かく有難き夢の告、覺むるや名
残なるらん。覺むるや名残なるらん。

安宅

梗 概

安宅の何たるを知らぬ人も、勳進帳の外題ならば合點すべし。能樂歌舞伎を通じて最も有名なる物の一つなり。言ふも事々しけれど、義經次第に窮し、今ははや安宅の關に、身の危きにかかりける折しも、辨慶の苦忠功を奏し、虎口を免れて奥州へ落行く事を作る。辨慶の沈勇、義經の述懐、富樫が武士の情、三つ巴に絡まりて、脚色頗る整ひ、人をして一掬の涙を催さしむ。(四番目)

シテ辨慶 子方義經 ツレ同行山伏
狂言強力 ワキ富樫

富樫一加賀の地名なり具本義經記に富樫介家直が關所と見ゆ作リ山伏一領の山伏固く選み申せ固く吟味せよとなり

ワキ詞「かやうに候者は、加賀國富樫の何某にて候。さても頼朝義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿十二人の作、山伏と爲つて、奥へ御下向の由頼朝聞し召し及ばれ、國々に新關を立て、山伏を固く選み申せとの御事にて候。さる間此所をば某承つて山伏を留め申し候。今日も堅く申し付けばやと存じ候。如何に誰かある。狂言詞「御前に候。

鴻門云々一高祖項羽と鴻門に會す高祖危し樊噲高祖を擁して入り勢の三郎一頼朝盛河の次郎一清片岡一十郎兼房増尾一十郎兼房二月の十日の夜一文治三年とみ是やこの一線九の歌を引く山陰ナニヤ古今集一山陰ナニヤ何れ都の境なるらん一近江越前乳山一近江越前比の國境一近江越前板取山一近江越前浅水一近江越前三國一越前原一越前花の安宅一花の安宅は加賀拵く安宅は加賀

ワキ詞「今日も山伏の御通りあらばこなたへ申し候へ。狂言詞「畏つて候。ツレ次第「旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしをるらん。ツレ鴻門楯破れ都の外旅の衣、日も遙々の越路の末、思ひやるこそ遙なれ。ツレ「さて御供の人々には、ツレ「勢の三郎駿河の次郎、片岡増尾常陸坊、ツレ「辨慶は先達の姿となりて、ツレ「主従以上十二人、未だ習はぬ旅姿、袖の篠懸露霜を、今日分けそめていつまでの、限りもいさや白雪の、越路の春に急ぐなり。上歌時しも頃は二月の、時しも頃は二月の十日の夜、月の都を立ち出でて、是やこの、行くも歸るも別れては、行くも歸るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、山隠す、霞ぞ春は恨めしき。霞ぞ春は恨めしき。下歌波路遙に行舟の、波路遙に行舟の、海津の浦に著きにけり。東雲はくや明け行けば、浅茅色づく有乳山、上歌氣比の海、宮居久しき新垣や、松の木芽山、なほ行くさきに見えたるは、柚山人の板取、河頼の水の浅水や、末は三國の湊なる、蘆の篠原波よせて、靡く嵐の烈しきは、花の安宅に著きにけり。花の安宅 著きにけり。

無異一無事
につくい山伏一
一庵の山伏に見
ゆれども
強力一從傷

シテ判「御急ぎ候程に、これははや安宅の湊に御著にて候。暫く此所に御休あらうするに
て候。判官判「如何に辨慶。シテ判「御前に候。判官判「只今旅人の申して通りつる事を聞いてあ
るか。シテ判「いや何とも承らす候。判官判「安宅の湊に新關を立てよ、山伏を堅く選むと
こそ申しつれ。シテ判「言語道斷の御事にて候ものかな。さては御下向を存じて立てたる關
と存じ候。是はゆよしき御大事にて候。まづ此傍にて暫く御談合あらうするにて候。
是は一大事の御事にて候間、皆々心中の通りを御異見御申しあらうするにて候。
ツレ判「我等が心中には何程の事の候べき、唯打ち破つて御通りあれかしと存じ候。
シテ判「暫く、仰せの如く此關一所打ち破つて御通りあらうするは易き事にて候へども、御
出で候はんずる行末が御大事にて候。唯何ともして無異の義が然るべからうすると存じ
候。判官判「ともかくも辨慶計らひ候へ。シテ判「畏つて候。某急度案じ出だしたることの
候。我等を始めて皆々につくい山伏にて候が、何と申しても御姿隠れ御座なく候間、此
まよにては如何と存じ候。恐れ多き申事にて候へども、御篠懸をのけられ、あの強力が

紅一べに花のこ
と人品は如何に
かくしても願は
るるとの意

負ひたる笈をそと御肩に置かれ、御笠を深々と召され、如何にもくたびれたる御體にて、
我等より跡に引きさがつて御通り候はど、なか／＼人は思ひもより申すまじきと存じ候。
判官判「實に是は尤にて候。さらば篠懸を取り候へ。シテ判「畏つて候。如何に強力。判官判「御
前に候。シテ判「笈を持ちて來り候へ。判官判「畏つて候。シテ判「汝が笈を御肩に置かるゝ事
は、なんほう冥加もなき事にてはなきか。先汝は先へ行き關の様體を見て、眞に山伏を
選むか、又さやうにもなきか、懸に見て來り候へ。判官判「レカ、レテ判「さらば御立ち
あらうするにて候。實にや紅は園生に植ゑても隠れなし。ツレ判「強力にはよも目を懸け
じと、御篠懸を脱ぎ替へて、麻の衣を御身にまとひ、シテ判「あの強力が負ひたる笈を、
判官判「義經取つて肩に懸け、ツレ判「笈の上には雨皮形箱取り付けて、判官判「綾菅笠にて顔を
隠し、ツレ判「金剛杖にすぎり、判官判「足痛けなる強力にて、地盤よろ／＼として歩み給ふ
御右様ぞ痛はしき。シテ判「我等より跡に引き下つて御出あらうするにて候。さらば皆々御
通り候へ。ツレ判「承り候。

任言詞「如何に申し候。山伏達の大勢御通り候。ワヤ詞「何と山伏の御通りあると申すか心得てある。なうく、客僧達は是は關にて候。レテ詞「承り候。是は南都東大寺建立の爲に、國へ客僧を遣はされ候。北陸道をば此客僧承つて罷り通り候。先勤めに御入り候へ。ワヤ詞「近頃殊勝に候。勤めには参らうするにて候さりながら、是は山伏達に限つて留め申す關にて候。レテ詞「さて其謂れは候。ワヤ詞「さん候。頼朝義經御中不和にならせ給ふにより、判官殿は奥秀衡を頼み給ひ。十二人の作り山伏となつて、御下向の由其聞え候間、國々に新關を立てよ、山伏をかたく選み申せとの御事にて候。さる間此所をば某承つて山伏を留め申し候。殊に是は大勢御座候間、一人も通し申すまじく候。レテ詞「委細承り候。それは作り山伏をこそ留めよと仰せ出だされ候ひつらめ、よも誠の山伏を留めよとは仰せられ候まじ。狂言「いや昨日も山伏を三人迄斬つる上は。レテ詞「さて其斬つたる山伏は判官殿か。ワヤ詞「あらむつかしや問答は無益、一人も通し申すまじい上は候。レテ詞「さては我等をも是にて誅せられ候はんするな。ワヤ詞「なかくの事。レテ詞「言語道斷かよる

五智一法界體性、大圓鏡、平等妙觀察、成所作の五智
 十二因縁一無明行、識、名色、六入、觸、受、愛、所有、生、老、死を煩惱の十二因といふ
 九會一印、理趣降三世、降三世三昧、成身、羯磨、微細、供養、四印の九會
 阿吽の二字一字母の本をれば之を尊ぶ

不祥なる所へ來かよつて候ものかな、此上は力及ばぬ事、さらば最期の勤を始め、尋常に誅せられうするにて候。皆々近う渡り候へ。ツレ詞「承り候。
 レテ詞「いでく最期の勤を始めん、夫れ山伏といつば、役の優婆塞の行義を受け、ツレ詞「其身は不動明王の尊容をかたどり、レテ詞「兜巾といつば五智の寶冠なり。ツレ詞「十二因縁の裝をするて戴き、レテ詞「九會曼荼羅の柿の篠懸。ツレ詞「胎藏黑色の脚絆をはきレテ詞「さて又八目の草鞋は、ツレ詞「八葉の蓮華を踏まへたり。レテ詞「出で入る息に阿吽の二字を稱へ、ツレ詞「即心即佛の山伏を、レテ詞「こよにて討ちとめ給はん事、レテ詞「明王の照覽計り難う、レテ詞「熊野權現の御罰を當らん事、ツレ詞「立ちどころにおいて、レテ詞「疑あるべからず。地誦「唵阿吽羅吽欠と、數珠さらりと押しもめば、ワヤ詞「近頃殊勝に候。先に承り候ひつるは、南都東大寺の勤進と仰せ候間、定めて勤進帳の御座なき事は候まじ。勤進帳を遊ばされ候へ。是にて聽聞申さうするにて候。レテ詞「何と勤進帳を讀めと候や。ワヤ詞「なかくの事。レテ詞「心得申して候。もとより勤進帳はあらばこそ。

注家一往復文
(書簡文)のこと
夫れ以下勸進
帳の文

盧舍那佛一光明
遍照佛なり大佛
のこと

笈の中より往來の卷物一卷取り出だし、勸進帳と名付けつゝ、誦たからかにかこそ讀み
上げけれ。夫れつらく、惟れば、大恩教主の秋の月は、涅槃の雲にかくれ、生死長夜
の長き夢、驚かすべき人もなし。こゝに中頃帝おはします、御名をば聖武皇帝と名付け
奉り、最愛の夫人に別れ、戀慕やみがたく、涕泣眼に荒く、涙玉を貫く思ひを、善途に
翻して盧舍那佛を建立す。かほどの靈場の、絶えなん事を悲しみて、俊乗坊澄源諸國
を勸進す。一紙半錢の奉財の輩は、此世にては無比の樂に誇り、當來にては、數千蓮
華の上に座せん。歸命稽首敬つて白すと、天も響けと讀み上げたり。ワヤ馬關の人々肝を消
し、地誦恐れをなして通しけり。恐れをなして通しけり。ワヤ馬關急で御通り候へ。ワヤ馬關承
り候。

狂言詞「如何に申し上げ候、判官殿の御通り候。ワヤ馬關如何に是なる強力とまれとこそ。
ワヤ馬關「すは我君をあやしむるは、一期の浮沈極まりぬと、皆一同に立ち歸る。ワヤ馬關「あよ
暫く。あわてよ事を仕損ずな。やあ何とてあの強力は通らぬぞ。ワヤ馬關「あれは此方より留

落居一事件の落
著

めだれ眼一見苦
しき「驚

めて候。ワヤ馬關「それは何とて御とめ候ぞ。ワヤ馬關「あの強力がちと人に似たると申す者の候
程に、さて留めて候よ。ワヤ馬關「何と人が人に似たるとは、珍しからぬ仰せにて候。さて誰
に似て候ぞ。ワヤ馬關「判官殿に似たると申す者の候程に、落居の間留めて候。ワヤ馬關「や、言
道斷、判官殿に似申したる強力めは一期の思出な。腹立や日高くは、能登の國まで指さ
うずると思ひつるに、わづかの笈負うて跡に下ればこそ人も怪むれ。總じて此程、憎
つくしにくしと思ひつるに、いで物見せてくれんとて、金剛杖をおつ取つて散々に打擲
す。通れとこそ。や、笈に目を懸け給ふは、誦盗人さうな。ワヤ馬關「かたぐは何故に、何故に
かほど賤き強力に、太刀刀を抜き給ふは、めだれ顔の振舞は、臆病の至かと、十一人の
山伏は、打刀ぬきかけて、勇みかよれる有様は、如何なる天魔鬼神も、恐れつべうぞ見
えたる。ワヤ馬關「近頃誤りて候。はやく御通り候へ。
ワヤ馬關「先の關をば早拔群に程隔たりて候間、此所に暫く御休みあらうするにて候。皆々近
う御参り候へ。如何に申し上げ候。さても只今は餘りに難義に候ひし程に、不思議の働

を仕り候ふ事、是と申すに君の御運盡きさせ給ふにより、今辨慶が杖にも當らせ給ふと思へば、いよくあさましうこそ候へ。判官「さては悪しくも心得ぬと存ず。如何に辨慶、さても只今の機轉更に凡慮より爲すわざに非ず。唯天の御加護とこそ思へ。諸關の者ども我を怪しめ、生涯限有りつる處に、とかくの是非をばもんだはずして、唯眞の下人の如く、散々に打つて我を助くる、是れ辨慶が謀に非ず八幡の、地蔵御託宣かと思へば、忝くぞおほゆる。アリ地蔵「夫れ世は末世に及ぶといへども、日月はいまだ地に落ち給はず、たとひ如何なる方便なりとも、正しき主君を打つ杖の、天罰に當らぬことや有るべき。判官「實にや現在の果を見て、過去未來を知ると云ふ事、地蔵「今に知られて身の上に、憂き年月の二月や、下の十日の今日の難を遁れつるこそ、不思議なれ。判官「唯さながらに十餘人、地蔵「夢の覺めたる心地して、互に面を合せつよ、泣くばかりなる有様かな。クセ、然るに義經、弓馬の家に生れ来て、命を頼朝に奉り、屍を西海の波に沈め、山野海岸に、起き臥し明かす武士の、鎧の袖枕、片敷く際も波の上、ある時は

西海一屋島壇浦の合戦をさす

山脊の云々一谷の戦をさすとかく一明石の門と言辭く

遠道云々一東南は吉野西北は北國落の事を云へるなりん

舟に浮み、風波に身を任せ、ある時は山脊の、馬蹄も見えぬ雪の内に、海少しある夕波の、立ちくる音や須磨明石の、とかく三年の程もなく敵を亡し靡く世の、其忠勤も徒に、なりはつる此身のそも何といへる因果ぞや。判官「實にや思ふ事、叶はねばこそ憂き世なれと、地蔵「知れどもさすがなほ、思ひ返せば梓弓の、直なる人は苦しみて、讒臣は彌増に世に在りて、遠遠東南の雲を起し、西北の雪霜に、責められ埋る憂き身を、ことわり給ふべきなるに、唯世には、神も佛もましまさぬかや。恨めしの憂き世や、あら恨めしの憂き世や。

判官「如何に誰かある。判官「御前に候。判官「さても山伏達に聊爾を申して、餘りに面目もなく候程に、追つ付き申し酒を一つ参らせうするにてあるぞ。汝は先へ行きて留め申し候へ。判官「畏つて候。如何に申し候。先には聊爾を申して餘りに面目もなく候とて、關守の是まで酒を持たせて参られて候。判官「言語道断の事、やがて御目に懸らうするにて候。判官「實にくも是も心得たり。人の情の盃に、浮けて心を取らん

心なくれそ一袖
断すな

三塔一軒山には
東塔西塔横川と
あり
舞延年一兩都北
嶺にて行はるる
舞の一種

鳴るは瀧の水日
は照るとも絶え
ずとうた一り延
年の唱歌
虎の尾を云々一
危き所を通るる
形容

とや 是に付きて なほく人、謡心なくれそ吳織、地謡怪しめらるな面々と、辨慶
に諫められて、此山陰の一宿に、さらりと圓居して、ところも山路の菊の酒を飲まうよ。
シテ謡面白や山水に、地謡面白や山水に、盃を浮めては、流に引かよる曲水の、手まづ
遮る袖ふれて、いざや舞を舞はうよ。本より辨慶は三塔の遊僧、舞延年の時の和歌、是
なる山水の、落ちて巖に響くこそ、地謡鳴るは瀧の水。シテ謡たべ酔ひて候程に、先達御
酌に参らうするにて候。ワキ謡「さらばたべ候べし。とてもものに先達一さし御まひ候へ。
地謡鳴るは瀧の水、(男舞)シテ謡鳴るは瀧の水、地謡日は照るとも絶えずとうたり、絶えず
とうたり とくく立てや手束弓の、心ゆるすな關守の人々、暇申してさらばよとて、
笈をおつ取り肩に打懸け、虎の尾を履み毒蛇の口を、遁れたる心地して、陸奥國へと下
りける。

東北

梗概

東北院の名木の梅につきて、和泉式部の靈現れて物語する
事を作る。末段歌道の事を交へ説けり。東北院は上東門
院御所もとの法成寺内也。此曲一名軒端梅と云ふ。(靈物)

シテ 和泉式部(前は女) ワキ 僧

ワキ年立ち返る春なれや、シテ年立ち返る春なれや、地謡花の都に急がん。ワキこれは東國
方より出でたる僧にて候。我未だ都を見ず候ほどに、此春思ひたち都に上り候。
ワキ春立つや、霞の關を今朝越えて、地謡霞の關を今朝越えて、はてはありけり武藏野
を、分け暮らしつと跡遠き、山復山の雲を経て、都の空も近づくや、旅までのどけかる
らん。旅までのどけかるらん。

ワキ急ぎ候程に、是ははや都に著きて候。又これなる梅を見候へば、今を盛と見えて候。
いかさま名のなき事は候まじ、此あたりの人に尋ねばやと思ひ候。狂言「さ
ワキ「さ

和泉式部—和泉守道真妻のち藤原保昌に嫁す

好文木—晉哀帝の故事
鶯宿梅—貫之の女の故事
上東門院—一條天皇の中宮

ては此梅は和泉式部と申し候ぞや。暫くながめばやと思ひ候。

シテ訓「なうくあれなる御僧、其梅を人に御尋ね候へば、何と教へ参らせて候ぞ。ワヤ訓「さん候人に尋ねて候へば、和泉式部とこそ教へ候ひつれ。シテ訓「いやさやうにはいふべからず。梅の名は好文木、又は鶯宿梅などところ申すべけれ。知らぬ人の申せばとて用ひ給ふべからず。此寺未だ上東門院の御時、和泉式部此梅を植ゑ置き、軒端の梅と名づけつと、目離れせずながめ給ひしとなり。誰かほどに妙なる花の縁に、御經をも讀誦し給はど、逆縁の御利益ともなるべきなり。訓「是こそ和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅にて候へ。ワヤ訓「さては和泉式部の植ゑ給ひし軒端の梅にて候ひけるぞや。又あの方丈は、和泉式部の御休所にて候か。シテ訓「中々の事、和泉式部のふしとなりしを、作りもかへず其まよにて、今に絶えせぬながめぞかし。ワヤ訓「ふしぎやさては古の名を残しおく形見とて、シテ訓「花も主を慕ふかと、年々色香もいやましに、ワヤ訓「さもみやびたる御氣色、シテ訓「猶も昔を、ワヤ訓「思ふかと、上歌地誦「年月を、ふるき軒端の梅の花、ふるき軒端の梅の花、主

天ぎる雪—空も
烟る程の雪古今
集の「梅の花そ
れとも見えず久
方の天ぎる雪の
なべて降れば」
を引く
春や昔—翠平の
歌を引く
とぶさ—木の梢

警噺品—法華經
の巻の名

を知れば久方の、天ぎる雪のなべて世に、聞えたる名残かや、和泉式部の花心。

ロンギ地誦「けにや古へを、聞くにつけても思ひ出の、春や昔の春ならぬ、我身ひとりぞ心なき。シテ訓「ひとりとも、いさしら雪の古事を、誰に問はまし道芝の、露の世になけれど、此花に住むものを、地誦「そも此花に住むぞとは、とぶさに散るか花鳥の、シテ訓「同じ道にと歸るさの、地誦「先だつ跡か、シテ訓「花の陰に、地誦「やすらふと見えしまよに、我こそ花の主よと、ゆふぐれなるの花の陰に、木がくれて見えざりき、木がくれて見えずなりにけり。(中入)

ワヤ上歌誦「終夜、軒端の梅の蔭に居て、軒端の梅の蔭に居て、花も妙なる法の道、迷はぬ月の夜と共に、此御經を讀誦する、此御經を讀誦する。一覽誦「あらありがたの御經やな、あらありがたの御經やな。只今讀誦し給ふは警噺品よなう。訓「思ひ出でたり闇浮のありさま。此寺未だ上東門院の御時、御堂の關白この門前を通り給ひしが、御車の内にて法華經の警噺品を高らかに讀み給ひしを、式部この門の内にて聞き、誦「門の外法の車の音き